

公開資料

## 研究開発成果実装支援プログラム

実装活動の名称「WEBを活用した園児総合支援システムの実装」

## 実装支援プロジェクト終了報告書

実装期間 平成22年10月～平成25年9月

実装機関名 筑波大学大学院

実装責任者  
氏 名 安梅 勅江

## 目次

<b>I 実装活動の名称と目標、3年間の活動要約</b> .....	<b>2</b>
(1) 実装活動の名称.....	2
(2) 最終目標.....	2
(3) 支援期間終了後の目標（到達点）.....	2
(4) 3年間の活動実績（要約）.....	2
①WEBを活用した園児総合支援システムの開発.....	2
②ホームページ「保育パワーアップ研究会」の政策と運用.....	4
③本システムの継続的運用と活用状況の評価.....	5
④本システムの内容的妥当性の評価.....	6
⑤「園児情報活用スキル尺度」の開発と信頼性・妥当性の検証.....	6
⑥本システムの継続的データ集積可能性の評価.....	7
⑦子どもと保護者のための支援グループ展開の確認.....	8
<b>II 実装活動の計画と実装活動</b> .....	<b>9</b>
1. 全体計画.....	9
2. 各年度の実装活動の具体的内容.....	10
(1) 実装支援期間中の目標.....	10
(2) 3年間の実装計画.....	10
(3) 進め方の概要.....	10
(4) WEBを活用した園児総合支援システムの開発.....	10
1) 開発方針とコンセプトの設定.....	11
2) 電子化した項目の設定と根拠.....	13
3) システムの画面構成、動作、活用に関する検討.....	14
4) 画面構成とアクセス権.....	15
4) -1 保育所・幼稚園・総合園.....	15
4) -2 保護者.....	16
4) -3 研究者.....	16
5) 安全性、信頼性、柔軟性.....	18
5) -1 安全性と信頼性.....	18
5) -2 柔軟性.....	18
6) システムの概要.....	19

6) -1	全体像.....	19
6) -2	園児一覧画面.....	20
6) -3	個人基本情報.....	21
6) -4	一般発達評価票.....	22
6) -5	社会的スキル尺度.....	23
6) -6	気になる子どもチェックリスト.....	24
6) -7	育児環境評価票.....	25
6) -8	保育環境評価票.....	26
6) -9	評価レポート.....	27
6) -10	支援設計レポート.....	28
(5)	ホームページ「保育パワーアップ研究会」の制作と運用.....	29
(6)	本システムの継続的運用と活用状況の評価.....	38
1)	体験版システムとシステム活用マニュアル作成.....	38
2)	保育所訪問.....	39
3)	保育専門職の資質向上支援（研修会）.....	39
4)	保育パワーアップ研究系の開催.....	39
4) -1	全体像.....	39
4) -2	レポート.....	41
4) -3	個人調査シート.....	42
4) -4	気になる子ども一覧表示.....	42
4) -5	育児環境評価票.....	43
4) -6	一般発達評価票.....	44
4) -7	ホーム画面の追加.....	45
4) -8	e-ラーニングシステムとして活用可能な保育支援設計レポート機能作成 .....	46
(7)	本システムの内容的妥当性の評価.....	48
1)	目的.....	48
2)	対象と方法.....	48
3)	分析方法.....	49
3) -1	重要カテゴリーの設定.....	49
3) -2	保育支援に活用できるシステム機能抽出.....	50
3) -3	カテゴリーの抽出.....	51

3) -4 妥当性の確認.....	51
4) 結果.....	51
4) -1 「園児情報記録システム」の内容的妥当性.....	51
5) 考察.....	54
5) -1 本システムがPDCA サイクル展開に寄与する可能性.....	54
5) -2 システム開発への提言.....	54
(8) 「園児情報活用スキル尺度」の開発と信頼性・妥当性の検証.....	56
1) 研究の目的.....	56
2) 尺度を構成する室温項目の作成.....	56
2) -1 質問項目の作成方法.....	56
2) -2 質問項目の作成結果.....	59
2) -3 尺度を構成する質問項目.....	66
3) 研究の方法.....	74
3) -1 対象者.....	74
3) -2 調査日.....	74
3) -3 調査方法と調査依頼.....	74
3) -4 調査項目.....	74
3) -5 分析.....	75
3) -6 倫理的配慮.....	76
4) 結果.....	76
4) -1 対象属性.....	76
4) -2 因子分析の結果.....	78
4) -3 信頼性係数.....	80
4) -4 年齢・経験年数・職位との関連.....	80
4) -5 保育環境評価票との関連.....	81
4) -6 Communicative and Critical health literacy 尺度との関連.....	81
4) -7 園児情報活用尺度得点の基本統計量.....	82
5) 考察.....	83
5) -1 本尺度の因子構造について.....	83
5) -2 本尺度の妥当性について.....	83
(9) 本システムの継続的データ集積可能性の評価.....	85
(10) 子どもと保護者のための支援ループ展開の確認.....	86

1) A園の例 .....	86
2) B園の例 .....	87
3) C園の例 .....	88
<b>III 実装活動の計画と実装活動 .....</b>	<b>90</b>
(1) 目標達成及び実装状況 .....	90
(2) 実装された成果の今後の自立的継続性 .....	91
(3) 実装活動の他地域への普及可能性 .....	91
(4) 子実装活動の社会的福祉成果 .....	91
(5) 人材育成 .....	92
(6) 実装活動で遭遇した問題とその解決策 .....	92
<b>IV 実装活動の組織体制 .....</b>	<b>92</b>
(1) 体制 .....	92
<b>V 理解普及のための活動とその評価 .....</b>	<b>93</b>
(1) 保育所等訪問による普及活動 .....	93
(2) 研修会、講習会、観察会、懇談会、シンポジウム等 .....	94
(3) 新聞報道、TV放映、ラジオ報道、雑誌掲載等 .....	96
(4) 論文発表 .....	97
(5) WEBサイトによる情報公開 .....	100
(6) 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） .....	100
<b>VI 結び .....</b>	<b>101</b>
1 WEBを活用した園児総合支援システムの開発 .....	101
2 本システムの内容的妥当性の評価 .....	101
3 「園児情報活用スキル尺度」の開発と信頼性・妥当性の検証 .....	101
4 本システムの継続的データ集積可能性の評価 .....	102
5 子どもと保護者のための支援ループ展開の確認 .....	102
6 今後の自立的継続 .....	102

## I 実装活動の名称と目標、3年間の活動要約

### (1) 実装活動の名称

「WEBを活用した園児総合支援システムの実装」

### (2) 最終目標

WEBを活用した園児総合支援システムの支援ループに基づく実践と体系化した情報の集積、管理により、さらに強固な根拠を生み出し、継続的かつ着実な保育の質向上を実現するサイクルをシステム化する。

### (3) 支援期間終了後の目標（到達点）

- 保育専門職が、科学的根拠に基づき作成した総合的子育て支援システムの活用により、『子どもと保護者の真のニーズの見極めと気づき』による「的確な実践」「実践の評価」「よりよい実践へのフィードバック」という支援ループを活用し、『根拠に基づく実践』を継続的に展開し、子どもと保護者の健やかな育ちを支え促すことができるようになる。
- 園児総合支援システムの活用により、特段の配慮を要する子どもを早期に把握し、他機関と連携した質の高い支援を継続的に実施し、評価することができる。
- 上記実践と体系化された情報の集積、管理により、さらに強固な根拠を生み出し、継続的かつ着実な保育の質向上のサイクルが展開する。

### (4) 3年間の活動実績（要約）

#### ① WEBを活用した園児総合支援システムの開発

保育所や幼稚園などに所属する0歳～6歳の子どもの園児情報を、情報通信技術を利用して集積する「WEBを活用した園児総合支援システム（以下、本システム）」を開発した。

12年にわたるコホート研究による科学的根拠に基づいて開発され、信頼性・妥当性の検証されている5つのスケール（一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリスト、育児環境評価票、保育環境評価票）と実践での活用方法をWEBアプリケーション化し、セールスフォースのプラットフォームに設置し、保育専門職や保護者が、様々な端末から入力する園児情報を、継続的に集積し活用できるようにした（図1-1）。

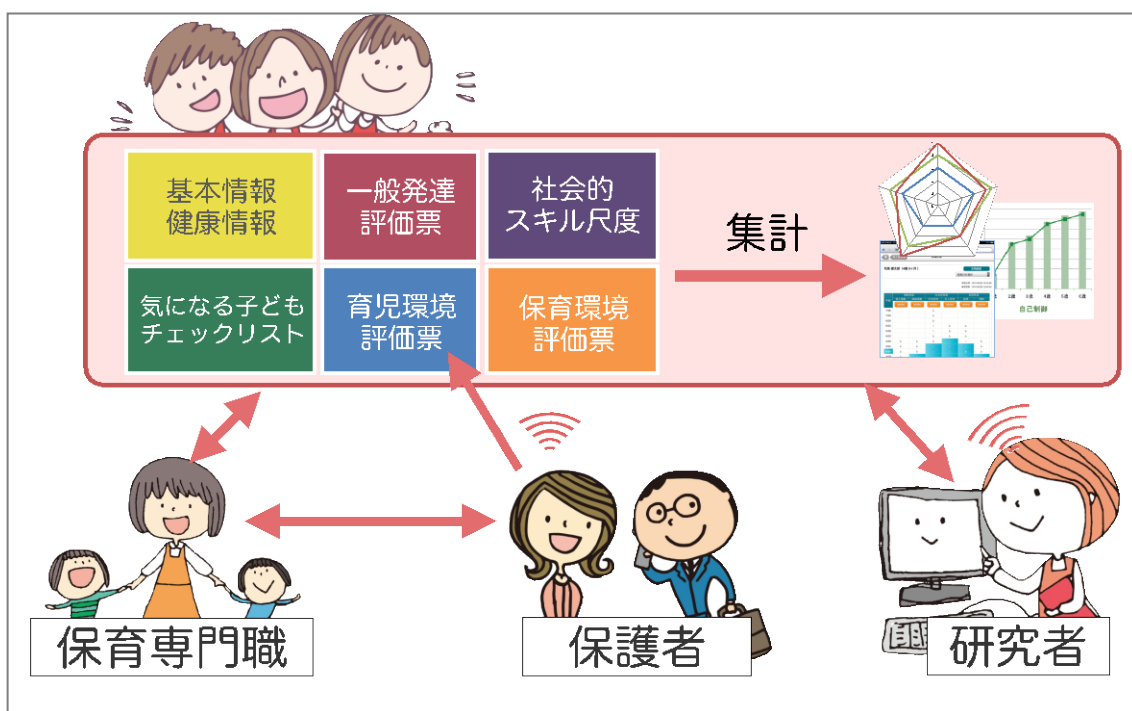


図1-1 WEBを活用した園児総合支援システム

本システムは、実際に園児情報を取り扱う保育士、保育園連盟役員、保育所管理職、研究者、及び、保育者専用のパソコンコールセンターを運営してきたIT専門家をメンバーとして、10回のシステム開発会議を行い、保育専門職のニーズにもっとも近い、活用しやすい画面構成や動作、実際の活用に向けた検討を重ねカスタマイズを繰り返して完成させた。

大きめの画面（図1-2）をタップしながら園児情報を入力すると、結果を、瞬時に集計し、グラフ化し、視覚的に表示する。全国平均や標準値との比較ができ、個々の園児の発育状況をグラフで確認することができる（図1-3）。



図1-2 入力画面

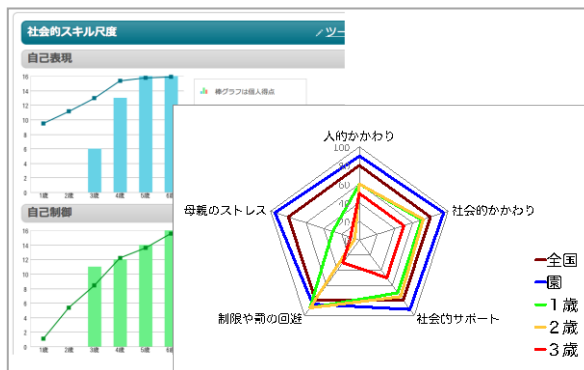


図1-3 集計結果

特別な配慮が必要な子どもについては、アラートを示し、かかわりのヒントを表示する（図1-4）。さらに、目標、課題、背景、影響要因、支援方法。根拠、で構成される「支援設計レポート」作成機能を搭載し、根拠に基づく日々の保育支援を支える（図1-5）。



図1-4 アラート機能



図1-5 支援設計レポート

園児の氏名（ふりがな付）、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。

保育専門職は、こどもの発達状況の特徴を、視覚的に確認し、配慮を要する子どもや保護者を早期に把握し、根拠に基づく支援を行うことが可能となった。保護者に対しては、わかりやすく子どもの状態を示すことができ、保護者と保育専門職が、子どもに関する情報を、共有することができる。本システムは、連結可能、匿名化された園児情報を継続的に集積する。これにより、我々研究者は、園児の発達に関する経時的な情報記録を活用し、園児の発達に関するさらなる根拠を生み出し、システムにフィードバックすることが可能となった。

## ② ホームページ「保育パワーアップ研究会」の制作と運用

「トップページ」「根拠に基づく保育とは」「根拠に基づく実践とは」「根拠に基づくツール」「気になる子どもの実践例と評価」「根拠に基づくツール活用法」「WEBを活用した園児支援システム紹介」「保育パワーアップ研究会メンバー」「リンク集」「保育パワーアップ相談室」で構成（図1-6）されるホームページ「保育パワーアップ研究会」（以下、本ホームページ）の制作と運用を行った。ホームページのURLは、「http://childnet.me」である。本ホームページは、保育専門職のニーズにより近く、使いやすい構成となるようカスタマイズを繰り返し完成させた。

本ホームページの継続的な運用を行い、WEB園児支援システムの普及を行った。本ホームページ上に設置した電子掲示板「保育パワーアップ相談室」を活用し、本システム活用に関するサポートを行った。



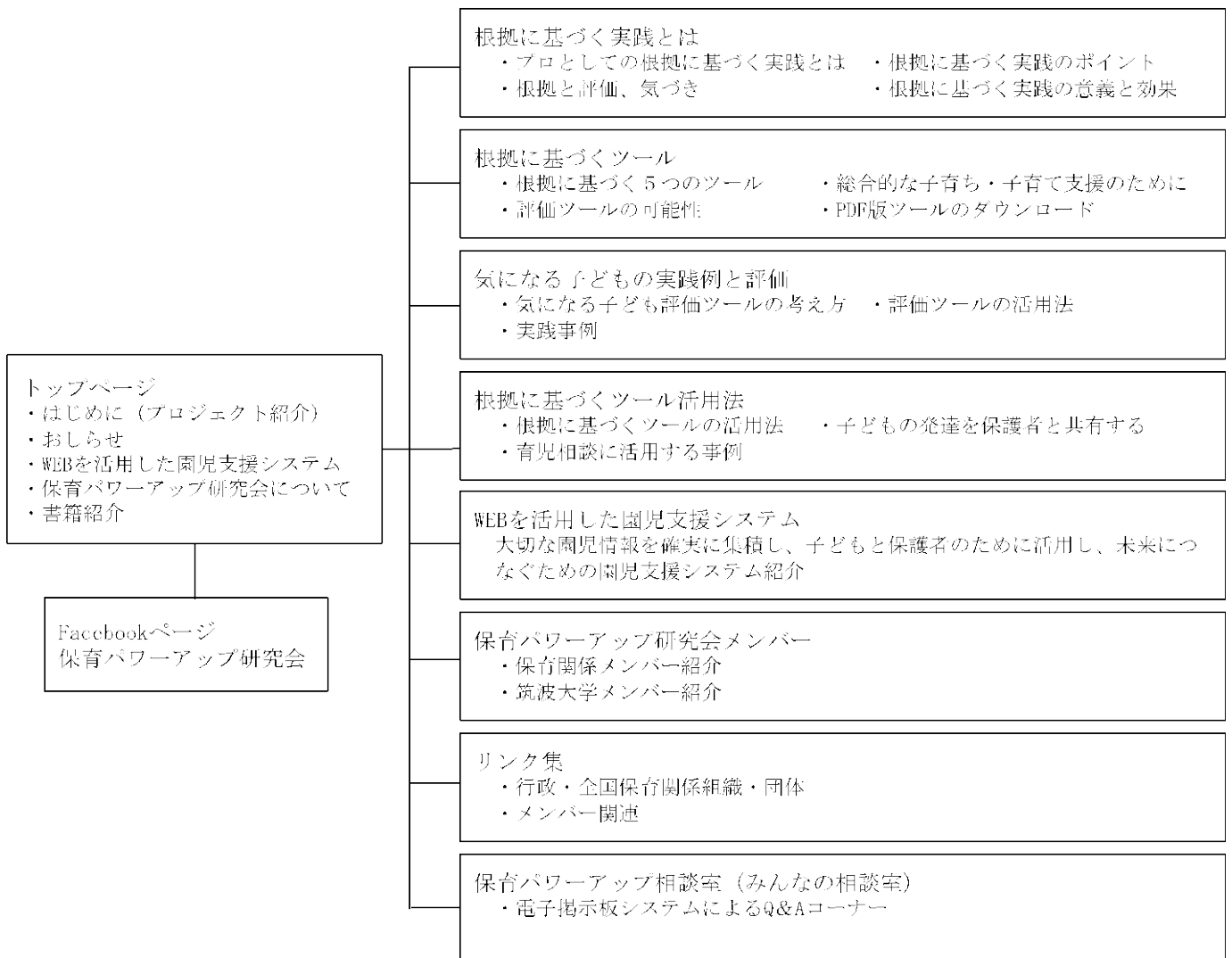


図1-6 ホームページ「保育パワーアップ研究会」の構成

### ③ 本システムの継続的運用と活用状況の評価

体験版システムとシステム活用マニュアルを作成し、本ホームページを通して配信し、本システムの活用をサポートした。

開発したシステムの普及と活用状況の評価のため、保育所訪問、および、研修会を行った。また、保育専門職、システム開発者、研究者で構成される保育パワーアップ研究会を開催し、WEB園児システムの改定、e-ラーニングシステム（支援設計レポート）の活用法などに関する検討を行った。

ユーザー（導入した保育所、幼稚園）の意見を反映したカスタマイズにより、イン

ターフェイス、入力やレポート表示ボタンの配置、育児環境評価レポート、一般発達評価レポートなどが改訂され、より実践のニーズを反映したシステムとなった。

#### ④ 本システムの内容的妥当性の評価

本システム開発のために開催した全10回の会議記録から、本システムの機能を抽出し、内容分析法を用いて類型化した。整理された本システムの機能より、本システムが園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクル展開のための機能を内包するかどうかを確認した。

【園児情報の基本的活用】、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックにあたる【園児情報の発展的活用】の2つを重要カテゴリーとして位置づけ、本システムの機能を整理した結果、【園児情報の基本的活用】には、「情報の選定」「客観的理解」「体系的理解」「複合的理解」「情報の共有」「情報の補完」を意味する機能を抽出し、【園児情報の発展的活用】には、「保育目標の明確化」「根拠に基づく支援」「活動の評価」「継続的な情報活用」「関連・因果関係の検証」を意味する機能を抽出した。

本システムは、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解、アセスメント、目標の明確化、支援、評価、継続的な情報活用、関連・因果関係の検証というPDCAサイクル展開に寄与する機能を内包することから、システムの内容的妥当性が示唆された。

#### ⑤ 「園児情報活用スキル尺度」の開発と信頼性・妥当性の検証

本研究における支援期間終了後の目標（到達点）を鑑み、本システム機能に準拠し、子どもの健康維持や増進に必要な園児情報をPDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもを最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用スキル尺度」を開発し、信頼性・妥当性の検証を行った。

尺度開発に先立ち、本システムを使用し内容を十分に理解している、かつ、園児情報を日常的に扱っている「保育士グループ」「保健師グループ」、及び、園児情報をより活用しやすい形で提供するWEBアプリケーション開発を行っている「開発者グループ」の3種類のグループを対象に、本システムの機能に焦点をあてたフォーカス・グループ・インタビューを実施した。インタビュー記録から本尺度を構成する質問項目を作成した。保育専門職を対象とした無記名の自記式質問紙調査を実施し、作成した質問項目について、「全くそう思わない（1点）」から「かなりそう思う（5点）」までの5件法で回答を求め、因子分析により因子構造の確認と尺度項目の選定を行った。本尺度の下位尺度ごとに信頼性係数

を算出した。本尺度得点と、職業経験年数、保育環境評価票得点、Communicative and Critical health literacy尺度得点についてSpearmanの順位相関係数を算出した。

2因子26項目で構成される園児情報活用尺度が開発された。2因子解の因子寄与は、第1因子8.47、第2因子7.45、共通性15.92であった。各因子を構成する質問項目の特徴から、第1因子は、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに適用されるスキル「園児情報の発展的活用（12項目）」、第2因子は、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキル「園児情報の基本的活用（14項目）」であると解釈され、単純構造に近い因子パターンを有した。Cronbachの $\alpha$ 係数は、第1因子 $\alpha=0.93$ 、第2因子 $\alpha=0.90$ 、総合 $\alpha=0.94$ であった。職業経験年数との相関は、 $r=0.32$  ( $p<0.001$ )であった。保育環境評価票得点（子どもの全体像を捉える領域）との相関は、 $r=0.26$  ( $p=0.001$ )であった。Communicative and Critical health literacy尺度との相関は、 $r=0.49$  ( $p<0.001$ )であった。各下位尺度との相関は、Communicative領域得点と、園児情報の発展的活用との相関は $r=0.36$  ( $p<0.001$ )、園児情報の基本的活用との相関は $r=0.36$  ( $p<0.001$ )、総合得点との相関は $r=0.41$  ( $p<0.001$ )であった。Critical領域得点と、園児情報の発展的活用との相関は $r=0.51$  ( $p<0.001$ )、園児情報の基本的活用との相関は $r=0.41$  ( $p<0.001$ )、総合得点との相関は $r=0.52$  ( $p<0.001$ )であった。

因子分析の結果、想定した2因子構造が得られ、単純構造に近い因子パターンを有している結果から因子的妥当性が確認された。Cronbachの $\alpha$ 係数は高い値を示し、内的一貫性の側面から信頼性が確認された。保育の質向上につながる「経験年数」「保育環境評価票」との有意な正の相関が得られたことより、基準関連妥当性（併存的妥当性）が確認された。概念に共通性がみられるCommunicative and Critical health literacy尺度の各下位尺度との有意な正の相関が見られたことより、構成概念妥当性が確認された。本尺度を活用することで、保育専門職自身が、園児情報をPDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す「園児情報活用」を自己評価し、質の高い専門技術を検討して行ける可能性が示唆された。

## ⑥ 本システムの継続的データ集積可能性の評価

本システムの導入実績から、本システムのデータ集積可能性と本システムの改善点を検討した。

本システムを導入した保育所、幼稚園は91園であった。本システムに登録された園児数は、44,323名であった。本システムにおける各ツールのデータ回収数は、①一般発達評価票41,893名、②社会的スキル尺度40,779名、③気になる子どもチェックリスト27,621名（気

になる行動がある場合のみ)、④育児環境評価票24,874名、⑤保育環境評価票9園であった。  
システム導入実績からは、今後の展開可能性が期待できる数が得られた。

#### ⑦子どもと保護者のための支援ループ展開の確認

本システム完成と同時に本システムの導入を行った3園の保育士に、本システム活用状況をたずねた。「保育専門職だからできる評価」「評価、支援は日常保育の中に」をキーワードに、本システムが日々の保育に活用されていた。また、障がい児（気になる子）を含めたインクルーシブ保育の中で、「子どもを理解すること」「そして支援すること」に活用されていた。本システムの活用による保育の質向上への効果が期待される。

## II 実装活動の計画と実装活動

### 1. 全体計画

項目	平成22年度 (6ヶ月)	平成23年度	平成24年度	平成25年度 (6ヶ月)
<b>A. 技術的基盤構築</b>				
1. サーバーの確保	←→			
2. ホームページ作成	←→			
	① 十分にユーザー意見を聞き、反映させるために延長。			
<b>B. 園児支援パッケージの作成と設置</b>				
1. 5つの支援ツールと支援設計のコンピュータプログラム化 (園児支援パッケージ作成)	←→			
2. 活用マニュアルの作成	←→			
3. 園児支援パッケージの動作確認とカスタマイズ	←→			
	② ユーザーのニーズを十分に反映させるため、5つのツールのうち、育児環境評価票と保育環境評価票の電子化を、次年度まで延長。			
<b>C. 園児総合支援システムの展開</b>				
1. 端末(Apple iPad)配布		←→		
2. 導入支援研修会実施		←→		
3. 活用支援研修会実施			←→	
4. 付加機能の追加			←→	
<b>D. 保育eラーニングの展開</b>				
1. eラーニングシステム開設			←→	
2. eラーニングマニュアル作成			←→	
3. eラーニング研修会実施			←→	
	③ ユーザーニーズを反映させ、システムをカスタマイズするために延長。			
<b>E. 園児総合支援システム継続の確認</b>				
1. 活用の評価			←→	
2. 支援ループ展開の確認			←→	
	④ eラーニングシステムのカスタマイズにより、25年度まで延長。			

## 2. 各年度の実装活動の具体的内容

### (1) 実装支援期間中の目標

インターネットを活用した園児総合支援システムの活用により、『子どもと保護者の真のニーズの見極めと気づき』による「的確な実践」「実践の評価」「よりよい実践へのフィードバック」支援ループのシステム化が実現する。

### (2) 3年間の実装計画

12年間のコホート研究による科学的根拠に基づく5つの支援ツールと支援設計をコンピュータプログラム化したWEBアプリケーションを作成し、WEBを活用した園児総合支援システムとして提供する。

子育て支援システムの導入及び活用に関する研修会、eラーニングシステムを開設し、保育専門職の学習と情報交換の場を提供する。実践における「真のニーズの見極め」「適切な実践」「評価」への子育て支援システムの効果性を評価し、さらに実効可能性を高める適合度調整を行い、普遍的な活用に向けシステム化する。

### (3) 進め方の概要

<平成22年度>

#### A. 技術的基盤構築

平成22年12月までに、WEBアプリケーションを設置するためのセキュアなサーバーを確保し、ホームページを完成する。ホームページは、保育専門職のニーズにもっとも近く、保育専門職にとって使いやすいデザイン構成とする。実際の使用感について保育専門職の評価を得る。活用しにくい部分や、より活用しやすくするための意見が得られれば、それを反映させカスタマイズする。

#### B. 園児支援パッケージの作成と設置

平成23年3月までに、WEBアプリケーション及びマニュアルを完成し、ホームページ上に設置する。設置が完了した段階で、5カ所の保育園でパイロット起動させ、保育専門職が使いやすいものとして機能するか否か確認する。この段階で、使いにくい部分、技術的に不都合が出る部分など出来る限り把握し、カスタマイズする。また、ネットワーク（サーバー）上で園児情報を集積、管理するため、情報漏洩などのリスク管理を十分に検討し、セキュアなシステムであることを確認する。

<平成23年度>

### C. 園児総合支援システムの展開

WEB園児支援システム導入及び活用支援研修会を実施する。保育専門職の意見を反映させ、再度、使いにくい部分、技術的に不都合が出る部分など確認し、カスタマイズするとともに、「業務報告書」や「就学前情報サマリー」作成など、業務の迅速化に必要な付加機能があれば、追加する。パソコン操作に不慣れな保育専門職が、感覚的に簡単に入力できるシステムであることを確認する。ネットワーク（サーバー）上で園児情報を管理することに対する保育園側の不安への十分な対応を行い、平成24年3月までに、安心して安全なシステムであることを認識し活用できるようにする。一連の支援ループの展開、特段の配慮を要する子どもの早期発見と保育専門職間での情報共有、個々の子どもに適合した支援の実現を確認する。

<平成24年度>

### D. 保育e-ラーニングシステムの展開

園児支援パッケージの活用支援をネットワーク上で行うe-ラーニングシステムとマニュアルを作成し、e-ラーニングシステム活用研修会を実施する。パソコン操作に不慣れな保育専門職が簡単に活用できるシステムになるよう、使いにくい部分は修正する。全員が同じ水準の活用技術を取得し利用できる状態を目指し、平成25年3月までに、順調に稼働していることを確認する。

<平成25年度>

### E. 園児総合支援システム継続の確認

平成25年9月までに、ネットワーク上の園児支援パッケージ及び、e-ラーニングシステムが、マシン側においてはバグが発生することなく、保育園、幼稚園側においてはストレス無く平滑に稼働し、子どもと保護者のための支援ループが展開していることを、保育専門職への聞き取りなどで確認する。

## （4）WEBを活用した園児総合支援システムの開発

### 1) 開発方針とコンセプトの設定

本システムの活用により、保育専門職が、子どもの状況を定期的にチェックし、専門職、保護者間の「情報の共有化」、個人的な思い込みをなくす「視点の統一」、情

報を正確に適切に利用できる「客観的な内容の統一」、専門職自身の「保育の質向上の啓発」を開発の方針（図2-1）とし、下記7つのコンセプトを設定した。

- ① 園児に関する基本情報、発達状況、日常生活状況などが電子データ化され、管理が容易になるとともに、保育専門職および他職種間の迅速な情報共有が可能となる。
- ② 個人、クラス全体、園全体の特徴と全国平均との比較が図として瞬時に表示されることにより、発達状態の特徴を視覚的かつ客観的に確認することが可能となる。
- ③ 保護者に対して子どもの特徴をわかりやすく示し、保育の共有および子育て支援に資することが可能となる。
- ④ 経年データを用いた発達の状況把握が可能となり、一人ひとりの園児の根拠に基づく保育方針決定への一助となる。
- ⑤ 備考や特記事項の入力により子どもの特徴や保育状況などの質的データを集積し、質の高い保育方法が分析可能となり、保育支援へのフィードバックの一助となる。
- ⑥ 特段の配慮を要する子どもが明示され、保育専門職同士が課題を共有したり、該当園児に対する保育のあり方を見直すなど、早期支援とよりよい保育への一助となる。
- ⑦ 学童期におよぶ経年分析により、乳幼児期の育児環境と学童期の子どもの状況（心身の健康）との関連を評価し、影響因子の分類、選定、考察が可能となる。

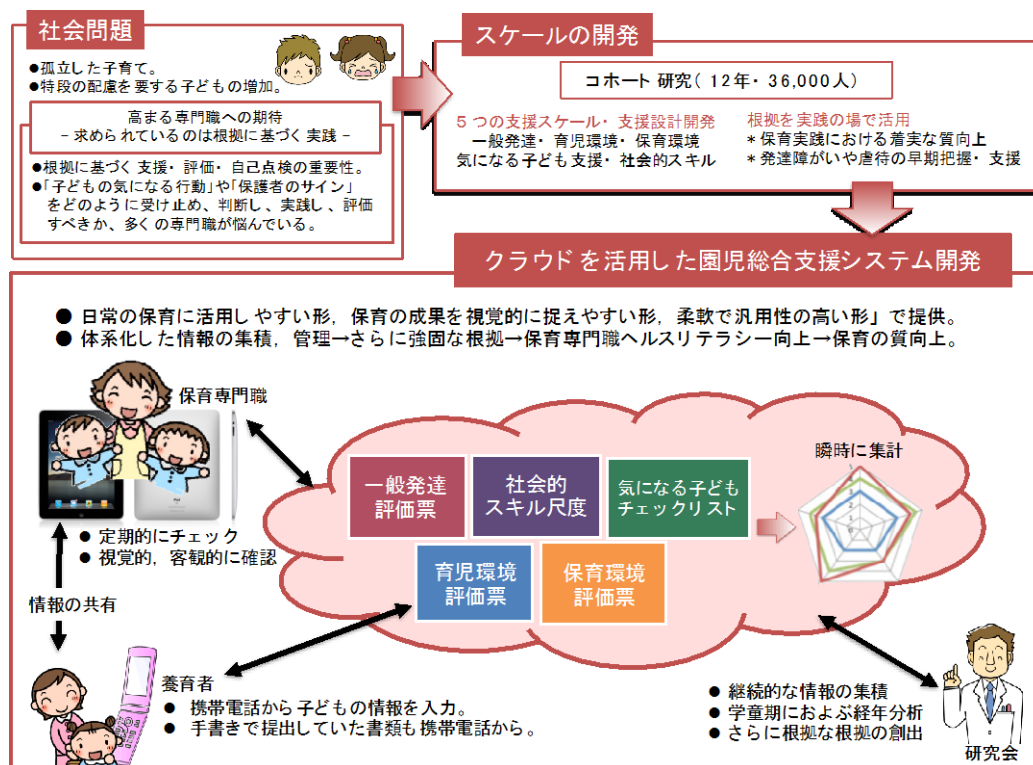


図2-1 WEBを活用した園児総合支援システム



## 2) 電子化した項目の設定と根拠

コホート研究による科学的根拠に基づいて開発された5つのスケール（一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリスト、育児環境評価票、保育環境評価票）、及び、園児と保護者の基本属性（性別、生年月日、入園年齢、保育時間、家族構成、保護者の職業など）を、電子化する項目とした。これら5つのスケールは、紙媒体では、保育実践の場などで活用され、質の高いケアの実践に役立つことが報告されている。

一般発達評価票は、遠城寺式乳幼児分析的発達検査法、デンバー式発達検査、新版K式発達検査など、既存の発達検査で使われている項目を参考に、複数の保育専門職の討論により、担当の専門職が評価できる項目に変更し、月齢順に並べたものである。

「運動発達」「社会性発達」「言語発達」の3領域を設けており、それぞれ2つの小領域に分けてチェックする。満7歳までの子どもを対象とし、発達状況を総合的、客観的に捉えられるものである。

社会的スキル尺度は、就学前児を対象とし、社会的スキルを量的に測定することができる。欧米の先行研究で繰り返し認識されている協調・自己制御・自己表現の3因子構造をもち、高い内的一貫性及び経時的安定性が示されている。また、併存的妥当性、予測的妥当性、基準関連妥当性が確認されている。

気になる子どもチェックリストは、実践の場の保育専門職の経験に基づいて作成され、子どもの全体的な理解と、発達評価や社会的スキル評価で問題にならなかった子どもについても、特に支援が必要かどうかを見極めるための項目を網羅している。33カテゴリーで構成され、項目ごとにその背景要因をチェックする。

育児環境評価票は、人的かかわり、社会的かかわり、社会的サポート、制限や罰の回避の4領域13項目で構成され、0～6歳児の保護者を対象として活用することができる。育児環境評価HOME (Home Observation for Measurement of the Environment) の枠組みをもとに項目と領域が設定されており、日本での家庭訪問調査によりHOMEとの基準関連妥当性、将来の発達や気になる行動等との予測的妥当性が検証されている。

保育環境評価票は、「多様な保育ニーズ」に対応できる「専門技術の向上」を目指して開発された。「子どもの全体像を捉える」「家族の全体像を捉える」「子どもを取り巻く望ましい環境」「関係機関との連携を強化する」の4領域で構成される。子どもの最善の利益を実現するために、子どもや保護者の多様なニーズに応えるエキスが整理されている。日常の保育の質を向上させるための自己評価に有効なツールとして活用できる。

5つのスケール（一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリスト、育児環境評価票、保育環境評価票）を活用し、保育所を利用する子どもの育児環境の実態を明らかにする中から、保育専門職が担ってきた支援的役割について考察した。5つのスケールを日常的に活用してきた保育専門職は、子どものすこやかな発達を促すかわりを子どもの発達状態に合わせて日常的に提供し、子どものすこやかな発達を支える役割を担っていた。また、養育者のサポートを通じ、虐待など子どもに関する深刻な問題の予防に寄与してきたことが示唆された。電子化するツールの根拠が実証された研究である。

5つのスケール（一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリスト、育児環境評価票、保育環境評価票と実践での活用方法は、これまで紙ベースの媒体で活用され、「子どもと保護者を取り巻く環境の実態と課題の把握」「課題解決に最適な総合的実践方法の選択」「実践効果の確認とよりよい実践の実現」による質の高い保育実践が実現し、子どもと保護者によりよい支援をもたらすことが実証されているものである。子どもの発達を評価する尺度は、いくつか開発されているが、「一般発達評価票」「社会的スキル尺度」保育実践において、保育専門職が簡易にチェックできるスケールや、「気になる子どもチェックリスト」のように、子どもの全体的な理解と、発達評価や社会的スキル評価で問題にならなかった子どもについても、特に支援が必要かどうかを見極めるための項目を網羅したスケールは乏しい。「一般発達評価票」は、遠城寺式乳幼児分析的発達検査法、デンバー式発達検査、新版K式発達検査など、日本における代表的な発達検査で使われている項目を参考にして作られたものである。また、育児環境評価や保育環境評価のためのスケールは日本において、ほとんど提案されていない。さらに、子どもの側面、育児環境の側面、保育環境の側面からの評価スケールを組み合わせる実践に活用可能なスケールのセットは、ほとんど提案されていない。よって、5つのスケール（一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリスト、育児環境評価票、保育環境評価票）を電子化する項目として採用した。

### 3) システムの画面構成、動作、活用に関する検討

実際に園児情報を取り扱う保育士、保育園連盟役員、保育所管理職、研究者、及び、保育者専用のパソコンコールセンターを運営してきたIT専門家をメンバーとして、10回のシステム開発会議を行い、保育専門職のニーズにもっとも近い、活用しやすい画面構成や動作、実際の活用に向けた検討を重ねた（表2-1）。会議のテーマは、システ

ム開発状況に合わせて設定した。

表 2-1 園児情報記録システム開発会議の概要

回	開催日	参加者	テーマ
1	平成22年 9月15日	研究者4名、 IT専門家3名	1. 園児総合支援システムについて 2. 園児総合支援システム実現可能性の検討
2	平成22年10月 4日	研究者6名	1. 各スケールの使い方 2. アラート表示の条件と出力レポート 3. 子どものプロフィール画面 4. 保育者へのコメントと付加機能
3	平成23年 1月29日	保育士5名、 保育園連盟役員2名、 保育管理職4名、 研究者9名、 IT専門家3名	1. WEB園児総合支援システムの概要 2. iPadの活用 3. 保育環境評価票簡易版について
4	平成23年 2月27日	保育士2名、 保育園連盟役員1名、 保育管理職1名、 研究者10名、 IT専門家2名	1. WEB園児支援システムに触れてみての感想 2. 園児情報管理の現状と今後の可能性 3. WEB版発達評価票の特徴 4. WEB版社会的スキル尺度の特徴 5. WEB版気になる子どもチェックリストの特徴
5	平成23年 3月 9日	研究者6名、 IT専門家2名	1. ダッシュボード 2. 個人基本画面 3. 園、および園児レポート
6	平成23年 5月12日	研究者4名、 IT専門家1名	1. データの投入 2. WEB園児支援システムシミュレーション版
7	平成23年 6月23日	研究者3名、 IT専門家1名	1. WEB園児支援システムの論点整理
8	平成23年 6月26日	保育士2名、 保育園連盟役員2名、 保育管理職1名、 研究者10名、 IT専門家3名	1. 各ツールの仕様変更点
9	平成23年 8月 5日	研究者3名、 IT専門家1名	1. ホームページを使用した活用支援 2. アラートメッセージ 3. 過去データの投入について
10	平成23年10月 2日	研究者3名、 保育士2名	1. システムのコンテンツについて 2. システムの使いやすさについて 3. システムの活用について

#### 4) 画面構成とアクセス権

園児情報の入力や閲覧を行うための画面は、園（保育所、幼稚園、総合園）用、保護者用、研究者用の3パターンを用意した（図2-2）。

##### 4)-1 保育所・幼稚園・総合園

- ① 園ごとに付与したIDと各園が設定したパスワードにより本システムにログインする。
- ② ログイン後、登録メールアドレスに使用する端末を認証するための確認コードが送信され、その確認コードを入力することにより園児一覧画面にアクセスすることができる。

- ③ 園児一覧画面から各ツールにアクセスし、園児情報の入力や園全体及び個々の園児の分析レポートの閲覧ができる。
- ④ 各ツールに情報を入力すると、ツールごとの結果が瞬時に視覚的にフィードバックされる。
- ⑤ 園児一覧画面および各ツール画面に設置した「レポート表示」ボタンを押すことにより、園全体および個々の園児の分析レポートが表示される。
- ⑥ 園全体レポートは、各園の集計結果が全国平均や標準値と比較可能な形で表示される。
- ⑦ 個々の園児のレポートは、個々の園児の発育、発達状況が、園全体の集計結果と比較可能な形で表示される。また、特段な配慮が必要な園児については、保育士の気づきを促すためのアラート（注意喚起のサイン）とメッセージをあわせて表示する。

#### 4)-2 保護者

- ① 園が設定したパスワードから育児環境評価票にアクセスし、育児環境情報を入力する。
- ② 入力した育児環境情報は、入力後すぐに保護者が指定したメールアドレスにフィードバックされる。
- ③ 保護者は、保護者自身の端末からは分析レポートの閲覧はできない。保育専門職とのやり取りのもと、レポートを共有する。

#### 4)-3 研究者

- ① システム管理者としての認証が適用され、管理者モードで本システム管理画面にログインできる。
- ② 研究者は、本システム活用を希望した園に対して、本システムへのユーザー登録、ユーザー（本システムを活用する園）がパスワードを紛失した際のパスワードリセット操作を行うことができる。
- ③ 研究者は、園全体及び個々の園児の分析レポートに反映されるアラート条件（注意喚起の条件）やメッセージの管理、標準値の管理、匿名化されたデータのエクスポート（エクセルやCSV形式での取り出し）ができる。
- ④ 研究者は、条件を指定することにより、詳細な分析レポートの作成ができる。
- ⑤ 研究者は、個人情報の閲覧や操作は一切できない。

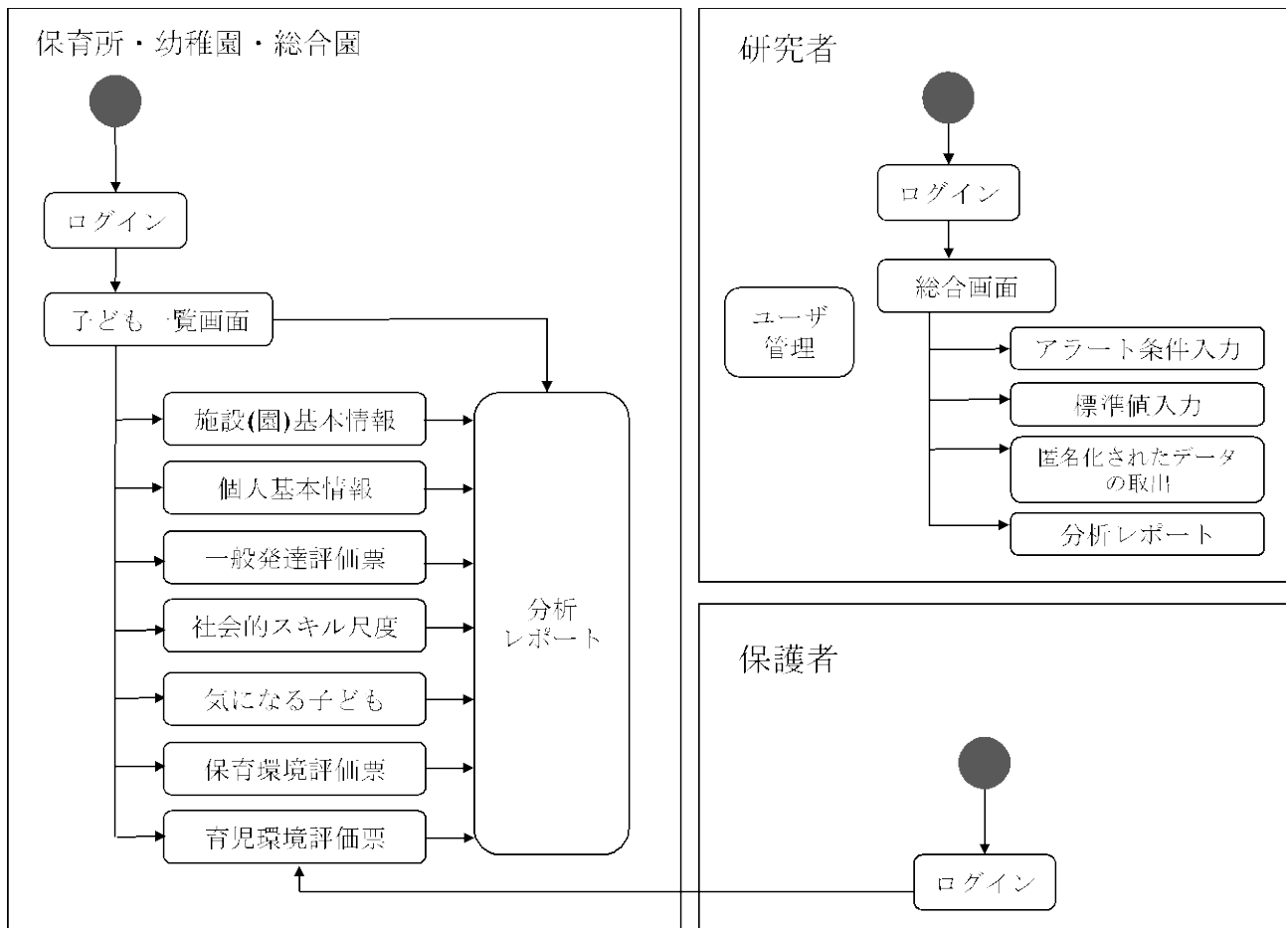


図2-2 画面構成とアクセス権

## 5) 安全性、信頼性、柔軟性

### 5)-1 安全性と信頼性

- ① サーバーは、Salesforce.com 社が提供するものを活用した。Salesforce.com 社は、政府の情報も管理する、安全性、信頼性の高いサービスを提供している。
- ② Salesforce.com 社は、大規模マルチテナントシステムにより、集中化されたシステムを少数精鋭、世界トップクラスのエンジニアにより直接管理している。エンジニアに対して、厳しい選定基準およびバックグラウンドチェックが行われている。他社クラウドは、顧客（ユーザー）ごとに分離されたデータベースを数十人から数百人の管理者で管理（監視が難しい）しており、高度なスキルをもった要員の確保が困難であるといわれている。また、セールスフォースは、政府情報や銀行など、個人情報管理が厳しく、24 時間確実に停止しない管理体制が求められる分野における実績を積んでいる。
- ③ 入力された情報は、Salesforce.com 社のネットワークストレージに保存される。ネットワークストレージとは、インターネットを介してデータを保管するスペースである。
- ④ Salesforce.com 社のプラットフォーム上では、個人情報部分の ID 化が自動的に行なわれ、各ユーザー（本システムを活用する園）以外は、個人情報を扱うことができない。匿名化 ID は大文字と小文字を区別する 15 から 18 の文字と数字を組み合わせたランダムなユニーク文字列である。プラットフォームとは、ソフトウェアなどを動作させるための基盤となる環境である。
- ⑤ データをサーバーに保存する特徴から、災害時にも確実に緊急連絡先、データを保持する。

### 5)-2 柔軟性

- ① Salesforce.com 社は、複数のサーバーを一つのサーバーに見立てる高度な仮想化技術を持っており、システム同士の連携や、カスタマイズを柔軟に行う。
- ② 複数サーバーで構築された一つの仮想化されたアプリケーション空間（本システムのこと）を複数のユーザーで共有することから、ユーザー（本研究では保育所、幼稚園、総合園）が増えた場合に、費用がかさむ心配が生じない。

- ③ WEB アプリケーションの特徴から、インターネット環境があれば活用することが可能である。PC、タブレット型 PC、スマートフォンなど、ほとんどすべての端末に対応している。

## 6) システムの概要

### 6)-1 全体像

本システムは、5つのスケール（一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どももチェックリスト、育児環境評価票、保育環境評価票）の他、園児一覧画面、個人基本情報（性別、生年月日、入園年齢、保育時間、家族構成、保護者の職業など）、評価レポート、支援設計で構成された。5つのスケール、評価レポート、支援設計と、園児一覧画面、個人基本情報画面は、相互にリンクし、ワンクリック（またはタップ）操作にて移動可能である（図2-3）。

園児の氏名（ふりがな付）、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。

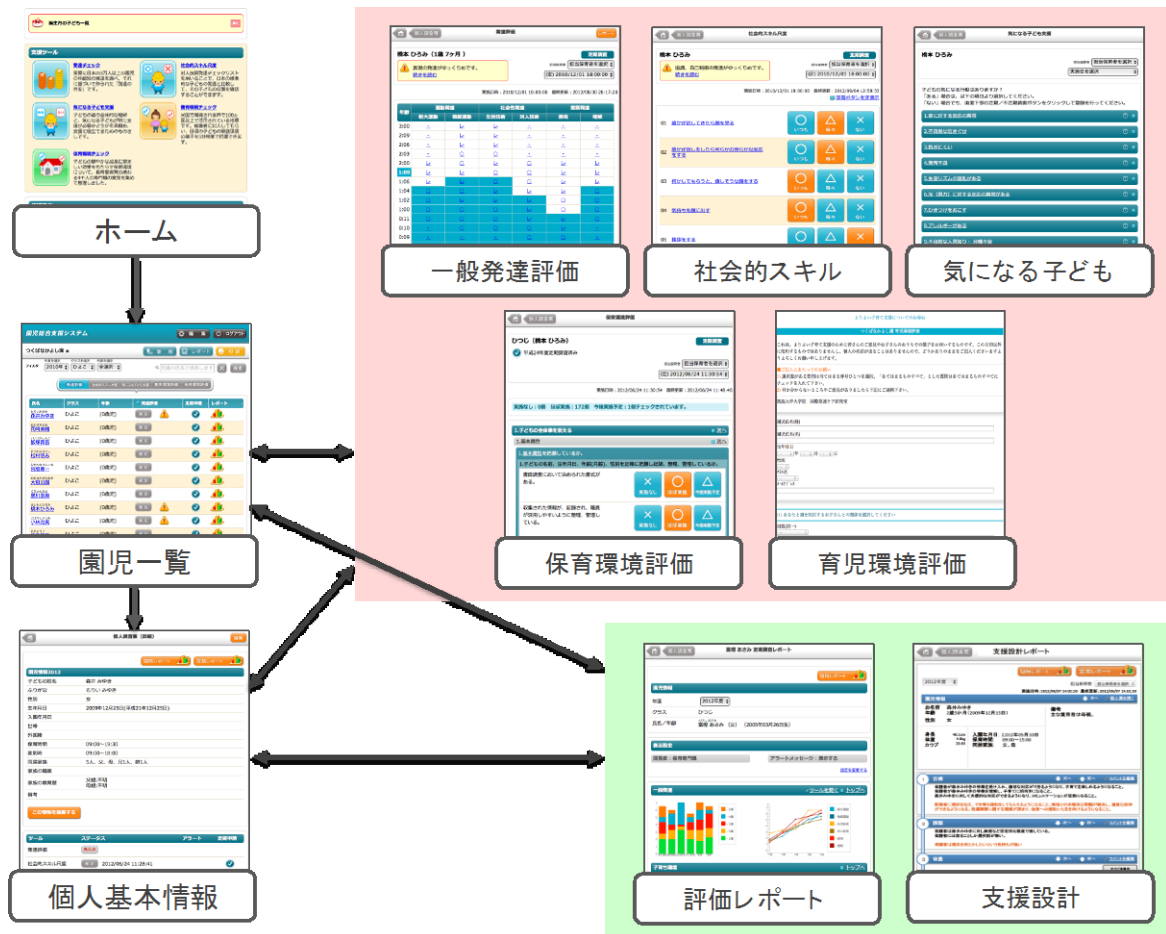


図2-3 WEBを活用した園児情報記録システムの全体像

## 6)-2 園児一覧画面

園児一覧画面では、各スケールの入力状況を一覧で確認することができる。年度、クラス、学年での絞り込み、名前での検索、月齢、入力状況、入力結果での一覧の並び替えができる（図2-4）。なお、園児の氏名（ふりがな付）、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。



**園児総合支援システム** [編集] [ログアウト]

つくばなかよし園 様 [新規] [レポート] [印刷]

年度を選択 クラスを選択 年齢を選択  
 フィルタ 2010年 ひよこ 全選択

児童の氏名で検索します [検索]

発達評価 社会的スキル尺度 気になる子ども支援 養育環境評価 保育環境評価

氏名	クラス	年齢	発達評価	定期申請	レポート
もりいみゆき 森井みゆき	ひよこ	(0歳児)	確定		
おかざきまお 岡崎麻緒	ひよこ	(0歳児)	確定		
いづかしんご 飯塚真吾	ひよこ	(0歳児)	確定		
まつわさとし 松村悟志	ひよこ	(0歳児)	確定		
みやわきけんいち 宮脇憲一	ひよこ	(0歳児)	確定		
おおはたきみあき 大畑公顕	ひよこ	(0歳児)	確定		
くろかわえま 黒川恵麻	ひよこ	(0歳児)	確定		
はしもとひろみ 橋本ひろみ	ひよこ	(0歳児)	確定		
こばやしかつみ 小林克実	ひよこ	(0歳児)	確定		
そがようこ 曽我陽子	ひよこ	(0歳児)	確定		

[トップへ](#)

Copyright (C) International Community Care and Lifespan Development All rights reserved.

図 2-4 園児一覧画面



### 6)-3 個人基本情報

個人基本情報画面は、園児と保護者の基本属性（性別、生年月日、入園年齢、保育時間、家族構成、保護者の職業など）で構成された。この画面からは、各スケールの入力状況の確認のほか、調査実施画面への移動ができる（図2-5）。

個人基本情報の入力には、プルダウンとチェックボックスによる選択と、保管のためのテキストで構成される他、保育専門職がメモとして残しておきたい情報を、自由に書き残しておけるメモ機能に対応した。

🏠
個人調査票（詳細）
編集

随時レポート
定期レポート

**園児情報2012**

子どもの姓名	森井 みゆき
ふりがな	もりい みゆき
性別	女
生年月日	2009年12月25日(平成21年12月25日)
入園年月日	
世帯	
外国籍	
保育時間	09:00~19:30
変則時	09:00~18:00
同居家族	5人、父、母、兄1人、姉1人
家族の職業	
家族の教育歴	父親:不明 母親:不明
備考	

この情報を編集する

ツール	ステータス	アラート	定期申請
発達評価	未入力		
社会的スキル尺度	確定	2012/06/24 11:28:41	<input checked="" type="checkbox"/>
気になる子ども支援	未入力		

園児の氏名（ふりがな付）、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。

図2-5 個人基本情報画面

## 6)-4 一般発達評価票

6領域のどこからでも入力（調査）を始めることができる。入力が完了していない場合は、「途中」状態が表示され、未入力なのか、発達に配慮すべき点があるのかの判断ができる。入力結果は、瞬時に棒グラフとなり、視覚的に発達状況の確認ができる。グラフの中の「○」や「レ」「・」にマウスを重ねると、質問項目の内容を表示し、クリアしている項目と、そうでない項目の確認ができる。

入力は、大きめのボタンをタップしながら回答することで完了する。質問項目にマウスを重ねると、判断のためのガイドを示し、回答を助け、回答の標準化をはかるとともに、保育専門職の学習に対応するものとした（図2-6）。

年齢	運動発達		社会性発達		言語発達	
	粗大運動	微細運動	生活技術	対人技術	表現	理解
	調査開始	調査開始	調査開始	調査開始	調査開始	調査開始
7:06	・	・	○	レ	レ	レ
7:00	レ	レ	レ	レ	レ	レ
6:06	レ	レ	○	レ	レ	○
6:00	レ	レ	レ	○	レ	○
5:06	レ	○	○	○	○	○
5:00	○	○	○	○	○	○

**運動発達**

粗大運動

5歳  
6ヶ月

ブランコをこぎながら立ったり座ったりする

○

レ

できる      できない

5歳  
0ヶ月

片足で5秒立つ

❶ やり方を見せれば、つかまらないで片足で5秒以上立っていられる

○

レ

できる      できない

4歳  
8ヶ月

スキップができる

○

レ

できる      できない

次の問題へ進む

※ 記をコピーして新規保存

調査開始

図2-6 一般発達評価票

## 6)-5 社会的スキル尺度

社会的スキル尺度項目30項目を一覧で表示し、大きめのボタンをタップしながら回答することで入力完了する。選択されていない項目がある場合は、「途中」状態を表示する。質問項目にマウスを重ねると、判断のためのガイドを示し、回答を助け、回答の標準化をはかるとともに、保育専門職の学習に対応するものとした（図2-7）。

園児の氏名（ふりがな付）、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。

The screenshot displays the '社会的スキル尺度' (Social Skills Scale) interface. At the top, there is a navigation bar with a home icon and the text '個人調査票' (Individual Survey Form) and '社会的スキル尺度' (Social Skills Scale). Below this, the user's name '橋本 ひろみ' (Hiroshi Hashimoto) is shown. A '定期調査' (Regular Survey) button is present. A warning message states: '協調、自己制御の発達がゆっくりめです。' (Coordination and self-control development is slow) with a link '続きを読む' (Read more). A dropdown menu for '担当保育者' (Responsible Caregiver) is set to '担当保育者を選択' (Select caregiver), and a date/time dropdown is set to '(定) 2010/12/01 18:00:00'. The implementation date is '2010/12/01 18:00:00' and the last update is '2012/09/04 12:58:33'. A checkbox '回答ボタンを非表示' (Hide answer buttons) is checked. The main content area lists six items with response buttons:

Item ID	Item Description	いつも (Always)	時々 (Sometimes)	ない (None)
01	誰かが話してきたら顔を見る	○	△	×
02	誰かが話しをしたら何らかの明らかな反応をする	○	△	×
03	何かしてもらうと、嬉しそうな顔をする	○	△	×
04	気持ちを顔に出す	○	△	×
05	挨拶をする	○	△	×
06	人に近づきおしゃべりをする	○	△	×

図2-7 社会的スキル尺度

## 6)-6 気になる子どもチェックリスト

まずは33項目をチェックし、33項目から詳細にアクセスしやすいような構成とし、項目、内容、基準、背景要因に触れて行く設定となった。質問項目にマウスを重ねると、解説を表示し、回答を助け、回答の標準化をはかるとともに、保育専門職の学習に対応するものとした（図2-8）。

The screenshot shows a web application interface for '気になる子ども支援' (Support for Children Who are Worried About). At the top, there is a navigation bar with a home icon, '個人調査票' (Individual Questionnaire), and the title '気になる子ども支援'. Below this is a list of 17 items, each in a blue rounded rectangle with an information icon and a refresh icon on the right. Item 13, '13.こだわり' (13. Obsession), is highlighted, and a white pop-up box with a blue border displays its explanation: '特定のものに興味を集中させる、ものをきちんと並べるなどの奇妙な行動、順序や空間、場所へのこだわりなど、程度を超えた子どもが見せる姿の不自然さに注目することで標準発達からのずれを見る。' (Focus on unusual behavior such as intense interest in specific things, neat arrangement of things, etc., or obsession with order, space, or place, which goes beyond the degree, to identify deviations from standard development.)

8.アレルギーがある

9.不自然な人見知り・分離不安

10.極端な内気

11.不自然な関係性（孤立）

12.無関心

13.こだわり

特定のものに興味を集中させる、ものをきちんと並べるなどの奇妙な行動、順序や空間、場所へのこだわりなど、程度を超えた子どもが見せる姿の不自然さに注目することで標準発達からのずれを見る。

15.不自然な食

16.不自然なハイハイ、歩行、動きがある・歩行の遅れ

17.手指の動きが鈍い・不自然な動きがある

図 2-8 気になる子どもチェックリスト

## 6)-7 育児環境評価票

PC、タブレット、携帯電話（スマートフォンでない携帯電話対応）などから、入力できる。プルダウンから選択、チェックボックスで複数選択、自由記述欄に入力をし、登録内容確認画面に進む（図2-9）。内容を確認し、間違いがなければ「送信」ボタンを押すと、園と入力した保護者のメールアドレスに、確認メールが送信される。園で、子どもと保護者が確認できれば登録完了となり、保護者と保育専門職が同じ情報を共有できる。

個人調査票 育児環境

(3) 1日にお子さんと向き合って一緒に遊ぶ時間はどれくらいとれますか（但し、睡眠時間は除く）

平日約 時間を選択 時間 分を選択 分

休日約 時間を選択 時間 分を選択 分

(4) お子さんと一緒に遊ぶ機会（子どもと向き合って過ごすこと）はどのくらいありますか

回答(択一)

✓ 選択してください

めったにない

月に1~2回

週に1~2回

週に3~4回

ほぼ毎日

(6) お子さんに本を読み聴かせる機会はどのくらいありますか

回答(択一)

選択してください

(7) あなたは童謡やお子さんの好きな歌と一緒に歌いますか

回答(択一)

選択してください

(8) お子さんと公園に行く機会はどのくらいありますか

回答(択一)

選択してください

(9) お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚とどの程度の頻度で訪問したりされたりしますか

図2-9 育児環境評価票

## 6)-8 保育環境評価票

「×実施なし」「○ほぼ実施」「△今後実施予定」の該当する項目をタップする。園やクラスで共通する設問は、コピーが反映される。設問には解説が用意されており、下線を引いた部分にマウスを重ねると解説を表示する。回答を助け、回答の標準化をはかるとともに、保育専門職の学習に対応するものとした（図2-10）。

個人調査票 **保育環境評価**

1.子どもの全体像を捉える 次へ

1.基本属性 次へ

1.基本属性を把握しているか。

1. ① 基本属性とは、児童名、住所、生年月日、年齢、性別、保護者氏名、連絡先、入園保育園名、保育実施期間をさす。

収集された情報が、記録され、職員が活用しやすいように整理、管理している。

実施なし ほぼ実施 今後実施予定

実施なし ほぼ実施 今後実施予定

2.観察所見 次へ 前へ トップへ

1.身体状態を把握しているか。

1.入所(園)時における子どもの出生の状況、発育歴、既往症、身体状態、疾病、感染症、平熱など子どもに関する情報を収集し記録、整理、管理されているか。

入所(園)前に説明会等、個別に子どもの状態等を聞き取り、共有しあう機会がある。

入所(園)時に健康診断調査票が整備されており、調査項目について嘱託医の指導や行政により定められたものである。

実施なし ほぼ実施 今後実施予定

実施なし ほぼ実施 今後実施予定

図2-10 保育環境評価票

## 6)-9 評価レポート

各スケールの入力結果を集計し、グラフを用いて表示し、各スケールの状況を、視覚的に把握できるものとなった。個人レポートは、園平均値と比較可能、園全体レポートは、全国平均値と比較可能な形で表示し、各スケールの状況を客観的に把握できる。発達や日々の行動、育児環境などについて、配慮を要する必要がある園児には、保育について注意を促す注意喚起サインとメッセージを表示し、保育専門職の気づきを促すことに対応した（図2-11）。

園児の氏名（ふりがな付）、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。



図2-11 評価レポート

## 6)-10 支援設計レポート

入力された各スケールの状況から、個々の園児に対応した支援設計を、目標、課題、背景、影響要因、支援方法、根拠の構成で出力する。自動的に出力したものに対して、担当保育専門職と管理職が、加筆、修正を行なうことが可能な設定とした。出力された支援設計から、個々の園児の状況を客観的に判断するだけでなく、実践に基づく判断を取り入れた支援の検討ができる（図2-12）。

園児の氏名（ふりがな付）、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。

個人調査票

### 支援設計レポート

随時レポート
定期レポート

2012年度
担当保育者 担当保育者を選択

実施日時: 2012/06/07 14:02:50 最終更新: 2012/06/07 14:02:50

**園児情報**
次へ / 個人票を閉く

<b>お名前</b> 森井みゆき	<b>備考</b> 主な養育者は母親。
<b>年齢</b> 2歳5か月(2009年12月15日)	
<b>性別</b> 女	
<b>身長</b> 48.1cm	<b>入園年月日:</b> 2,012年05月10日
<b>体重</b> 4.8kg	<b>保育時間:</b> 09:00~15:00
<b>カウブ</b> 20.83	<b>同居家族:</b> 父、母

**1 目標**
次へ / 前へ / コメントを編集

保護者が森井みゆきの特徴を受け入れ、適切な対応ができるようになり、子育てを楽しめるようになること。  
保護者が森井みゆきの特徴を理解し、子育てに前向きになること。  
森井みゆきに対して共感的な対応ができるようになり、コミュニケーションが活発になること。

配偶者に現状を伝え、でき得る援助をしてもらえるようになること。実母との未解決な問題が解決し、適度な依存ができるようになる。発達障害に関する理解が深まり、他者への援助にも目を向けるようになること。

**2 課題**
次へ / 前へ / コメントを編集

保護者は森井みゆきに対し無視など否定的な態度で接している。  
保護者には怒ることしか選択肢が無い。

保護者は現状を何とかしたいという気持ちが強い

**3 背景**
次へ / 前へ / コメントを編集

**1.音に対する反応の異常**  
大きな音に対して、音のする方に向いたり、体をビクッとさせたり、驚いたりするなどの反応を見せない

すべてを表示
非表示

図 2-12 支援設計レポート



## (5) ホームページ「保育パワーアップ研究会」の制作と運用

「トップページ」「根拠に基づく保育とは」「根拠に基づく実践とは」「根拠に基づくツール」「気になる子どもの実践例と評価」「根拠に基づくツール活用法」「WEBを活用した園児支援システム紹介」「保育パワーアップ研究会メンバー」「リンク集」「保育パワーアップ相談室」で構成(図1-6)されるホームページ「保育パワーアップ研究会」(以下、本ホームページ)の制作と運用を行った。ホームページのURLは、「<http://childnet.me>」である。本ホームページは、保育専門職のニーズにより近く、使いやすい構成となるようカスタマイズを繰り返し完成させた。

本ホームページの継続的な運用を行い、WEB園児支援システムの普及を行った。本ホームページ上に設置した電子掲示板「保育パワーアップ相談室」を活用し、本システム活用に関するサポートを行った。

ページデザインは、保育専門職のニーズに近く、保育専門職にとって使いやすいよう検討を加え発信した。発信だけの一方通行のサイトではなく、意見交換を行なえる「電子掲示板システム」を掲載し、350を超える書き込みを確認した。「電子掲示板システム」は閲覧しやすいよう、表示の切り替えが可能(スレット表示、ツリー表示、トピック表示)とし、記事検索機能を盛り込んだ。

### ①トップページ <http://childnet.me/>

トップページは、「はじめに」「おしらせ」「WEBを活用した園児支援システム」「保育パワーアップ研究会について」「書籍紹介」で構成した。ページの筆頭に「おしらせ」を掲載することで、訪問者がすぐに最新の情報にアクセスすることができるよう配慮した。また、代表者の所属を明記し、挨拶文を掲載することで、訪問者に安心感を持ってもらうよう配慮した(図2-13)。




トップページ
根拠に基づく実践とは
根拠に基づくツール
実践例と評価
ツール活用法
WEB園児支援システム
研究会 Members
リンク
みんなの相談室

## 保育パワーアップ研究会

Evidence based Child Care  
Empower Skills for Child Care Professionals



お問い合わせは  
コチラから



### 保育パワーアップ研究会へようこそ！

2月12日の研修会は終了しました。多数のご参加ありがとうございました。  
詳細は「[ここ](#)」をクリックしてご覧ください。

SITE MENU

- [★ トップページ HOME](#)
- [★ 根拠に基づく実践とは Evidence based Child Care](#)
- [★ 根拠に基づくツール Tools](#)
- [★ 実践例と評価 Practice model](#)
- [★ ツール活用法 How to use the tools](#)
- [★ WEB園児支援システム Child care supporting system](#)
- [★ 研究会メンバー紹介！ Members](#)
- [★ リンク集 Link](#)
- [★ 保育パワーアップ相談室 yybbs](#)

INTERNATIONAL CHILDREN'S CARE AND LEISURE DEVELOPMENT  
安梅研究室のサイトへ！

### はじめに

私たちは、12年間にわたるコホート研究により、子どもの健やかな成長に影響する要因と支援のあり方を科学的に分析してきました。そして、5つの支援ツール（発達評価ツール、社会的スキル尺度、気になる子ども支援ツール、育児環境評価ツール、保育環境評価ツール）を開発するとともに、実践で生かす方法について整理してきました。これらの活用により、質の高い保育が実現し、子どもと保護者によりよい支援をもたらすことを確認しています。

また、5つの支援ツールを電子化し「より活用しやすい形」「成果を視覚的にとらえやすい形」「柔軟性および汎用性の高い形」で提供するWEB園児支援システムを開発し、保育実践の場での運用に取り組んでいます。

本サイトでは、質の高い子育て・子育て支援に向け、これらのツールを実践で活用する方法を紹介します。WEB版（WEB園児支援システム）にご興味をお持ちの方、まずは体験版をお試しください。

[WEB園児支援システム](#) をクリックしてご連絡ください。

筑波大学大学院 教授 安梅 勲江

### WEBを活用した園児支援システム



5つの支援ツールと支援設計をWEB上で活用する仕組みをつくりました！

<特徴>

- ・結果を瞬時にグラフ化し視覚的に表示
- ・全国平均との比較
- ・個々の園児の発育状況をグラフで確認
- ・配慮を要する子どものかわりのヒントを表示

体験版のお申し込みは、下記をクリック！！

[WEB園児支援システム](#)

>> 詳細はコチラ

### お知らせ News

- ・2012.7.30 [メンバーのページを更新しました！](#)
- ・2012.2.12 [2月12日の研修会は終了しました。たくさんの方にご参加いただきありがとうございました。](#)
- ・2011.12.20 [保育研修会を開催します。詳細はこちらをクリックしてください。](#)
- ・2011.11.10 [保育パワーアップ相談室が出来ました。ご相談はコチラ。](#)
- ・2011.10.31 [WEB園児支援システムが完成しました。デモ版を体験できます！](#)
- ・2011.10.31 [ホームページがリニューアルオープンしました。](#)

### 本のご紹介！




### 保育パワーアップ研究会について

保育パワーアップ研究会は、質の高い子育て・子育て支援の場での実践を支援する研究会です。

図2-13 ホームページのイメージ

②根拠に基づく実践とは <http://childnet.me/ebcc.html>

「プロとしての根拠に基づく実践とは」「実践のポイント」「根拠と評価・気づき」「根拠に基づく実践の意義と効果」で構成した。まず、保育専門職に対する科学的根拠に基づく実践システムの確立が求められていることを、保育専門職に伝わりやすい平易な言葉で記述し、求められている実践とはどのようなものなのか、ポイントを絞って記述した（図2-14）。

The screenshot shows the website for 'Evidence based Child Care' (EBCC). The header includes the logo '保育パワーアップ研究会' and a navigation bar. The main content area is titled '根拠に基づく実践とは Evidence based Child Care'. It features a list of links: 'プロとしての根拠に基づく実践とは', '根拠に基づく実践のポイント', '根拠と評価・気づき', and '根拠に基づく実践の意義と効果'. Below this is a section 'プロとしての根拠に基づく実践とは' which contains a sub-section 'プロというためには何が必要だろうか' and a numbered list of three techniques: 1. プロ魂 (プロとしての哲学), 2. プロ技 (プロとしての知識と技術), and 3. それでは根拠とは? なぜ今、根拠に基づく実践が必要なのか. There is also a section '必要とされる3つの技術' with a list of three items: 1. 子どもや保護者、社会が訴えたり表現したりすること, 2. 真のニーズから子どもと保護者、社会に「もっとも適切な実践」を実施する技術, 3. 実践を「評価（本当に効果があったのか?）」して、さらによりよい実践に生かす「フィードバック」技術. Another section '実践のために必要な視点' lists four items: 1. 子ども, 2. 保護者や専門職, 3. かかわり, 4. 環境. A final section '子育て環境に必要な8つの条件' lists one item: 1. 日常生活の中に多様性に富んだ人とのかかわりの機会があること. The left sidebar contains a 'SITE MENU' and a 'ツールのダウンロード' section with several PDF files for download, such as '一般発達評価票 135KB' and '社会的スキル尺度 66KB'.

図2-14 根拠に基づく実践とは

③根拠に基づくツール <http://childnet.me/tools.html>

「根拠に基づく5つのツール」「総合的な子育て・子育て支援のために」「評価ツールの可能性」で構成した。5つの支援ツール（発達評価ツール、社会的スキル尺度、気になる子ども支援ツール、育児環境評価ツール、保育環境評価ツール）を紹介するとともに、「子育て子育て支援への活用」「ツールの可能性」を記載した。各ツールをPDF形式でダウンロードできるようにし、ツールの構成や内容を把握できるような配慮をした（図2-15）。

The screenshot shows the website for 'Evidence-based Child Care Tools'. At the top, there is a navigation bar with links for 'Home', 'Evidence-based Child Care', 'Tools', 'Practice Model', 'Support System', 'Members', 'Link', and 'Contact Us'. Below this is a 'SITE MENU' sidebar with icons for each section. The main content area is titled '根拠に基づくツール Tools' and lists three categories of tools:

- 一般発達評価票** (General Development Evaluation Form): A form used for developmental screening, including Denver II and K-Form. It allows for customization of items and age ranges.
- 社会的スキル尺度** (Social Skills Scale): A scale for measuring social skills in preschool children, based on research by Okamoto et al. It includes a checklist for coordination, self-control, and self-expression.
- 気になる子どもチェックリスト** (Child Checklists): A checklist for understanding children and identifying support needs, based on the experience of childcare workers. It includes 33 items.

At the bottom of the page, there is a link to 'ページのトップへ' (Back to top of page).

図2-15 根拠に基づくツールとは

#### ④ 気になる子どもへの実践例と評価 <http://childnet.me/model.html>

「気になる子ども評価ツールの考え方」「評価ツールの活用法」「実践事例」で構成した。まず、なぜ気になる子どもを評価するのかを示した上で、気になる子どもを「気にする」ときのポイントを具体的にしめした。次に、評価ツールの具体的な活用方法を示し、ツールを活用した実践事例を紹介した（図2-16）。

The screenshot shows a website interface with a top navigation bar containing links like 'トップページ', '根拠に基づく実践とは', '根拠に基づくツール', '実践例と評価', 'ツール活用法', 'WEB園児支援システム', '研究会 Members', 'リンク', and 'みんなの相談室'. Below this is a breadcrumb trail: 'トップページ > 気になる子どもへの実践例と評価'. The main content area is titled '気になる子どもへの実践例と評価 Practice model' and includes a list of links: '気になる子ども評価ツールの考え方', '評価ツールの活用法', and '実践事例'. A sidebar on the left contains a 'SITE MENU' with categories like 'トップページ HOME', '根拠に基づく実践とは Evidence based Child Care', '根拠に基づくツール Tools', '実践例と評価 Practice model', 'ツール活用法 How to use the tools', 'WEB園児支援システム Child care supporting system', '研究会メンバー紹介! Members', 'リンク集 Link', and '保育パワーアップ相談室 yybbs'. Below the menu is a 'ツールのダウンロード' section with icons and descriptions for various tools: '一般発達評価票 135KB', '社会的スキル尺度 66KB', '気になる子どもチェックリスト 205KB', '育児環境評価票 70KB', and '保育環境評価票 524KB'. The main text area contains the following content:

### 気になる子ども評価ツールの考え方

**なぜ気になる子どもの評価なのか**

「発達障害」の症状は、低年齢児において現れることが多いといわれています。たとえば、発達障害の子をもつ保護者の中には、3歳以前に「どこか違う」と感じる人もいます。

発達障害は、3歳児以降に典型的な行動として現れるとされていますが、乳児期でも環境の変化や刺激に対して過敏に反応する、むずかりやすい、何となくそわそわした体の動きがあるなど、保護者が「ちょっと違う」と感じるような姿を見ることがあります。診断が出る、出ないにかかわらず、子ども本人にとっての現実（集団のなかで生活しにくいなど）に変わりはありません。むしろ診断が出ないことで必要な理解や支援が受けられないまま、「大変さ」を抱き、生活しています。支援を必要としている子どもに対しては、適切な時期に、適切な支援の提供が求められるでしょう。

子どもが「今、何に困っているか」、「なぜ困っているのか」を明らかにした上で、支援が必要かどうかを見極める必要があります。ひとりひとりの子どもの状況や発達過程を踏まえた適切な保育を行い、子どもの健やかな育ちを保障することが、専門職の担う役割です。

**気になる子どもとは**

<気になる子どもを「気にする」時の3つのポイント>

1. 子どもの発達に遅れはないか？
2. 標準的な発達の姿から、どんな風になぜしているか？
3. あってほしくないサインがあるかどうか？

**1. 発達の遅れ**

気になる子どもの発達を見る時に、まず目を向けるのが発達の遅れです。本来の年年齢に比べて遅れているかどうか、またどの程度遅れているのかを見る視点です。一般的な発達を見る視点とも言え、ここで決まった領域の遅れも見えてきます。保育者は日頃から一般的な発達の筋道をしっかり理解しておくとともに、一般発達検査票などを使って、子どもの発達を客観的に把握しておく必要があるといえるでしょう。

**2. 標準的な発達からの「ずれ」**

気になる行動を捉える場合には、標準的な発達からの「ずれ」に注目する必要があります。「ずれ」とは子どもが見せる姿の極端さであり、例をあげると人見知りが出るはずの年年齢で「まったく人見知りをしない」や、逆に「極端な人見知り」が見られる。また食事に関してならば「好き嫌い」の範囲を超えた「白飯しか食べない」というような姿のある場合です。標準発達上は、「人見知りをする」という課題をクリアしていても、実際には極端な人見知りで、まったく視線を合わせようもしない、など標準からの明らかなずれが見られる場合、気になる姿は、「ずれ」に現れます。このような「ずれ方」の傾向を把握していくことが大切です。

**3. あってほしくないサインが見られるかどうか**

身体に症状として現れる「チック症状」や病気が疑われるような「ひきつけ」などがあるかどうかを見る視点です。気になる姿が、実は何らかの病気の症状である、ということも十分に考えられます。その場合には、医師の診断やそれに基づく適切な支援が必要になる場合もあります。

しかし、決して忘れてならないのは、このような「気になる姿」に注目するのは、専門職にとって理解に困る子どもの行動を、すぐに発達障害と結びつけ、「障害児」というレッテルを貼るためではない、ということです。子どもが支援を必要としているかどうかを見極め、必要な場合には子どもと保護者に適切な支援を届けることが最大の目的なのです。

図2-16 気になる子どもへの実践例と評価

⑤根拠にもとづくツール活用法 <http://childnet.me/use.html>

「根拠に基づくツールの活用法」「子どもの発達を保護者と共有する」「育児相談に活用する事例」で構成した。評価ツールを実践でうまく使うためのポイントを明記した上で、ツールをうまく活用している事例を紹介した（図2-17）。

The screenshot shows the website 'Childnet' with a navigation bar and a sidebar. The main content area is titled '根拠に基づくツール活用法' (Evidence-based tool usage). It includes a diagram titled '3つのツールを使うことで？' (What if we use 3 tools?) which states that using tools together helps in 'realizing the best practice' by combining 'better childcare for children and guardians' with 'high professional skills and satisfaction for staff'. Below this is a case study titled '事例：ある日の懇談会' (Case: A day's consultation meeting) featuring a dialogue between a parent and a staff member. The parent expresses concern about a child's behavior, and the staff member explains the child's developmental needs. At the bottom, there is a table with the caption '↓クリックで拡大します！' (Click to enlarge!).

図2-17 根拠に基づくツール活用法

⑥ WEB園児支援システム <http://childnet.me/web.html>

まず、なぜ子どもの情報をクラウド環境下で活用するのかを明記したうえで、開発したWEB園児支援システムについて、ポイントを絞って紹介した。また、体験版活用へとスムーズに進めるよう、体験版活用連絡先を掲載した（図2-18）。

**WEBを活用した園児支援システム** Child care supporting system

大切な園児情報を確実に集積し、子どもと保護者のために活用し、未来につなぐために...

少子高齢化を迎え、ますます孤立した子育てについて、質的にも量的にも十分な支援策を講じることが喫緊の課題となっています。発達障害や虐待など特段の配慮を要する子どもの増加は社会問題となっており、子育て支援にかかわる専門職への社会の期待は高まるばかりです。保護者と子どもを日常的に支えつつ、虐待予防や障害児支援を展開することは国の重要施策の一つであり、新保育所指針では、保育の質向上に向けた「根拠に基づく支援」「評価」「自己点検」の重要性を強調しています。保育専門職には、『子どもと保護者の真のニーズの見極めと気づき』による「的確な実践」「実践の評価」「よりよい実践へのフィードバック」という支援ループを活用した「根拠に基づく実践」が求められています。また、『特段の配慮を要する子どもを早期に把握し、他機関と連携した質の高い支援の実施と評価』が求められています。

12年間の全国保育コホート（3,000名/パネルコホート）研究による科学的根拠に基づき開発した5つのツール（発達評価、社会的スキル尺度、気になる子ども支援ツール、育児環境評価、保育環境評価）をWEBアプリケーション化し「より活用しやすい形」「成果を視覚的にとらえやすい形」「柔軟性および汎用性の高い形」で提供するシステムを開発しました。

**社会問題**

- 孤立した子育て。
- 特段の配慮を要する子ども（発達障害、虐待など）の増加。
- 高まる専門職への期待
- 求められているのは根拠に基づく実践。
- 根拠に基づく支援・評価、自己点検の重要性。
- 子どもの気になる行動や保護者のサインをどのように受け止め、判断し、実践し、評価すべきか、多くの専門職が悩んでいる。

**これまでの活動**

- コホート研究（12年・36,000人）
- 5つの支援ツール・支援設計開発
- 一般発達・育児環境・保育環境
- 根拠を実践の場で活用
- 保育実践における着実な質向上
- 気になる子ども支援・社会的スキル
- 発達障害がいや虐待の早期把握・支援

**WEBを活用した園児総合支援システム開発**

紙ベースのツールです。アイコンをクリックし、ダウンロードしてお使いください。

**ツールのダウンロード**

- 一般発達評価票 135KB
- 社会的スキル尺度 66KB
- 気になる子どもチェックリスト 205KB
- 育児環境評価票 70KB
- 保育環境評価票 524KB

上記の各ツールの使い方は [ここをクリック!!](#)

保育環境評価票の使い方は [ここをクリック!!](#)

**特徴**

- 大きめの画面をタップしながら入力し、結果を瞬時にグラフ化し視覚的に表示する。
- 全国平均との比較ができるだけでなく、個々の園児の発育状況もグラフで確認することができる。
- 特別な配慮が必要な子どもについて、アラート、かかわりのヒントを表示する。

●現在、体験版を体験できます。  
(体験版、本版ともに無料です。平成25年3月以降は、サーバー使用料として600円/月程度がかかります。見込みです。)

- インターネット環境があれば、どこでも活用できます。
- パソコン（windows, Mac）、iPad等のタブレット、スマートフォン等、端末を選びません。

図2-18 WEB園児支援システムの紹介

⑦ 保育パワーアップメンバー <http://childnet.me/web.html>

本プロジェクトのメンバーを紹介することで、訪問者に安心して利用いただけるよう配慮した（図2-19）。



図2-19 保育パワーアップメンバー

⑧ リンク集 <http://childnet.me/web.html>

子育て子育て支援に関係するサイトを集め、リンク集を作成した。



図2-20 リンク集



⑨保育パワーアップ相談室 <http://childnet.me/yybbs/>

保育e-ラーニングのパイロットページとして作成した「電子掲示板システムによるQ&Aコーナーとして作成した（図2-21）。

009330

**保育パワーアップ相談室**

[トップに戻る] [スレッド表示] [ツリー表示] [トピック表示] [留意事項] [ワード検索] [管理用]

自発的行動。 - 保育士目指し高校生 2012/08/21(Tue) 19:32 No.375  
 ↳ Re: 自発的行動。 - [ ] 2012/09/13(Thu) 16:57 No.377  
 ↳ Re: 自発的行動。 - 保育士になりたい 2012/09/13(Thu) 20:52 No.378  
 ↳ Re: 自発的行動。 - [ ] 2012/09/14(Fri) 09:02 No.379  
 ↳ Re: 自発的行動。 - 保育士になりたい 2012/09/16(Sun) 20:10 No.383

「きれいね」「おいしいね - ひつじ 2012/07/09(Mon) 02:31 No.274  
 ↳ Re: 「きれいね」「おいしいね - [ ] 2012/07/09(Mon) 02:32 No.275

飛行機の飛ばし方について - くま 2012/07/09(Mon) 02:13 No.264  
 ↳ Re: 飛行機の飛ばし方について - [ ] 2012/07/09(Mon) 02:15 No.265

保育に生かすには? - ねこ 2012/07/10(Tue) 11:13 No.288  
 ↳ Re: 保育に生かすには? - [ ] 2012/07/10(Tue) 11:24 No.295

でんぐり返しについて - くま 2012/07/09(Mon) 02:10 No.262  
 ↳ Re: でんぐり返しについて - [ ] 2012/07/09(Mon) 02:12 No.263

---

009330

**保育パワーアップ相談室**

[トップに戻る] [スレッド表示] [ツリー表示] [トピック表示] [留意事項] [ワード検索] [管理用]

No.	タイトル名	お名前	返信数	最終更新
375	自発的行動。	保育士目指し高校生	4	2012/09/16(Sun) 20:10 保育士になりたい
274	「きれいね」「おいしいね	ひつじ	1	2012/07/09(Mon) 02:32
264	飛行機の飛ばし方について	くま	1	2012/07/09(Mon) 02:15
288	保育に生かすには?	ねこ	1	2012/07/10(Tue) 11:24
262	でんぐり返しについて	くま	1	2012/07/09(Mon) 02:12
290	発達のアンバランス (凸凹	バンダ	1	2012/07/10(Tue) 11:22
---	---	---	---	2012/06/14(Thu) 15:22

図2-21 電子掲示板システム

## (6) 本システムの継続的運用と活用状況の評価

### 1) 体験版システムとシステム活用マニュアルを作成

体験版システムとシステム活用マニュアル(図2-22、別添1)を作成し、本ホームページを通して配信し、本システムの活用をサポートした。ホームページを通して、57の保育所からWEB園児支援システム体験版の利用申請があり、39の保育所が本システムの導入を行った。

体験版の園児の氏名(ふりがな付)、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。

#### ① 体験版システム

URL <https://login.salesforce.com/>

ユーザー名 demo01@childnet.me

パスワード tsukubauniv

#### ② 活用マニュアル(別添資料あり)

##### はじめに

このシステムは、お子さんの発達や育児環境の様子を、グラフを用いてわかりやすく示します。園や全国の状況と比較することもできます。視覚的、客観的に評価するのは、子どもが支援を必要としているかどうかを見極め、適切な支援を届けることが最大の目的です。「発達にかたよがりがある」「遅れがある」というレッテルを貼るためではないということをご理解いただいた上でご利用ください。

### 1 本システムの構成



図2-22 活用マニュアルのイメージ

## 2) 保育所訪問

開発したシステムの展開向け、全国35か園を訪問し、システムの特徴や使い方、保育実践の場での活用方法に関する説明、及び、演習を行った。説明、演習のあと、WEB園児支援システムをより良いものにしていくための意見交換を行った。訪問後は、電話、e-mail、ホームページ等でサポートを行った。

## 3) 保育専門職の資質向上支援（研修会）

保育を必要とするすべての子どもたちの健やかな育ちの保障と保育に携わる専門職の資質向上を目的とした保育研修会を開催した。第1回目は、平成24年2月12日に実施した。研修会の内容は「経験的根拠」と「科学的根拠」に基づいた保育評価と保育実践のあり方の講演とグループワークであった。参加者は、園長、主任、保育士、保育専門官、研究者、学生など65名であった。第2回目は、平成25年8月18日に実施した。研修会の内容は、WEB園児支援システムを活用した質の高い保育支援に関するワークショップであった。参加者は、園長、主任、保育士、保育専門官、研究者、学生など53名であった。

さらに、2010～2013年の4年間に248回、全国、都道府県、市町村レベルの保育園、幼稚園、子育て支援研修において本システムの活用法を紹介し、根拠に基づく子育て支援の全国的な普及を図った。

## 4) 保育パワーアップ研究会の開催

保育専門職、システム開発者、研究者で構成される保育パワーアップ研究会を開催し、WEB園児システムの改定点、e-ラーニングシステム（支援設計レポート）の活用法などに関する検討を行った。研究会の開催数は、合計21回であった。

ユーザー（導入した保育所、幼稚園）の意見を反映したカスタマイズにより、インターフェイス、入力やレポート表示ボタンの配置、育児環境評価レポート、一般発達評価レポートなどが改訂され、より実践のニーズを反映したシステムとなった。

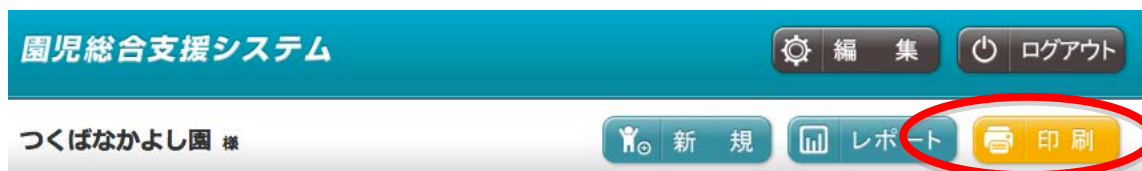
### 4)-1 全体像

- ① 園児一覧画面、個人画面、個人レポート、園レポートなど、すべての画面に「このページのトップに戻る」ボタンを付けた。
- ② 園児一覧画面のフィルタの「クラスを選択」「年齢を選択」のボタンは、「クラスを選択（全選択）」「年齢を選択（全選択）」のように表示を変更した。

- ③ 園児一覧画面のフィルタに、誕生月の選択ボタンを追加した。



- ④ 帳票一括出力機能をつけた。



- ⑤ ツール選択欄に、「すべて表示」のボタンを作成し、未入力ツールを確認できるようにした。

園児の氏名（ふりがな付）、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。

氏名	発達	社会	気になる	養育環境	保育環境	レポート
くろたけお 黒田丈雄	確定	確定	確定	未入力	未入力	
うめだみわこ 梅田美和子	確定	確定	確定	確定	未入力	
やのしゅんじ 矢野俊二	確定	確定	確定	未入力	未入力	

- ⑥ タイトルやボタンなどの表示を、「評価」から「チェック」に変更した。

(レポートのみ、定期調査レポート、随時調査レポート)

- ⑦ 「定期チェックはお誕生月をお願いします」というコメントを追加した。

保存してダッシュボードへ      コピーして定期チェック      コピーして随時チェック

保存      定期チェック      随時チェック

定期チェックはお誕生月をお願いします

#### 4)-2 レポート

- ① 年度選択ができるようにした。

つくばなかよし園のプロフィール

**園情報**

園番号 O-0000000001

年度 2012年度

登録園児数 158名 (男児 93名 / 女児 65名)  
0歳 2名 / 1歳 3名 / 2歳 12名 / 3歳 24名 / 4歳 28名 / 5歳 33名 / 6歳 29名

気になる子ども一覧

- ② 個人レポートに、生年月日表示を追加した。

- ③ アラートの表示、非表示の切り替えボタンができるようにした。

園児の氏名(ふりがな付)、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。

支援設計レポート 随時レポート

**園児情報**

年度 2012年度

クラス

氏名/年齢 もりい みゆき  
森井 みゆき (女) (2009年12月25日生)

**表示設定**

**閲覧者の選択**

保育専門職  
 保護者

**アラートメッセージの表示設定**

表示する  
(  アラートメッセージ全文表示 )  
 非表示

[設定を閉じる](#)

#### 4)-3 個人調査シート

- ① これまでは、上書き保存により最新の情報のみ表示させていたが、年度選択ボタンを追加し、年度ごとの変更内容を保存できるようにした。
- ② 身長、体重の項目を追加した。  
園児の氏名(ふりがな付)、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。

年度

#### 園児情報 (2012年度)

子どもの姓名	森井 みゆき
ふりがな	もりい みゆき
性別	女
生年月日	2009年12月25日(平成21年12月25日)
身長	cm
体重	kg
入園年月日	
担当保育者	

#### 4)-4 気になる子ども一覧表示

- ① 気になる子ども一覧表示画面にタブを設け、タブの切り替えにより、個人別一覧表示と項目別一覧の2種類を表示できるようにした。

個人別一覧  項目別一覧

---

**だるまさんころんだ (1歳 2ヶ月)**

**30.気になる癖 (1)指しゃぶり**

1.寝る前などに親指やその他の指をしゃぶる か

---

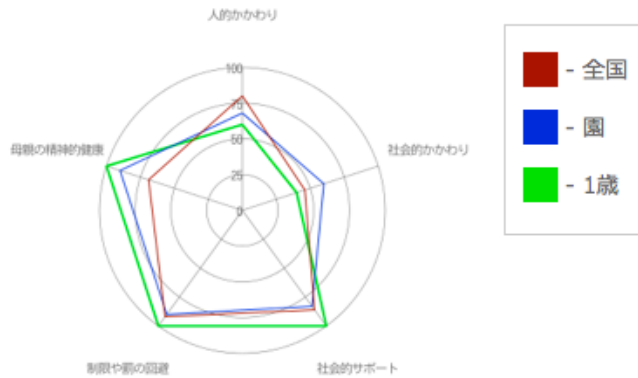
**閃きよし (1歳 3ヶ月)**

**2.不自然な泣きぐせ**

哺乳後、寝かせようとするときすぐ泣いてしまう 子 保

#### 4)-5 育児環境評価票

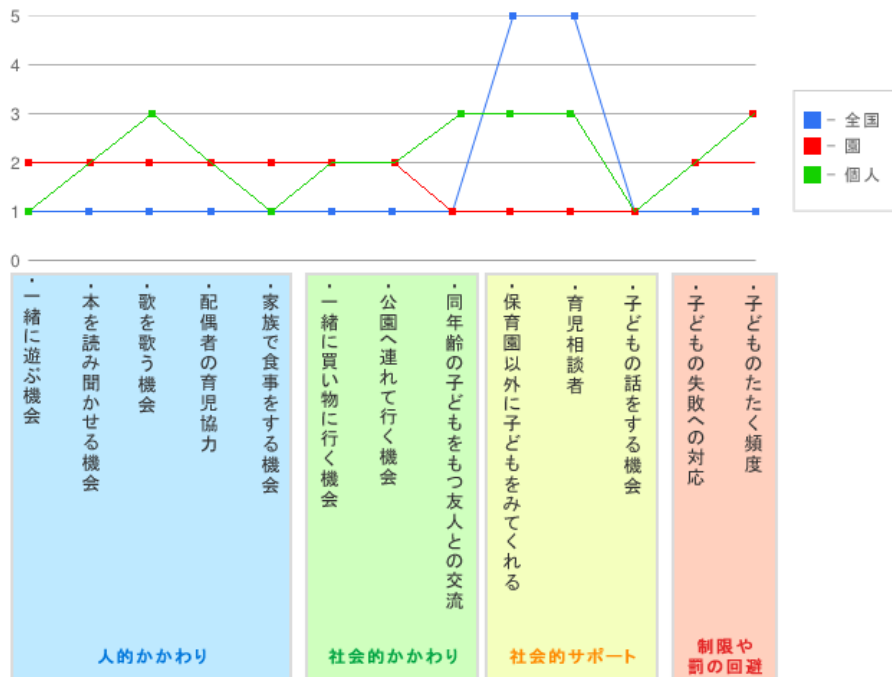
- ① レーダーチャートの項目「母親のストレス」を「母親の精神的健康」との表記に変更した。
- ② 養育環境グラフに、「円の外側に近いほど望ましい養育環境です」という言葉を追加した。
- ③ 養育環境評価グラフを拡大表示可能とした。



拡大表示

※円の外側に近いほど望ましい養育環境です

- ④ 養育環境の5項目について、さらに「13項目のグラフ」を表示させた。



4)-6 一般発達評価票

- ① 発達評価票の出力様式を追加した (A4版 (A3に拡大可能)、紙ベースの発達評価票と同じ様式で出力可能)。
- ② 発達評価票の出力様式に「園名」の欄を追加した。
- ③ 発達評価票の出力様式は、前回と今回の比較ができるようにした (結果表示枠を2列にし、2回分の結果を表示させた)。

発達チェック

発達のみやす

印刷

園名	つくばなかよし園		年度	2010	クラス		名前/年齢	森井 みゆき (1歳1ヶ月)	実施日時	1: 1歳1ヶ月(2010/12/01) 2: ( )	担当保育者	1: 2:
年齢	運動発達				社会性発達				言語発達			
	粗大運動		微細運動		生活技術		対人技術		表現		理解	
	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
7:06	片足で30秒立つ		ピアノやオルガンで好きなようにひく		ほうきで掃除をする		ひとりがちりとりを持ち、一人がほうきを持って協力して掃除をする		ひらがなの本を完全に読む		簡単な足し算ができる	
7:00	まりつきでまりを脚の下にくぐらせる		風船や鶴を自分で折る		ひもを結びにする		友だちがやって欲しいことを察してやってあげる		幼児語をほとんど使わなくなる		時計の針を正しく読む	
6:06	ひとりで縄跳びをする		絵の具で絵を描く		手ぬぐいや雑巾を絞る		ばば抜きができる		ひらがなの本を本でいたい読む		トランプの神経衰弱をする	
6:00	片足で10秒立つ		人物画(6部分)		ひとりで外出の支度が完全にできる		ひとりで簡単なレールのゲームができる		自発的に物語を読む		反対類推ができる(2/3)	
5:06	ブランコをこきながら立ち座ったりする		よく飛ぶように飛行機の折り方や飛ばし方を工夫する		体をタオルで拭く		店で買い物をしてお釣りをもらう		しりとりを、つなげる		なぞなぞをする	
5:00	片足で5秒立つ		人物画(3部分)		ひとりで外出の支度がほぼできる		まねて簡単なレールのゲームができる		まねて物語を読む		文章の復唱、(2/3)	
4:08	スキップができる		紙飛行機を自分で折る		ひとりで着衣ができる		砂場で二人以上で協力して一つの山を作る		文章の復唱、(2/3)		左右が分かる	
4:04	ブランコに立ち乗りしてこぐ		はしむボールをつかむ		信号を見て正しく道路を渡る		ジャンケンで勝負を決める		四数詞の復唱、(2/3)		数の概念が分かる (5まで)	
4:00	片足で散歩跳ぶ		紙を直線にそって切る		入浴時、ある程度自分で体を洗う		おとなに断って移動する		両親の姓名、住所を言う		用途による物の指示、(5/5)	
3:09	縄跳び(両足をそろえて前に跳ぶ)		十字を書く		鼻をかむ		友だちと順番に物を使う(ブランコなど)		文章の復唱、(2/3)		数の概念が分かる(3まで)	
3:06	三輪車をこげる		投げたボールをつかむ		手を洗って拭く		友だちにおもちゃを貸したり借りたりする		文章の復唱、(1/3)		数の概念が分かる(2まで)	
3:03	でんぐり返しをする		ボタンをはめる		顔をひとりで洗う		「ごうしていい?」と許可を求める		同年齢の子と会話ができる		高い、低い分かる	
3:00	片足で2~3秒立つ		はさみを使って紙を切る		上着を自分で脱ぐ		ままごとで役を演じることができる		二語文の復唱、(2/3)		赤、青、黄、緑が分かる(4/4)	
2:09	立ったままでぐるっと回る		まねて丸を書く		靴をひとりではく		年下の子どもの世話をやきたがる		二数詞の復唱、(2/3)		長い、短い分かる	
2:06	足を交互に出して階段を上がる		まねて直線を引く		ごはんを自分で食べる		友だちとけんかをすると言いつけに来る		自分の姓名を言う		大きい、小さい分かる	
2:03	両足でびよんびよん跳ぶ		族棒などに両手でぶら下がる		ひとりでパンツを脱ぐ		電話ごっこをする		「きれいね」「おいしいね」などの表現ができる		鼻、髪、歯、舌、へそ、爪を指示する(4/6)	
2:00	ボールを前にける		積木を横に二つ以上並べる		排尿を予告する		主養育者から離れて遊ぶ		二語文を話す(「わんわん来た」など)		「もうひとつ」「もうすぐし」が分かる	
1:09	ひとりで一段ごとに足をそろえながら階段を上がる		鉛筆でぐるぐる丸を書く		ストローで飲む		友だちと手をつなぐ		絵本を見て3つの物の名前を言う		絵本を読んでもらいたがる	
1:06	走る		コップからコップへ水を移す		パンツをはかせるとき、両足を広げる		困難なごこに出会うと助けを求める		絵本を見て1つの物の名前を言う		絵本を読んでもらいたがる	
1:04	靴をはいて歩く		積木を二つ重ねる		自分の口もとをひとりで拭こうとする		簡単な手伝いをする		3語文を言う		簡単な指示を実行する	
1:02	レ 2~3歩を歩く		コップの中の小粒を取り出そうとする		お菓子の包み紙を取って食べる		ほめられると同じ動作を繰り返す		2語文を言う		要求を理解する (3/3)	
1:00	レ 座った位置から立ち上がる		レ なぐり書きをする		レ さじで食べようとする		レ 主養育者の後追いをする		レ 言葉を1~2語、正しくまねる		レ 要求を理解する (1/3)	
0:11	レ つたい歩きをする		レ おもちゃの車を手で走らせる		レ コップを自分で持って飲む		レ 人見知りをする		レ 音声をまねようとする		レ 「ハイハイ」や「さよなら」の言葉に反応する	
0:10	レ つかまって立ち上がる		レ びんのふたを開けたり閉めたりする		レ 泣かずに欲求を示す		レ 身振りをまねる(オウムテンテンなど)		レ さかんにおしゃべりする(喃語)		レ 「いいません」と言うと、ちよっと手を引っ込める	
0:09	レ 物につかまって立っている		レ おもちゃのたいこをたたく		レ コップなどを両手で口に持っていく		レ おもちゃを取られると不快を示す		レ タ、夕、ヤなどの音声がでる		レ 知っている人の声を聞き分ける	
0:08	レ ひとりで座って遊ぶ		レ 親指と人差し指でつかもちょうとする		レ 顔を拭こうとするといやがる		レ 顔を笑って見かけたり話しかけたりする		レ マ、ハ、ハなどの音声がでる		レ 声の方に振り向く	
0:07	レ 腹ばいで体を回す		レ おもちゃを一方の手から他方に持ち替える		レ コップから飲む		レ 親しむと怒った顔が分かる		レ おもちゃなどに向かって声を出す		レ 相手の話し方で感情を聞き分ける	
0:06	レ 寝返りをする		レ 手を出して物をつかむ		レ ビスケットなどを自分で食べる		レ 鏡に映った自分の顔に反応する		レ 人に向かって声を出す		レ 見て笑いかける	
0:05	レ 横向きに寝かせると寝返りをする		レ ガラガラを振る		レ おもちゃを見ると動きが活発になる		レ 人を見ると笑いかける		レ キーキー言う		レ 主養育者の声と他の人の声を聞き分ける	
0:04	レ 首がずわる		レ おもちゃをつかんでいる		レ さしから飲むことができる		レ おあやされる時と声を出して笑う		レ 声を出して笑う		レ 話しかけられた方を向こうとする	
0:03	レ 仰向けにして体を起こした後に寝かす		レ 顔に触れた物を取ろうとしなくなる		レ 顔に布をかけられて不快を示す		レ 人の声がする方に向く		レ 泣かずに声を出す		レ 人の声で静まる	



#### 4)-7 ホーム画面の追加

- ① 園児一覧画面に入る前の、ホーム画面を追加した。

園児の氏名(ふりがな付)、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。



**誕生日の子ども一覧**

まだチェックが終わっていない子どもの一覧です。  
誕生日に合わせてチェックしましょう。

閉じる

<a href="#">立野都</a>	<a href="#">松戸ななこ</a>	<a href="#">河野隼士</a>	<a href="#">浅井知世</a>
<a href="#">さだ菊生</a>	<a href="#">荒井美里</a>	<a href="#">清野璃奈子</a>	<a href="#">森島六郎</a>
<a href="#">田所エリカ</a>	<a href="#">真田雅彦</a>	<a href="#">稲葉洋</a>	<a href="#">高見朝香</a>
<a href="#">宮田哲平</a>	<a href="#">小原りえ</a>	<a href="#">山崎翔真</a>	<a href="#">日比野美優</a>
<a href="#">市原小雁</a>	<a href="#">腰川優斗</a>	<a href="#">今村瞬</a>	<a href="#">岡田由樹</a>
<a href="#">吉岡優一</a>	<a href="#">今泉敦</a>	<a href="#">沢村碧海</a>	

**支援ツール**



**発達チェック**

実際に日本の3万人以上の園児の年齢別の発達を調べ、それに基づいて作られた「発達の目安」です。



**社会的スキル尺度**

対人技術発達チェックリストを用いることで、日本の標準的な子どもの発達と比較して、その子どもの位置を確認することができます。



**気になる子ども支援**

子どもの姿の全体的な理解と、気になる子どもが特に支援が必要かどうかを見極め、支援に役立てるためのものさしです。



**養育環境チェック**

米国で開発され世界で100カ国以上で活用されている指標です。保護者に記入してもらい、日頃の子ども家庭環境の様子を5分程度で把握できます。



**保育環境チェック**

子どもの健やかな成長に望ましい効果をもたらす保育環境について、長時間保育の携わる4千人の専門職の意見を集めて整理しました。

**初期設定**



**園情報の編集**

園名やクラス名、担当保育者、保護者用入力ページのパスワード設定などができます。



**園児の新規追加**

園児リストに新規で園児情報を追加します。



**パスワードの変更**

園児総合支援システムにログインするためのパスワードを変更できます。

4)-8 e-ラーニングシステムとして活用可能な保育支援設計レポート機能作成

- ① 目標、課題、背景、影響要因、支援方法、根拠で構成される「支援設計レポート」システムに追加した。
- ② 「背景」「影響要因」「根拠」は、システムに入力されたデータから自動入力できるようにした。
- ③ 「課題」は、一部はシステムから自動入力し、自動入力された「背景」「影響要因」「根拠」を参照しながら、手入力追加を可能とした。
- ④ 「目標」「支援方法」は、「課題」「背景」「影響要因」「根拠」から検討しながら作成できるようにした。
- ⑤ 支援設計全体について、主任や園長が、コメントやアドバイスを書き込めるようにした。
- ⑥ 支援設計レポートから、プロフィール画面に身長、体重などを追加編集できるようにした。
- ⑦ 支援設計レポートに「自由入力」欄をもうけ、アレルギーの情報などを追加できるようにした。
- ⑧ 「根拠」について、グラフを用いて視覚的に確認できる表示とした。  
園児の氏名(ふりがな付)、クラス、性別、生年月日、家族構成等は、すべて架空のデータです。

個人調査シート
森井 みゆき 支援設計レポート

随時レポート
定期レポート

年度 2012年度 最終更新: 2013/01/27 22:24:35

園児情報
園児情報を編集

氏名	森井 みゆき			備考
年齢	2歳 6ヶ月	性別	女	
担当保育者	<span>E.M</span>			
身長	cm	入園年月日		
体重	kg	保育時間	09:00~19:30	
カウブ	同居家族	5人、父、母、兄1人、姉1人		

1 目標
次へ / コメントを編集

目標のコメントを入力します。  
目標のコメントを入力します。

2 課題
次へ 前へ / コメントを編集

3 背景
次へ 前へ / コメントを編集

すべて表示

3

背景

次へ 前へ コメントを編集

すべて表示

1.音に対する反応の異常

周りの音に神経質に反応し、不安定になる

3.抱きにくい

(自由記述)

13.こだわり

タオル等を持ったり口にくわえたりすることで落ち着こうとする

15.不自然な食

食にむらがある

子…子ども 保…保護者 か…かかわり 環…環境 不…不明

4

影響要因

次へ 前へ コメントを編集

子どもの要因 編集する

保護者の要因 編集する

かかわりの要因 編集する

保護者を取り巻く環境の要因 編集する

5

支援方法

次へ 前へ コメントを編集

6

根拠

前へ コメントを編集

一般発達 ツールの活用



## (7) 本システムの内容的妥当性の評価

### 1) 目的

本システムが園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクルの展開機能を内包するか検討することにより、内容的妥当性を確認した。

### 2) 対象と方法

本システムの開発のために開催した全10回の会議記録を分析の対象とした。会議記録は、2名の記録者が会議参加メンバーの発言を、その場で要約して速記し、会議後に照合し、互いの記録の抜けているところを補い1本の記録としたものである。この記録は、会議ごとに、参加メンバー全員に配布し、内容の記載に間違いがないことを確認している。

会議の開催日は平成22年9月から平成23年10月、参加者は保育士、保育園連盟役員、保育管理職などの保育専門職、乳幼児に関する研究を専門とする研究者、システム開発専門家であった。

会議のテーマは、第1回目「1. 園児総合支援システムについて」「2. 園児総合支援システム実現可能制の検討」、第2回目「1. 各スケールの使い方」「2. アラート表示の条件と出力レポート」「3. 子どものプロフィール画面」「4. 保育者へのコメントと付加機能」、第3回目「1. WEB園児総合支援システムの概要」「2. iPadの活用」「3. 保育環境評価票簡易版について」、第4回目「1. WEB園児支援システムに触れてみるの感想」「2. 園児情報管理の現状と今後の可能性」「3. WEB版発達評価票の特徴」「4. WEB版社会的スキル尺度の特徴」「5. WEB版気になる子どもチェックリストの特徴」、第5回目「1. ダッシュボード」「2. 個人基本画面」「3. 園、及び園児レポート」、第6回目「1. データの投入」「2. WEB園児支援システムシミュレーション版」、第7回目「1. WEB園児支援システムの論点整理」、第8回目「1. 各ツールの仕様変更点」、第9回目「1. ホームページを使用した活用支援」「2. アラートメッセージ」、第10回目「1. システムのコンテンツについて」「2. システムの使いやすさについて」「3. システムの活用について」「3. 過去データの投入について」であった。

第1回目の会議では、めざす園児総合支援システム（システムに導入する項目、レポート出力案を含む）と実現可能性について話し合われた。第2回目の会議では、各スケールの使い方を確認するとともに、「システム画面のレイアウト構成」「表示

させるグラフ」「園・全国平均、年度変化の表示」「アラート表示の条件と画面構成」「支援設計の表示」「付加機能の検討」などについて話し合われた。

第3回目の会議では、「より実用的なシステム構築」に向け、実践チーム（保育専門職）より多数の要望や意見が提案され討論した。園児総合システムの試作ツールを用いたデモンストレーションを行い、ツール全体像の把握を通じ使用して気付いた点やアイデアについて話し合われた。第4回目の会議では、実際にWEB園児総合支援システムを動かした上で、園児一覧画面、園児基本画面、各スケール入力画面と結果表示画面などの特徴と修正点について話し合われた。優れた道具と現場のコミットの視点から、「目標の共有」「プロセスも含めた仕様の文章化」などについて話し合われた。第5回目の会議では、現場のニーズをふまえた画面構成、ボタンの配置、結果の表示についての再検討が行われた。

第6回目の会議では、これまでに紙ベースでとったデータの活用と、システムがデータを集積したのちのエクスポートのテーブル設定や活用について話し合われた。

第7回目の会議では、開発してきたシステムに関する論点整理から、システムを活用したデータ集積と保育支援のために残された課題と、今後の課題について話し合われた。第8回目の会議では、解説とディスカッションにより決定した各ツールの仕様（または仕様変更点）について話し合われた。第9回目の会議では、システム活用支援のためのホームページの内容に関する検討や、システムのアラートメッセージの活用などについて話し合われた。第10回目の会議では、システムをどのように活用するか、システムに入力する情報を手に入れるためにどんな工夫をするか、集積した情報はどんなことに役立てられるかについて話し合われた。

### 3) 分析方法

#### 3)-1 重要カテゴリーの設定

「園児情報の基本的活用」「園児情報の発展的活用」の2つを重要カテゴリーに位置づけた。本研究は、本システム機能が園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクルの展開のための機能を内包するかどうかを確認することを目的としている。そこでまず、「アセスメントに必要な園児情報の収集と理解」に活用できる機能を「園児情報の基本的活用」とした。「園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバック」に活用できる機能を「園児情報の発展的活用」とした。

健康情報活用におけるヘルスリテラシーの視点に戻ると、ヘルスリテラシーとは、

「健康についての適切な意思決定を行うにあたって必要な健康情報やサービスを手に入れ、整理し、理解する能力 (Healthy People, 2010)」「健康リスクを減少させ、生活の質を向上させるための健康情報と考え方を探し、理解し、評価して利用できる、生涯を通して発達する幅広い範囲のスキルと能力 (Zarcadoolas, 2005)」「認識面でのスキルや社会生活上のスキルを意味し、これにより健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力 (WHO, 1998)」などと定義されている。「園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクル展開」は、健康維持や増進に必要な情報を理解し活用するという点で、ヘルスリテラシーの概念に共通性が見られる。Nutbeam (2000) は、ヘルスリテラシーを構成する概念として、「機能的ヘルスリテラシー (Functional health literacy)」「相互作用的ヘルスリテラシー (Interactive health literacy)」「批判的ヘルスリテラシー (Critical health literacy)」の3つを提唱した。(Nutbeam, 2000)。「機能的ヘルスリテラシー」とは、日常生活場面での健康に関連した情報について理解できる能力と定義される。「相互作用的ヘルスリテラシー」とは、日常的な活動に活発に参加し、様々な形式のコミュニケーションから情報を入手し、意味を引き出し、新しい情報を変化する環境へ適用するために利用される能力と定義される。「批判的ヘルスリテラシー」とは、情報を批判的に分析し、この情報を日常的な出来事や状況をよりコントロールするために使用することに適用される能力と定義される。「アセスメントに必要な園児情報の収集と理解」に活用できる「園児情報の基本的活用」は、Nutbeam (2000) が提唱した3つのヘルスリテラシーの「機能的ヘルスリテラシー」と「相互作用的ヘルスリテラシー」をあわせ持つ概念であると考えられる。また、「園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバック」に活用できる「園児情報の発展的活用」は、Nutbeam (2000) が提唱した「批判的ヘルスリテラシー」に共通する概念であると考えられる。よって、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクルの展開のための機能の重要カテゴリーとして、「園児情報の基本的活用」「園児情報の発展的活用」の2つを位置づけた。

### 3)-2 保育支援に活用できるシステム機能抽出

演繹的アプローチを用いて、2つの重要カテゴリーに当てはまる機能を、3名の分析者により会議記録から抽出した。3名の分析者には、乳幼児に関する看護、保育、相

談支援の経験をもち、質的研究を繰り返し行なっている者を選定した。

### 3)-3 カテゴリーの抽出

同分析者のディスカッションにより、要約的内容分析法（安梅，2001）を用いて、抽出された機能を類型化し、サブカテゴリーを抽出した。

### 3)-4 妥当性の確認

機能の抽出、類型化、サブカテゴリーの妥当性について、質的研究に精通した専門家のスーパーバイズを受け、システム機能の意味することと、類型化及びサブカテゴリーの抽出にずれがないことを確認した。

## 4) 結果

### 4)-1 「園児情報記録システム」の内容的妥当性

本システムの機能は、【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】の2つの重要カテゴリーに分かれた。さらにその中で11のサブカテゴリーが抽出された（表2-2）。以下、重要カテゴリーは【】、サブカテゴリーは『』、機能は「」の記号を用いて記述する。

#### ① 園児情報の基本的活用

【園児情報の基本的活用】には6つのサブカテゴリーが抽出された。

「根拠に基づくツールにより情報収集」「情報の正確かつ適切な収集」より『情報の選定』が抽出された。

「保育専門職の個人的な思い込みをなくす」「個人、クラス全体、園全体の特徴と全国平均の比較」より『情報の客観的理解』が抽出された。

「子どもの発達を運動発達、社会性発達、言語発達から捉える」「保育環境を子どもや保護者の多様なニーズから捉える」などより『情報の体系的理解』が抽出された。

「子どもと子どもを取り巻く環境を5つの支援ツールにより捉える」より『情報の複合的理解』が抽出された。

「保育専門職、他職種、保護者間の情報共有」「子どもの特徴をわかりやすく示す」「保育専門職同士が課題を共有する媒体となる」より『情報共有』が抽出された。

「子どもの特徴や保育状況などの質的データを集積」「必要な情報プラス $\alpha$ がわかる」より『情報の補完』が抽出された。

## ② 園児情報の発展的活用

【園児情報の発展的活用】には5つのサブカテゴリーが抽出された。

「瞬時に視覚的にフィードバックされることにより目標を明確にすることができる」「配慮を要する子どもの早期把握・早期支援」より『目標の明確化』が抽出された。

「根拠に基づく保育方針決定」「質の高い保育方法が分析可能」「一人ひとりの園児の根拠に基づく保育方針決定」より『根拠に基づく支援』が抽出された。

「専門職自身のケアの評価」「保育支援のフィードバック」より『活動の評価』が抽出された。

「継続的かつ着実な情報管理」「生涯にわたる個人の健康管理」より『継続的な情報活用』が抽出された。

「乳幼児期と学童期の関連を評価し、影響要因の分類、選定、考察が可能となる」より『関連・因果関係の検証』が抽出された。



表 2-2 保育支援に活用できる本システムの機能

重要 カテゴリー	サブカテゴリー	保育支援に活用できる本システムの機能
園児情報の 基本的活用	情報の選定	根拠に基づくツールにより情報収集 情報の正確かつ適切な収集
	情報の客観的理解	保育専門職の個人的な思い込みをなくす 個人、クラス全体、園全体の特徴と全国平均との比較
	情報の体系的理解	子どもの発達を「運動発達」「社会性発達」「言語発達」の3領域から捉える 子どもの社会的スキルを、「協調」「自己制御」「自己表現」の3因子から捉える 子どもの気になる行動を、33の領域から総合的に捉える 養育環境を「人的かかわり」「社会的かかわり」「社会的サポート」「制限や罰の回避」の4領域13項目で捉える 保育環境を、子どもと保護者の多様なニーズから捉える
	情報の複合的理解	子どもと子どもを取り巻く環境を、5つの支援ツールにより捉える
	情報共有	保育専門職、他職種、保護者間の情報共有 子どもの特徴をわかりやすく示す 保育専門職同士が課題を共有する媒体となる
	情報の補完	子どもの特徴や保育状況などの質的データを集積 必要な情報プラスαがわかる
	園児情報の 発展的活用	目標の明確化
根拠に基づく支援		根拠に基づく保育方針決定 質の高い保育方法が分析可能 一人ひとりの園児の根拠に基づく保育方針決定
活動の評価		専門職自身のケアの評価 保育支援のフィードバック
継続的な情報活用		継続的かつ着実な情報管理 生涯にわたる個人の健康管理
関連・因果関係の検証		乳幼児期と学童期の関連を評価し、影響因子の分類、選定、考察が可能となる

## 5) 考察

### 5)-1 本システムがPDCAサイクル展開に寄与する可能性

本システムの機能は、【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】の2つの重要カテゴリーに分かれた。

アセスメントに必要な園児情報の収集と理解として位置づけた重要カテゴリー【園児情報の基本的活用】には、「情報の選定」「客観的理解」「体系的理解」「複合的理解」「情報の共有」「情報の補完」のサブカテゴリーが抽出された。

アセスメントとは、必要な情報の収集と処理を通して、援助計画と実践の展開に必要な情報の「系統的提供」を目的にした援助活動の認識過程（大田，1995）、実践を決定するために「統合された情報」を確認するプロセス（Hodge DR，2001）、「構造的に理解」すること（Carol HM，1995）、クライアントの強さや問題を明らかにするために情報を収集し続けることで、「客観的情報」と「主観的情報」の両方を必要とする（Jordan C，2008）などとされている。本システムの活用により、アセスメントに必要な園児情報を、適切に選び、客観的、体系的、複合的にとらえ、他の保育専門職、他職種、保護者と共有しながら園児情報を整理し、さらに必要な情報や、質的な情報補完の可能性が示唆された。本システムは、効果的なアセスメントに寄与する機能を内包すると考えられる。

園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックとして位置づけた【園児情報の発展的活用】には、「保育目標の明確化」「根拠に基づく支援」「活動の評価」「継続的な情報活用」「関連・因果関係の検証」が抽出された。

抽出されたサブカテゴリーには、目標の明確化、支援、評価、継続的な情報活用、関連・因果関係の検証という、PDCAサイクル（plan-do-check-act サイクル）が確認された。PDCAサイクルは、業務を継続的に改善するマネジメント手法の一つとして知られており、保育者が子どもの発達記録をPDCAサイクルとして保育計画に生かすための発達記録システム機能や施策の必要性が述べられている（仁木・他，2008）。本システムの活用により、子どもの健康維持や増進に必要な園児情報をPDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す質の高い保育実践が期待される。

### 5)-2 システム開発への提言

本システムの開発において、まず、本システムの活用により、保育専門職が、子

どもの状況を定期的にチェックし、専門職、保護者間の「情報の共有化」、個人的な思い込みをなくす「視点の統一」、情報を正確に適切に利用できる「客観的な内容の統一」、専門職自身の「保育の質向上の啓発」という開発方針を明確にした。その上で、電子化する項目を根拠に基づき設定し、実際に園児情報を取り扱う保育士、保育園連盟役員、保育所管理職、研究者、及び、保育者専用のパソコンコールセンターを運営してきたIT専門家をメンバーとして、10回のシステム開発会議を行い、保育専門職のニーズにもっとも近い、活用しやすい画面構成や動作、実際の活用に向けた検討を重ねた

その結果、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクルの展開のための機能を内包する点より、内容的妥当性が確認された。

実用可能なシステム開発においては、開発の方針と項目を明確にすることに加え、実践でシステムを活用する立場の当事者が、活用しやすい画面構成やパフォーマンスを持つシステムが望まれる。

## (8) 「園児情報活用スキル尺度」の開発と信頼性・妥当性の検証

### 1) 研究の目的

本章では、園児情報記録システム（以下、本システム）の機能に準拠し、子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用」を量的に測定可能な尺度を作成し、信頼性・妥当性を確認した。

### 2) 尺度を構成する質問項目の作成

研究に先立ち、「園児情報活用尺度」を構成すると考えられる質問項目の作成を試みた。

#### 2)- 1 質問項目の作成方法

##### ①対象者とリクルートの方法

対象として、本システムを使用し内容を十分に理解している、かつ、園児情報を日常的に扱っている「保育士グループ」「保健師グループ」、園児情報をより活用しやすい形で提供する WEB アプリケーション開発を行っている「開発者グループ」の3種類を設定した。

「保育士グループ」のリクルートは、保育業界に精通している「保育パワーアップ研究会の代表者」に依頼した。「保健師グループ」のリクルートは、保健師業界に精通している「保健師」に依頼した。「開発者グループ」のリクルートは、園児情報を扱っている「IT 企業の代表者」に依頼した。

各グループともリクルートする人数は、グループダイナミクスがもっとも起こりやすい7名前後を設定した（安梅，2001；安梅，2003）。

対象者には、調査の目的、方法、結果の取り扱い、研究の意義について書面と口頭で十分な説明を行った。また、名前や所属などの情報が外部に出ないこと、調査に協力したことではいかなる不利益も受けないこと、調査への協力は本人の自由意思によるものであり、協力に同意しなくても不利益を受けないこと、同意後も不利益を受けず随時撤回できることを、書面と口頭にて説明した上で、同意書へのサインにより同意を得た。

##### ② 調査時期と調査実施時間

調査日は、平成 23 年 12 月 15 日～平成 24 年 1 月 15 日とした。調査時間は、各グループとも 1 時間 30 分とした。

##### ③ データの収集及び調査項目

データの収集には、フォーカス・グループ・インタビュー法を用いた。調査場所は静か

な個室とし、参加者の承諾を得た上で IC レコーダとビデオカメラを設置し記録を行った。インタビュー中は番号札を参加者の名前の変わりにする事で、名前が表に出ないことを保証し、安心して話ができるよう配慮した。

調査項目は、「本システムの内容（コンテンツ）について」「本システムの使いやすさについて」「本システムの活用について」の3点とした。

インタビュアーは研究実施者が務めた。参加者の自由な発言やグループダイナミクスを効果的に促進できるようインタビューガイド（資料 7）を作成し、事前トレーニングを積んでからインタビューに臨んだ。

#### ④分析

質的研究の分析は、データから浮かび上がってくるコードから概念を生成する帰納的アプローチと、既存の理論的枠組みから導かれるコードを使用する演繹的アプローチに大別できる（佐藤、2008）と言われている。本研究では、演繹的アプローチを用いた。

##### ④-1 分析枠組みの設定

研究1の結果から、本研究では、【園児情報の基本的活用】と【園児情報の発展的活用】の2つを重要カテゴリーに位置づけた。また、【園児情報の基本的活用】のサブカテゴリーとして、「情報の選定」「客観的理解」「体系的理解」「複合的理解」「情報の共有」「情報の補完」の6つを位置づけた。【園児情報の発展的活用】のサブカテゴリーとして「保育目標の明確化」「根拠に基づく保育」「保育評価」「継続的な情報活用」「関連・因果関係の検証」の5つを位置づけた。【園児情報の基本的活用】とは、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキルである。【園児情報の発展的活用】とは、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに適用されるスキルである。

子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用」は、健康維持や増進に必要な情報を理解し活用するという点で、ヘルスリテラシーの概念に共通性が見られる。【園児情報の基本的活用】は、Nutbeam (2000) が提唱した「機能的ヘルスリテラシー」と「相互作用のヘルスリテラシー」をあわせ持ち、【園児情報の発展的活用】は、批判的ヘルスリテラシーに共通する概念であると考えられる。園児情報活用の構成概念として、【園児情報の基本的活用】と【園児情報の発展的活用】の2つを位置づけることは、先行研究、および、研究1の結果から妥当であると考えられる。

#### ④-2 分析1：重要フレーズの抽出と分類

まず、I C レコーダに録音された記録から正確な逐語記録を作成した。次に、ビデオカメラの録画記録による参加者の反応を加味しながら、重要カテゴリーとして位置づけた【園児情報の基本的活用】と【園児情報の発展的活用】に当てはまる、重要な成句（重要フレーズ）を、3名の分析者により逐語記録から抽出した。抽出した重要フレーズについて、要約的内容分析を用いて、同3名の分析者により、【園児情報の基本的活用】の6つのサブカテゴリー、【園児情報の発展的活用】の5つのサブカテゴリー、合計11のサブカテゴリーに分類した。

分析の妥当性を確保するために、重要フレーズの抽出、及び、分類については、3名の分析者による検討の他、グループインタビュー法に精通した専門家のスーパーバイズを受け、重要フレーズの意味することとカテゴリーへの分類にずれがないことを確認した。

3名の分析者には、乳幼児に関する看護、保育、相談支援の経験をもち、質的研究を繰り返し行なっている者を選定した。

#### ④-3 分析2：質問項目の作成

分析1の結果から、4名の分析者により、【園児情報の基本的活用】と【園児情報の発展的活用】の2つの要因を表すと考えられる質問項目を作成した。質問項目を作成する際には、フォーカス・グループ・インタビュー調査で得たデータに含まれる文章や言葉を用いるよう配慮し、重複や同様の意味をもつ質問項目がないか、保育専門職にわかりやすい言葉になっているかどうか、十分な検討を行った。

分析の妥当性を確保するために、4名の分析者による検討に加え、疫学の専門家、母子保健の専門家、及び、保育専門職のスーパーバイズを受け、精度の高い質問項目の作成を目指した。4名の分析者は、分析1を行なった3名に、保育学領域での研究を長く行なっているものを加えた。

#### ⑤ 倫理的配慮

対象者には事前に、インタビューの目的、方法、名前や所属などの情報が外部に出ないこと、インタビューに参加したことではいかなる不利益も受けないことを書面と口頭で説明し、同意書へのサインによりインタビュー参加への同意を得た。また、I C レコーダ及びビデオカメラによる記録は、記録をとる理由を説明し、参加者の承諾を得た上で実施した。インタビュー中は番号札を参加者の名前の代わりにすることで名前が表に出ないことを保

証した。録音、録画、及び観察記録は鍵つきのケースに保管し、研究終了後（平成 25 年 3 月 31 日）には確実に消去する。

本研究は、筑波大学医の倫理委員会の承認を得てから実施した（通知番号 23-283）。

## 2)-2 質問項目の作成結果

### ① 対象属性

3 種類 4 グループからデータを得た（表 2-3）。1G は保育士グループで、男性 3 名、女性 2 名、年齢は 41-49 歳であった。2G は保健師グループで、女性 7 名、年齢は 30-60 歳であった。3G は保健師グループで、女性 7 名、年齢は 25-50 歳であった。4G は開発者グループで、男性 4 名、女性 3 名、年齢は 28-53 歳であった。全体では、男性 7 名、女性 19 名、合計 26 名、年齢は 25-60 歳であった。

表 2-3 対象属性

グループ	性別と人数			年齢	
	男性	女性	合計	最小値-最大値	平均値 (SD)
1G 保育士G	3	2	5	41-49	44.4(±3.4)
2G 保健師G	0	7	7	30-60	47.6(±9.8)
3G 保健師G	0	7	7	25-50	37.0(±7.4)
4G 開発者G	4	3	7	28-53	37.1(±9.8)
合計	7	19	26	25-60	41.3(±9.4)

### ③ 重要フレーズと分類

重要カテゴリーとして位置づけた【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】に当てはまる重要な成句（重要フレーズ）は、【園児情報の基本的活用】6 つ、【園児情報の発展的活用】5 つ、合計 11 のサブカテゴリーに分類された。以下、重要カテゴリーは【】、サブカテゴリーは『』、重要フレーズは「」の記号を用いて記述する。

#### ③-1 園児情報の基本的活用

【園児情報の基本的活用】の 6 つのサブカテゴリー『情報の選定』『客観的理解』『体系的な理解』『複合的理解』『情報の共有』『情報の補完』に、合計 80 の重要フレーズが抽出された（表 2-4）。

『情報の選定』として、「たくさんある情報をどこにどう整理しておけばいいのかわからない」「情報を持っている人と持っていない人では全然違う」「必要な基本情報をチェックできる」「情報を無駄なくみられる（健康、発育、発達、生活、対人）ように整理」が抽出された。

『情報の客観的理解』として、「アラートありきになったらいかんけど、アラートから気づくこともある」「成長を客観的に理解する」「思い込みや思い入れでなく、客観的にみる」「思い込みや思い入れでなく、冷静に判断できる」「経験年数の差や思いの温度差に左右されず客観的にみられる」「偏見でものをみるんじゃない」「第三者の立場で客観的な判断材料とする」「主観ではなく、データからその子の状況を理解しようとする」「自分の子はこうだけど他の子と比較してどうなのか」の重要フレーズが抽出された。

『情報の体系的理解』として、「気になる子、気になる親、次の支援のヒントと考える」「子どもや保護者の多様なニーズから理解」「どのような情報から収集していけばいいかわかる」「ある一つの情報から、他に必要な情報が浮かぶ」「ある一つの情報を、別の情報に結びつける」「他の分野の情報と連動して理解」が抽出された。

『情報の複合的理解』として、「総合的に子どもの発達と育児環境と社会性の部分はリンクされる」「こういうバランスなんやな」「発達のことだけでなく、生活習慣、環境、医療、予防接種など幅ひろく情報を理解する必要がある」「情報はたくさんあった方が判断しやすい」「一つの質問の答えがイエスかノーかということじゃなくて、ビミョーなところも含めてみることができる」が抽出された。

『情報の共有』として、「保育専門職、他職種、保護者間のすばやい情報共有」「先生はこうみていた、親はこうみていた、あなたはこう発達してきたという記録と共有」「こんなことができるようになるためにサポートしたいという気持ちを共有」「こういう育ちをしてきたということを全員にかえせる」「発達評価票を一緒につける」「先生の思いを伝えて共通理解」「保育士同士が課題を共有すること」「子どもの特徴をわかりやすく示されて共有できる」「これを入力したらこういう状況になりますよと視覚的にみてもらえる」「困難ケースもあるので、医療とか福祉の情報がつながる連携」「経験や感覚を仲間や後輩と共有する」「結果のみでなく、これからどうしていけばいいのか共有する」「結果のみでなく、子どものどんなところをみたのか保護者と共有する」「問題を指摘するより、気づきを促す状況を作る必要があるよね」「気づきにつながるようなかかわりが求められるよね」「言葉以外の方法をつかって情報を伝達」「相手がどこまで理解できているかを知って、説明する。次につながるように気をつけて話さなければ・・・」「あのときもうちょっと分かりやすく言っておけばよかったな」「他の分野の情報と連携できる」「一つのもので他職種が情報を



共有することができる」「お母さんと子どもの成長を共有」「子どもの成長に興味をもってもらうような」「カンファレンスや話し合いも進めやすくなる」「こんなことをしたらこんなに伸びたよと共有」「かかわりの事例を共有」「子どもの状況を知ることによってもっと子どもに興味をもつ」「何が気になるのかが形としてみなで共有できる」「入力したデータを育児教室などにプリントして持って行ってもらう。ネット上でみてもらうこともできる」「同じような子どもを抱えている園同士の連携がとれたら」「どのようなケアをしているか共有できたり」「先輩と後輩がどのように子どもをみているか共有することで関係性をつくる」「同じ悩みを共有できたり」「必要性を知ってもらう」「情報が他のものとどんどんリンクすることに気づく」「結果に対する説明がいない」「結果に対する説明がいない素早いグラフ化」が抽出された。

『情報補完』として、「やりとりが始まってスルーしてしまうと何もわからない」「気になった部分が記録として残る」「なんとなく気になった行動を形にしてのこす」「お母ちゃんたちは批判されたくない、そういうところから得るものがある」「保護者の子育てを認めながら実際にこうだから一緒に考えていこうと」「グループ何人かでつける中でその人が学んでいく」「親とのコミュニケーションの中から情報を得る」「保護者が出している赤信号のサインを見逃さない」「基本的には。感覚で得た情報を言語化して残していく」「のぼしてあげられる部分を見つける」「相手を受け入れ、話を聞ける状況をつくる」「相手に共感しないと相手のことはわからない」「安心して話せる雰囲気」「この人になら話しても良いという信頼関係」「子どもをみて将来を想像できる」「保護者の対応、返し方、考え方、家庭環境からその子の将来を想像できる」「重要な情報を持っている人、聞き出せる人がわかる」「何が気になるのかははっきりしないけど気になる部分」「どう見たら良いのかわからないけど気になる部分」が抽出された。

表 2-4 園児情報の基本的活用

サブ カテゴリー	グループ				重要フレーズ
	1G	2G	3G	4G	
情報の選定	●	●	●		<p>たくさんある情報をどこにどう整理しておけばいいのかわからない</p> <p>情報を持っている人と持っていない人では全然違う</p> <p>必要な基本情報をチェックできる</p> <p>情報を無駄なくみられる（健康，発育，発達，生活，対人）ように整理</p>
情報の客観的理解	●	●	●	●	<p>アラートありきになったらいかんけど，アラートから気づくこともある</p> <p>成長を客観的に理解する</p> <p>思い込みや思い入れでなく，客観的にみる</p> <p>思い込みや思い入れでなく，冷静に判断できる</p> <p>経験年数の差や思いの温度差に左右されず客観的にみれる</p> <p>偏見でものをみるんじゃない</p> <p>● 第三者の立場で客観的な判断材料とする</p> <p>● 主観ではなく，データからその子の状況を理解しようとする</p> <p>● 自分の子はこうだけど他の子と比較してどうなのか</p>
情報の体系的理解	●	●	●	●	<p>● 気になる子，気になる親，次の支援のヒントと考える</p> <p>● 子どもや保護者の多様なニーズから理解</p> <p>● どのような情報から収集していけばいいかわかる</p> <p>● ある一つの情報から，他に必要な情報が浮かぶ</p> <p>● ある一つの情報を，別の情報に結びつける</p> <p>● 他の分野の情報と連動して理解</p>
情報の複合的理解	●	●	●	●	<p>● 総合的に子どもの発達と育児環境と社会性の部分はリンクされる</p> <p>● こういうバランスなんやな</p> <p>● 発達のことでなく，生活習慣，環境，医療，予防接種など幅ひろく情報を理解する必要がある</p> <p>● 情報はたくさんあった方が判断しやすい</p> <p>● 一つの質問の答えがイエスかノーかということじゃなくて，ピミョーなところも含めてみるができる</p>
情報の共有	●	●	●	●	<p>● 保育専門職，他職種，保護者間のすばやい情報共有</p> <p>● 先生はこうみていた，親はこうみていた，あなたはこう発達してきたという記録と共有</p> <p>● こんなことができるようになるためにサポートしたいという気持ちを共有</p> <p>● こういう育ちをしてきたということを全員にかえせる</p> <p>● 発達評価票を一緒につける</p> <p>● 先生の思いを伝えて共通理解</p> <p>● 保育士同士が課題を共有すること</p> <p>● 子どもの特徴をわかりやすく示されて共有できる</p> <p>● これを入力したらこういう状況になりますよと視覚的にみてもらえる</p> <p>● 困難ケースもあるので，医療とか福祉の情報につながる連携</p> <p>● 経験や感覚を仲間や後輩と共有する</p> <p>● 結果のみでなく，これからどうしていけばいいのかが共有する</p> <p>● 結果のみでなく，子どものどんなところをみたのか保護者と共有する</p> <p>● 問題を指摘するより，気づきを促す状況を作る必要があるよね</p> <p>● 気づきにつながるようなかわりが求められるよね</p>



### ③-2 園児情報の発展的活用

【園児情報の発展的活用】の5つのサブカテゴリー「保育目標の明確化」「根拠に基づく保育」「保育評価」「継続的な情報活用」「関連・因果関係の検証」に、合計36の重要フレーズが抽出された（表2-5）。

『目標の明確化』として、「最終目標がどこなのかを見極めることができる」「一人ひとりの子どもに対して目標をたてて」「早い段階でわかったら早くケアにつなげていけるんだらうとか」「早く適切なケアがなされて社会になじんでいく」「早めに園が気づいて取り上げてくれると子どもの将来が違う」が抽出された。

『根拠に基づく支援』として、「実践にもって行って結果につなぐ」「根拠に基づく保育方針の決定」「一人ひとりの園児にあったかかわり」「その子が最終的に自立するために情報をどう使うか」「その子の個性をいかせる、持っているものをのばすようなかかわり」「子どもや保護者の不利益にならないような情報の扱い」「多くの情報から必要な事業を立案できる」「その子の特性を理解して支援」「こういうことがあったからこういう保育をした」「子どもの性格上の問題なのか、訓練すればなおるのか親は判断できない」が抽出された。

『活動の評価』として、「効果があったという部分が見える」「ちょっとした変化がわかる」「これをしたらこのように評価がかわったよとわかる」「子どももかわっていくのでそこが反映される」が抽出された。

『継続的な情報活用』として、「一時点で評価するのではなく、その後どうのびていったか評価していく」「子どもの育ちを追いかける形で小学校、中学校につながる」「最低小学校までリンクできて共有できる」「障害を持った人は大人までいる。継続したデータの蓄積がほしい」「生涯にわたる情報を途切れることなく集積」「記録を残して引き継ぐ」「口頭で引き継がれている情報を記録として残す」「小学校にあがるときに情報を伝えていく」「何度も使ってもらうしくみ」「ずっと使っていくものなので使いやすくなければならない」が抽出された。

『関連・因果関係の検証』として、「根拠を蓄積することによって、“このような情報をとっておく” というような法の整備にまでつながれば」「どのような支援をすればその子が社会で幸せに生きていけるか感覚じゃなくて根拠として残していけるように」「将来的な問題に対して情報が蓄積される」「将来的な自立に対して情報が蓄積される」「将来の幸せや問題に対して情報が蓄積される」「何が関係しているのか具体的になる」「そういう発達をたどってきたのか残せる」が抽出された。

表 2-5 園児情報の発展的活用

サブ カテゴリー	グループ				重要フレーズ
	1G	2G	3G	4G	
目標の 明確化		●	●	● ● ●	最終目標がどこなのかを見極めることができる 一人ひとりの子どもに対して目標をたてて 早い段階でわかったら早くケアにつなげていけるんだろうとか 早く適切なケアがなされて社会になじんでいく 早めに園が気づいて取り上げてくれると子どもの将来が違う
根拠に 基づく支援	● ● ●	● ● ● ●	● ●	●	実践にもって行って結果につなぐ 根拠に基づく保育方針の決定 一人ひとりの園児にあったかかわり その子が最終的に自立するために情報をどう使うか その子の個性をいかせる、持っているものをのばすようなかかわり 子どもや保護者の不利益にならないような情報の扱い 多くの情報から必要な事業を立案できる その子の特性を理解して支援 こういうことがあったからこういう保育をした 子どもの性格上の問題なのか、訓練すればなおるのか親は判断できない
活動の評価	● ● ●		●		効果があったという部分が見える ちょっとした変化がわかる これをしたらこのように評価がかわったよとわかる 子どももかわっていくのでそこが反映される
継続的な 情報活用	● ● ●	● ● ●	● ●	● ●	子どもの育ちを追いかける形で小学校、中学校につながる 最低小学校までリンクできて共有できる 障害を持った人は大人までいる。継続したデータの蓄積がほしい 生涯にわたる情報を途切れることなく集積 記録を残して引き継ぐ 口頭で引き継がれている情報を記録として残す 一時点で評価するのではなく、その後どうのびていったか評価していく 小学校にあがるときに情報を伝えていく 何度も使ってもらうしくみ ずっと使っていくものなので使いやすくなければならない
関連・因果関係 の検証		● ● ● ● ● ●	●		根拠を蓄積することによって、「このような情報をとっておく」というような法の整備にまでつながれば どのような支援をすればその子が社会で幸せに生きていけるか感覚じゃなくて根拠として残していけるように 将来的な問題に対して情報が蓄積される 将来的な自立に対して情報が蓄積される 将来の幸せや問題に対して情報が蓄積される 何の関係しているのか具体的になる そういう発端をたどってきたのかのこせる

※ ●重要フレーズにつながる発言が見られたグループ

## 2)-3 尺度を構成する質問項目

重要カテゴリーとして位置づけた【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】に当てはまる重要な成句（重要フレーズ）から、【園児情報の基本的活用】18項目、【園児情報の発展的活用】12項目、合計30項目の質問項目が作成された。

### ① 園児情報の基本的活用を構成する質問項目

【園児情報の基本的活用】を構成する質問項目として、18の項目が作成された（表2-6）。

『情報の選定』として抽出された重要フレーズは、子どもや保護者に関する情報を、健康、発育、発達、生活、対人関係などの側面から、整理して把握することを意味するものであると考えられた。そこで、まずは、子どもや保護者について把握すべき内容を整理し、「一般的な子どもの発育・発達について理解している。」「一般的な子どもの健康について理解している。」「子どもの基本情報（名前、生年月日、年齢、性別）を把握している。」「子どもの発育・発達の状態（身長、体重、乳幼児健診などの状況）を把握している。」「子どもの健康状況（既往歴、病気、けが、平熱など）を把握している。」「子どもの生活習慣の状態（食事、睡眠、排泄、清潔、衣服の着脱、遊びなど）を把握している。」「子どもの対人関係（友だちや家族等との関係）を把握している。」「保護者の基本情報（大まかな年齢、家族構成、同居の有無、住所、緊急連絡先など）を把握している。」「保護者の健康状態（病気や介護の有無など）を把握している。」「保護者の就労状況（勤務先や勤務時間、勤務形態など）を把握している。」「保護者の育児状況（子どもへのかかわり、協力者、相談者など）を把握している。」「子どもや家族の情報を整理して記録している。」の12の質問項目を作成した。次に、本研究における【園児情報の基本的活用】とは、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキルであり、「園児情報」は、子どもや養育者とのかかわりの中で得る情報であることを鑑み、「一般的な発育、発達、健康」を理解しているだけの項目である「一般的な子どもの発育・発達について理解している。」「一般的な子どもの健康について理解している。」を削除した。また、「整理して記録する」だけの項目である「子どもや保護者の情報を整理して記録している。」を削除した。合計9項目を採用した。

『情報の客観的理解』として抽出された重要フレーズは、子どもや家族をいかに客観的に理解できるかを意味するものであると考えられた。よって、「子どもや家族を、噂や中傷に惑わされず理解している。」「子どもや家族を、思い込みや思い入れでなく理解している。」の2項目を作成した。

『情報の体系的理解』として抽出された重要フレーズは、ある情報を他の情報に結びつけて考えることを意味するものであると考えられた。よって「ある一つの情報を他の情報に結びつけて考えることができる。」という項目を作成した。

『情報の複合的理解』に関する項目は、子どもや家族を取り巻く様々な情報から、子どもや家族を理解することを意味するものであると考えられた。よって「様々な情報から総合的に子どもや家族を理解できる。」という項目を作成した。

『情報の体系的理解』と『情報の複合的理解』について、重要フレーズのレベルではそれぞれにわけて分類したが、質問項目として保育専門職の目線で考えた場合、体系的理解と複合的理解を差別化して解釈することが困難であることが予測された。また、再度、アセスメントの定義に戻って検討した結果、「考えることができる」だけではスキルとして不十分であることが考えられた。よって、『情報の体系的理解』『情報の複合的理解』は、『情報の複合的理解』としてまとめ、「ある一つの情報を他の情報に結びつけて考えることができる。」という項目を削除し、「様々な情報から総合的に子どもや保護者を理解できる。」の1項目を採用した。

『情報の共有』として抽出された重要フレーズは、数多くあったが、整理すると、保育専門職が、子どもや家族に関する情報を、職場内、他の専門機関、保護者と共有できることを意味するものであると考えられた。そこで、まずは、「自分の思いを受け止めてくれる身近な仲間がいる。」「自分の思いを受け止めてくれる仲間が職場内にいる。」「仲間の思いを受け止めている。」「子どもや家族の情報を仲間内で共有している。」「子どもや家族の情報を職場内で共有している。」「子どもや家族について他の専門機関と共有している。」「保護者の子どもへの思いを受け止めている。」「保護者の疑問や要望には誠実に対応するなど、信頼関係の構築を日々行っている。」「子どもの発育、発達に関する特徴を保護者にわかり安く伝えている。」「保護者と、子どもに関する情報の交換を細やかに行っている。」「保護者のおかれている状況に理解を示している。」「保護者が、この人になら話しても良いと思えるような信頼関係を築いている。」「保護者や他の専門機関に、ことば以外の方法を使って情報を伝達している。」の13項目を作成した。次に、【園児情報の基本的活用】の定義を鑑み、「思いを受け止める」「状況を理解する」など保育専門職側のみの行動や態度、信頼関係の構築など具体的な情報の共有につながる以前の行動や態度として考えられる自分の思いを受け止めてくれる身近な仲間がいる。」「自分の思いを受け止めてくれる仲間が職場内にいる。」「仲間の思いを受け止めている。」「子どもや家族の情報を仲間内で共有している。」「保護者の子どもへの思いを受け止めている。」「保護者の疑問や要望には誠実に対応するなど、信頼関係の構築を日々行っている。」「保護者のおかれている状況に理解を示

している。」「保護者が、この人になら話しても良いと思えるような信頼関係を築いている。」の8項目を削除した。また、「わかりやすく伝える」「ことば以外の方法を使って」は、いずれも伝達のための工夫であり、「ことば以外の方法を使う」は「わかりやすく伝える」ための一手段であると考えられることから、「保護者や他の専門機関に、ことば以外の方法を使って情報を伝達している。」を削除した。最終的に「子どもや家族の情報を職場内で共有している。」「子どもや保護者の情報家族について他の専門機関と共有している。」「保護者と子どもに関する情報の交換を細やかに行っている。」「子どもの発育、発達に関する特徴を保護者にわかりやすく伝えている。」の4項目を採用した。

『情報の補完』として抽出された重要フレーズは、保護者とのやりとりの中から、支援に必要な情報を補うことを意味するものであると考えられた。「保護者が出している赤信号を見逃さない。」「保護者の今までの子育てを認めながら、今後のことを話し合っている。」「子どもや保護者のなんとなく気になった部分を誰かに話している。」「子どもや保護者のなんとなく気になった部分を記録に残している。」「子どもや保護者の何となく気になった部分の記録を職場内で確認し合っている。」「保護者との対話の中から子どもや育児に関する情報を得ている。」「保護者を受け入れ、安心して話せる状況をつくっている。」の7項目を作成し、「保護者が出している赤信号」「子どもや保護者のなんとなく気になった部分」は同様の意味をもつと解釈し、「子どもや保護者のなんとなく気になった部分を誰かに話している。」「子どもや保護者のなんとなく気になった部分を記録に残している。」「子どもや保護者の何となく気になった部分の記録を職場内で確認し合っている。」は削除した。また、「保護者の今までの子育てを認め」「保護者との対話の中から」「保護者を受け入れ、安心して話せる状況をつくる」は同様の意味をもつと解釈し、「保護者との対話の中から子どもや育児に関する情報を得ている。」「保護者を受け入れ、安心して話せる状況をつくっている。」の2項目は削除した。最終的に、「保護者が出している赤信号を見逃さない。」「保護者の今までの子育てを認めながら、今後のことを一緒に考えている。」の2項目を採用した。

【園児情報の基本的活用】を構成する質問項目として、『情報の選定』『情報の客観的理解』『情報の複合的理解』『情報の共有』『情報の補完』の5つのサブカテゴリーの中に、18の質問項目が作成された。



表 2-6 園児情報の基本的活用を構成する質問項目

サブ カテゴリー	質問項目
情報の選定	<p>一般的な子どもの発育・発達について理解している。</p> <p>一般的な子どもの健康について理解している。</p> <p>子どもの基本情報（名前，生年月日，年齢，性別）を把握している。</p> <p>子どもの発育・発達の状態（身長，体重，乳幼児健診などの状況）を把握している。</p> <p>子どもの健康状況（既往歴，病気，けが，平熱など）を把握している。</p> <p>子どもの生活習慣の状態（食事，睡眠，排泄，清潔，衣服の着脱，遊びなど）を把握している。</p> <p>子どもの対人関係（友だちや家族などの関係）を把握している。</p> <p>保護者の基本情報（大まかな年齢，家族構成，同居の有無，住所，緊急連絡先など）を把握している。</p> <p>保護者の健康状態（病気や介護の有無など）を把握している。</p> <p>保護者の就労状況（勤務先や勤務時間，勤務形態など）を把握している。</p> <p>保護者の育児状況（子どもへのかかわり，協力者，相談者など）を把握している。</p> <p>子どもや家族の情報を整理して記録している。</p>
情報の 客観的理解	<p>子どもや家族を，噂や中傷に感わされず理解している。</p> <p>子どもや家族を，思い込みや思い入れでなく理解している。</p>
情報の 体系的理解	<p>ある一つの情報を他の情報に結びつけて考えることができる。</p>
情報の 複合的理解	<p>様々な情報から総合的に子どもや家族を理解できる。</p>
情報の共有	<p>自分の思いを受け止めてくれる身近な仲間がいる。</p> <p>自分の思いを受け止めてくれる仲間が職場内にいる。</p> <p>仲間の思いを受け止めている。</p> <p>子どもや家族の情報を仲間内で共有している。</p> <p>子どもや家族の情報を職場内で共有している。</p> <p>子どもや家族について他の専門機関と共有している。</p> <p>保護者の子どもへの思いを受け止めている。</p> <p>保護者の疑問や要望には誠実に対応するなど，信頼関係の構築を日々行っている。</p> <p>子どもの発育，発達に関する特徴を保護者にわかり安く伝えている。</p>

	<p>保護者と、子どもに関する情報の交換を細やかに行っている。</p> <p>保護者のおかれている状況に理解を示している。</p> <p>保護者が、この人になら話しても良いと思えるような信頼関係を築いている。</p> <p>保護者や他の専門機関に、ことば以外の方法を使って情報を伝達している。</p>
情報の補充	<p>保護者が出している赤信号を見逃さない。</p> <p>保護者の今までの子育てを認めながら、今後のことを話し合っている。</p> <p>子どもや保護者のなんとなく気になった部分を誰かに話している。</p> <p>子どもや保護者のなんとなく気になった部分を記録に残している。</p> <p>子どもや保護者の何となく気になった部分の記録を職場内で確認し合っている。</p> <p>保護者との対話の中から子どもや育児に関する情報を得ている。</p> <p>保護者を受け入れ、安心して話せる状況をつくっている。</p>

※網かけはディスカッションにより削除した項目

## ② 園児情報の発展的活用を構成する質問項目

【園児情報の発展的活用】を構成する質問項目として、12の項目が作成された(表 2-7)。

『目標の明確化』として抽出された重要フレーズは、子どもや保護者への支援の目標を明らかにすることを意味するものであると考えられた。「子どもや保護者への支援の目標を明確にしている。」という項目を作成した。

『根拠に基づく支援』として抽出された重要フレーズは、子どもや保護者の情報をもとに、的確な支援を判断することを意味するものであると考えられた。「子どもや保護者の情報から適切な支援方針を決定している。」「子どもや保護者の情報から一人ひとりの個性を生かす支援計画を立案している。」の2項目を作成した。本研究における「質の高い保育」とは、「子どもの健康維持や増進に必要な園児情報をPDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育」と定義していることから、「一人ひとりの個性を生かす」は「適切な支援」と同様の意味を持つと解釈し、「子どもや保護者の情報から適切な支援方針を決定している。」の1項目を採用した。

『活動の評価』として抽出された重要フレーズは、子どもや保護者へのかかわりを評価していることを意味するものであると考えられた。「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、子どもの発育、発達の変化から評価している。」「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、育児状況の変化から評価している。」「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、感覚ではなく、記録として残している。」「子どもや保護者へのかかわりとその効果が

ら、支援計画を見直している。」の4項目を作成し、「感覚ではなく記録として残す」「支援計画を見直す」は評価として当然行なうべきことであると解釈できることから、「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、感覚ではなく、記録として残している。」「子どもや保護者へのかかわりとその効果から、支援計画を見直している。」の2項目を削除し、評価の視点が具体的で妥当であると解釈できる「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、子どもの発育、発達の変化から評価している。」「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、育児状況の変化から評価している。」の2項目を採用した。

『継続的な情報活用』として抽出された重要フレーズは、評価を継続的に行い、次の支援につないで行くことを意味するものであると考えられた。「子どもや保護者へのかかわりの評価を、次の支援に生かしている。」「子どもや保護者へのかかわりの評価を、一時点ではなく継続的に行っている。」「子どもや保護者へのかかわりの評価を、就学後につないでいる。」「子どもの発育、発達の変化を、感覚ではなく記録として残している。」「保護者の育児状況の変化を、感覚ではなく記録として残している。」「子どもの発育、発達の変化を、就学後に引き継いでいる。」「保護者の育児状況の変化を、就学後に引き継いでいる。」の7項目を作成し、「感覚ではなく記録として残す」は評価として当然の内容であると解釈し、また、「子どもの発育、発達の変化」「保護者の育児状況」は活動の評価項目であることから「子どもや保護者へのかかわりの評価」として統合し、「子どもや保護者へのかかわりの評価を、次の支援に生かしている。」「子どもや保護者へのかかわりの評価を、一時点ではなく継続的に行っている。」「子どもや保護者へのかかわりの評価を、就学後につないでいる。」の3項目を採用した。

『関連・因果関係の検証』として抽出された重要フレーズは、子どもや保護者へのかかわりと評価を繰り返す中で集積されていく情報が根拠を生み出し、その根拠が子どもの将来を見据えた支援に欠かせないことの理解を意味するものであると考えられた。「子どもの将来的な自立のために、どのような情報が必要なかがわかる。」「子どもの将来的な自立のために、どのようなかかわりが必要なかがわかる。」「情報の蓄積が、子どもの発達軌跡（どのような発達をたどるのか）の解明につながるのだと思う。」「情報の蓄積が、将来の法の整備（乳幼児健診の時期や健診項目の決定など）にまでつながるのだと思う。」「情報の蓄積が、子どもの発育、発達に影響する要因の解明につながるのだと思う。」の5項目を作成し、5項目すべてを採用した。

【園児情報の発展的活用】を構成する質問項目として、『目標の明確化』『根拠に基づく支援』『活動の評価』『継続的な情報活用』『関連・因果関係の検証』の5つのサブカテゴリの中に、12の質問項目が作成された。

表 2-7 園児情報の発展的活用を構成する質問項目

サブ カテゴリー	質問項目
目標の 明確化	子どもや保護者への支援の目標を明確にしている。
根拠に 基づく支援	子どもや保護者の情報から適切な支援方針を決定している。 子どもや保護者の情報から一人ひとりの個性を生かす支援計画を立案している。
活動の評価	子どもや保護者へのかかわりとその効果を、子どもの発育、発達の変化から評価している。 子どもや保護者へのかかわりとその効果を、育児状況の変化から評価している。 子どもや保護者へのかかわりとその効果を、感覚ではなく、記録として残している。 子どもや保護者へのかかわりとその効果から、支援計画を見直している。
継続的な 情報活用	子どもや保護者へのかかわりの評価を、次の支援に生かしている。 子どもや保護者へのかかわりの評価を、一時点ではなく継続的に行っている。 子どもや保護者へのかかわりの評価を、就学後につないでいる。 子どもの発育、発達の変化を、感覚ではなく記録として残している。 保護者の育児状況の変化を、感覚ではなく記録として残している。 子どもの発育、発達の変化を、就学後に引き継いでいる。 保護者の育児状況の変化を、就学後に引き継いでいる。
関連・因果関係 の検証	子どもの将来的な自立のために、どのような情報が必要なかがわかる。 子どもの将来的な自立のために、どのようなかかわりが必要なかがわかる。 情報の蓄積が、子どもの発達軌跡（どのような発達をたどるのか）の解明につながるのだと思う。 情報の蓄積が、将来の法の整備（乳幼児健診の時期や健診項目の決定など）にまでつながるのだと思う。 情報の蓄積が、子どもの発育、発達に影響する要因の解明につながるのだと思う。

※網かけはディスカッションにより削除した項目

### ③ 園児情報活用尺度を構成する質問項目

重要カテゴリーとして位置づけた【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】に当てはまる重要な成句（重要フレーズ）から、【園児情報の基本的活用】18項目、【園児情報の発展的活用】12項目、合計30項目の質問項目が作成された（表2-8）。

表 2-8 園児情報活用尺度を構成する質問項目

---

#### 園児情報の基本的活用

- 1 子どもの基本情報（名前，生年月日，年齢，性別）を把握している。
- 2 子どもの発育・発達の**状態**（身長，体重，乳幼児健診などの**状況**）を把握している。
- 3 子どもの**健康状況**（既往歴，**病気**，けが，平熱など）を把握している。
- 4 子どもの**生活習慣の状態**（食事，睡眠，排泄，清潔，衣服の着脱，遊びなど）を把握している。
- 5 子どもの対人関係（友だちや家族等との関係）を把握している。
- 6 保護者の基本情報（大まかな年齢，家族構成，同居の有無，住所，緊急連絡先など）を把握している。
- 7 保護者の**健康状態**（**病気**や介護の有無など）を把握している。
- 8 保護者の**就労状況**（勤務先や勤務時間，勤務形態など）を把握している。
- 9 保護者の**育児状況**（子どもへのかかわり，協力者，相談者など）を把握している。
- 10 子どもや家族を，噂や中傷に惑わされず**理解**している。
- 11 子どもや家族を，思い込みや思い入れでなく**理解**している。
- 12 様々な情報から総合的に子どもや家族を**理解**できる。
- 13 子どもや家族の情報を職場内で共有している。
- 14 子どもや家族について他の専門機関と共有している。
- 15 子どもの発育，発達に関する特徴を保護者にわかり安く伝えている。
- 16 保護者と，子どもに関する情報の交換を細やかに行っている。
- 17 保護者が出している赤信号を見逃さない。
- 18 保護者の今までの子育てを認めながら，今後のことを話し合っている。

---

#### 園児情報の発展的活用

- 19 子どもや保護者への支援の目標を明確にしている。
  - 20 子どもや保護者の情報から適切な支援方針を**決定**している。
  - 21 子どもや保護者へのかかわりとその効果を，子どもの発育，発達の変化から評価している。
  - 22 子どもや保護者へのかかわりとその効果を，育児状況の変化から評価している。
  - 23 子どもや保護者へのかかわりの評価を，次の支援に生かしている。
  - 24 子どもや保護者へのかかわりの評価を，一時点ではなく継続的に行っている。
  - 25 子どもや保護者へのかかわりの評価を，就学後につないでいる。
  - 26 子どもの将来的な自立のために，どのような情報が必要なかがわかる。
  - 27 子どもや保護者へのかかわりの評価を，どのようなかかわりが必要なかがわかる。
  - 28 情報の蓄積が，子どもの発達軌跡（どのような発達をたどるのか）の解明につながるのだと思う。
  - 29 情報の蓄積が，将来の法の整備（乳幼児健診の時期や健診項目の**決定**など）にまでつながるのだと思う。
  - 30 情報の蓄積が，子どもの発育，発達に影響する要因の解明につながるのだと思う。
-

### 3) 研究の方法

#### 3)-1 対象者

本研究における「保育専門職」は、日常的に乳幼児と保護者に関わりをもつ保育士、幼稚園教諭、看護師、保健師と定義しているが、本研究では、妥当性の検証のために「保育環境評価票（保育士、幼稚園教諭を対象とする評価票）」を用いることから、対象者は、全国の人口構成と大きなずれのない自治体の認可保育所、幼稚園に勤務する保育士、幼稚園教諭 200 名程度とした。

#### 3)-2 調査日

調査日は、平成 24 年 8 月 1 日～8 月 31 日（筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認後）とした。

#### 3)-3 調査方法と調査依頼

本研究は、無記名の自記式質問紙調査である。研究実施者が、依頼書、説明書、質問紙を持って保育所、及び、幼稚園を訪問し、書面と口頭で調査の目的や方法、成果、データの取り扱い、調査に協力せずとも不利益を受けないことについて十分な説明を行ない、調査への協力について承認を得た。個人の回答が他に漏れないよう、個別の糊付封筒を用意した。質問紙の回収は、各保育所、幼稚園の担当者に依頼した。回収した質問紙は、まとめて担当者から研究実施者まで送付いただいた。回収を行なう担当者には、調査票の取り扱いについて十分な説明を行ない、共通理解をはかった。

#### 3)-4 調査項目

質問紙は、基本的属性（年齢、性別、職業、職業経験年数、職位）、研究に先立ち作成した尺度を構成する質問項目、基準関連妥当性の検証を行うための「保育環境評価票（安梅、2008）」「Communicative and Critical health literacy 尺度（Ishikawa・et. Al, 2008）」で構成した。

尺度を構成する質問項目は、本研究に先立って実施したフォーカス・グループ・インタビュー調査（倫理審査承認番号 23-283）の結果から作成を試みた質問項目である。2 因子 30 項目で構成（表 2-8）され、「全く思わない（1 点）」から「かなり思う（5 点）」までの 5 件法で回答を得るものである。

保育環境評価票は、多様な保育ニーズに対応できる「専門技術の向上」を目指して開発された。「子どもの最善の利益」を実現するために、子どもと保護者の多様なニーズに応え

るエキスが整理されており、子どもの健やかな成長に望ましい効果をもたらすことが実証されている。日常の保育の質を向上させるための自己評価に有効なツールとして活用できるものである。子どもの全体像を捉える9項目、家族の全体像を捉える8項目、関係機関との連携12項目の合計29項目に「実施していない(1点)」から「実施している(3点)」の3件法で回答を得るものであり、各領域の合計得点を尺度得点としている(安梅, 2007a: 安梅, 2008)。

Communicative and Critical health literacy 尺度は、WHOによるヘルスリテラシーの定義を参考に開発されたものである。個人の相互作用的ヘルスリテラシーを測定する3項目と批判的ヘルスリテラシーを測定する2項目の合計5項目の質問に「全く思わない(1点)」から「かなり思う(5点)」5件法で回答を得るものであり、5項目の平均得点を尺度得点としている(Ishikawa・et. Al, 2008)。WHOによるヘルスリテラシーの定義は、「認識面でのスキルや社会生活上のスキルを意味し、これにより健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力(WHO, 1998)」とされている。本研究における「園児情報活用」とは、「子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を、PDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うスキルである。健康維持や増進に必要な情報を理解し、活用するという点で、概念に共通性がみられる。また、本研究における【園児情報の基本的活用】は、「機能的ヘルスリテラシー」と「相互作用的ヘルスリテラシー」をあわせ持ち、【園児情報の発展的活用】は、批判的ヘルスリテラシーに共通する概念であると考えられる。よって、Communicative and Critical health literacy 尺度を構成概念妥当性検証のための尺度とした。

### 3)-5 分析

まず、単純集計を行い、それぞれの変数の分布を把握した。次に、園児情報活用を適切に測定できる尺度構成をめざし、【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】に相当する因子構造が、保育専門職から取得したデータにおいて得られるかどうかを確認するため、「尺度を構成する質問項目」について分布を考慮した上で因子分析を行った。2因子構造が確認された際には、信頼性係数を算出し、因子構造の内的一貫性を確認した。また、職業経験年数、保育環境評価票得点との相関分析により、基準関連妥当性(併存的妥当性)の検証を行った。Communicative and Critical health literacy 尺度得点との相関分析により、構成概念妥当性の検証を行った。

### 3)-6 倫理的配慮

対象者には、調査の目的、調査結果の活用、及び、調査結果を目的外に使用しないこと、調査に参加したことでいかなる不利益も受けないこと、質問紙に回答するかどうかは、個人の自由であり、回答しなくても不利益を受けないことを書面と口頭で説明し、調査を実施する。調査への同意は、質問紙への提出をもって同意とみなす。また、質問紙への回答内容が第三者に漏れないよう、質問紙の回収には個別の糊付封筒を用意する。本研究は、筑波大学医学医療系医の倫理審査委員会の承認を得てから実施した(通知番号 第 649 号)。

## 4) 結果

### 4)-1 対象属性

質問紙を 180 名に配布し、178 名から回答を得た。回収率は、98.9%であった。

回収された 178 名のうち、属性と園児情報活用尺度を構成する項目に欠損のない 168 名を分析の対象とした(表 2-9)。

対象の性別は、男性 16 (9.5%)、女性 152 (90.5%) であった。勤務地は、関西地域 61 (36.3%)、関東地域 107 (63.7%) であった。職種は、保育士 133 (79.2%)、幼稚園教諭 35 (20.8%) であった。

年齢は、20-24 歳 18 (10.7%)、25-29 歳 43 (25.6%)、30-34 歳 23 (13.7%)、35-39 歳 19 (11.3%)、40-44 歳 15 (8.9%)、45-49 歳 8 (4.8%)、50-54 歳 19 (11.3%)、55 歳以上 23 (13.7%)、平均値 37.5、中央値 34.5 であった。

経験年数は、0-5 年未満 45 (26.8%)、5-10 年未満 40 (23.8%)、10-15 年未満 27 (16.1%)、15-20 年未満 14 (8.3%)、20-25 年未満 10 (6.0%)、25-30 年未満 5 (3.0%)、30-35 年未満 11 (6.5%)、35 年以上 16 (9.5%)、平均値 13.5、中央値 9.4 であった。

職位は、園長・所長 12 (7.1%)、副園長・副所長 2 (1.2%)、主任 12 (7.1%)、副主任 7 (4.2%)、クラス担任 125 (74.4%)、臨時・パートタイム 10 (6.0%) であった。



表 2-9 対象属性

n = 16

項目	人数 (割合)
性別	男性 16 ( 9.5 )
	女性 152 ( 90.5 )
勤務地	関西 61 ( 36.3 )
	関東 107 ( 63.7 )
職種	保育士 133 ( 79.2 )
	幼稚園教諭 35 ( 20.8 )
年齢	平均値 (95%CI) 37.5 (5.7-39.3)歳
	中央値 (25-75%) 34.5 (7.0-49.5)歳
	20-24歳 18 ( 10.7 )
	25-29歳 43 ( 25.6 )
	30-34歳 23 ( 13.7 )
	35-39歳 19 ( 11.3 )
	40-44歳 15 ( 8.9 )
	45-49歳 8 ( 4.8 )
	50-54歳 19 ( 11.3 )
	55歳以上 23 ( 13.7 )
経験年数	平均値 (95%CI) 13.5 (1.8-15.3)年
	中央値 (25-75%) 9.4 (4.1-19.8)年
	0-5年未満 45 ( 26.8 )
	5-10年未満 40 ( 23.8 )
	10-15年未満 27 ( 16.1 )
	15-20年未満 14 ( 8.3 )
	20-25年未満 10 ( 6.0 )
	25-30年未満 5 ( 3.0 )
	30-35年未満 11 ( 6.5 )
	35年以上 16 ( 9.5 )
職位	園長・所長 12 ( 7.1 )
	副園長・副所長 2 ( 1.2 )
	主任 12 ( 7.1 )
	副主任 7 ( 4.2 )
	クラス担任 125 ( 74.4 )
	臨時・パートタイム 10 ( 6.0 )

#### 4)-2 因子分析の結果

園児情報活用尺度を構成すると考えられる 30 項目について、それぞれの分布を確認したところ、多変量正規性は確保されなかった。また、因子間には相関がみられ、因子の独立性は確認されなかった。よって、最小二乗法による因子分析を行い、斜交回転（プロマックス回転）を施した。因子数は、当初よりの仮説に加え、スクリープロットや固有値を考慮し、2 因子解を採用した。いずれの因子についても、因子負荷量が 0.40 以上の項目を採用し、複数の因子に対して、重複した負荷を示した項目は除かれた。最終的に 2 因子 26 項目が採用された（表 2-10）。

2 因子解の因子寄与は、第 1 因子 8.47、第 2 因子 7.45、共通性 15.92 であった。各因子を構成する質問項目の特徴から、第 1 因子は、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに適用されるスキル「園児情報の発展的活用（12 項目）」、第 2 因子は、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキル「園児情報の基本的活用（14 項目）」であると解釈され、単純構造に近い因子パターンを有した。

表 2-10 園児情報活用尺度の因子分析結果

質問項目 (26項目) $\alpha=0.94$	第1因子 $\alpha=0.93$	第2因子 $\alpha=0.90$	共通性	
<b>第1因子：園児情報の発展的活用</b>				
子どもや保護者へのかかわりの評価を、次の支援に生かしている。	0.87	-0.13	0.65	
子どもや保護者へのかかわりの評価を、一時点ではなく継続的に行っている。	0.80	-0.05	0.60	
子どもや保護者へのかかわりとその効果を、子どもの発育、発達の変化から評価している。	0.77	-0.04	0.56	
子どもや保護者へのかかわりの評価を、就学後につないでいる。	0.76	0.01	0.59	
情報の蓄積が、子どもの発育、発達に影響する要因の解明につながるのだと思う。	0.73	-0.09	0.47	
子どもや保護者の情報から適切な支援方針を決定している。	0.73	0.03	0.55	
子どもや保護者へのかかわりとその効果を、育児状況の変化から評価している。	0.72	-0.07	0.46	
情報の蓄積が、将来の法の整備（乳幼児健診の時期や健診項目の決定など）にまでつながるのだと思う。	0.70	0.03	0.51	
どのような情報が子どもの将来的な自立のために必要なかがわかる。	0.67	0.12	0.56	
情報の蓄積が、子どもの発達軌跡（どのような発達をたどるのか）の解明につながるのだと思う。	0.67	-0.03	0.44	
どのようなかかわりが子どもの将来的な自立のために必要なかがわかる。	0.63	0.06	0.44	
子どもや保護者への支援の目標を明確にしている。	0.56	0.22	0.51	
<b>第2因子：園児情報の基本的活用</b>				
子どもの生活習慣の状態（食事、睡眠、排泄、清潔、衣服の着脱、遊びなど）を把握している。	-0.18	0.77	0.47	
子どもの基本情報（名前、生年月日、年齢、性別）を把握している。	-0.32	0.74	0.38	
保護者の就労状況（勤務先や勤務時間、勤務形態など）を把握している。	-0.13	0.73	0.44	
保護者の基本情報（大まかな年齢、家族構成、同居の有無、住所、緊急連絡先など）を把握している。	0.00	0.70	0.48	
子どもの発育・発達の状態を把握している。	0.09	0.65	0.49	
保護者の健康状態（病気や介護の有無など）を把握している。	0.05	0.62	0.43	
保護者の育児状況（子どもへのかかわり、協力者、相談者など）を把握している。	0.06	0.61	0.41	
子どもの対人関係（友だちや家族等との関係）を把握している。	-0.01	0.58	0.33	
子どもの健康状況（病気、けが、アレルギーなど）を把握している。	0.18	0.54	0.44	
様々な情報から総合的に子どもや家族を理解している。	0.22	0.53	0.45	
保護者が出している赤信号を見逃さない。	0.20	0.50	0.40	
子どもの発育、発達に関する特徴を保護者にわかり安く伝えている。	0.22	0.46	0.37	
子どもや家族を、噂や中傷に感わされず理解している。	0.18	0.43	0.31	
子どもや家族を、思い込みや思い入れでなく理解している。	0.18	0.41	0.28	
	因子寄与	8.47	7.45	15.92
	因子間相関（Spearman順位相関係数）	0.56		

最小二乗法，プロマックス回転

Kaiser-Meyer-Olkin の本妥当性 : 0.92

#### 4)-3 信頼性係数

尺度および各因子間の内的整合性を検討するため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。尺度全体の信頼性係数は  $\alpha = 0.94$ 、第 1 因子は  $\alpha = 0.93$ 、第 2 因子は  $\alpha = 0.90$  であった。尺度を構成する質問項目について高い内的一貫性が示された。

#### 4)-4 年齢・経験年数・職位との関連

年齢、経験年数、職位と、園児情報活用尺度の各下位尺度の得点について Spearman の順位相関係数を算出した（表 2-11）。年齢との相関は  $r = 0.23 \sim 0.27$  ( $p < 0.001$ )、経験年数との相関は  $r = 0.27 \sim 0.33$  ( $p < 0.001$ )、職位との相関は、 $r = 0.08 \sim 0.17$  であった。Spearman の順位相関係数からは、経験年数との関連がより強いことが示されたが、年齢と経験年数との間に高い相関 ( $r = 0.85$ ,  $p < 0.001$ ) が示されたため、経験年数と園児情報活用各下位尺度の得点について、年齢で調整し、偏相関係数を算出した（表 2-12）。経験年数と「園児情報の発展的理解」との偏相関係数は  $r = 0.16$  ( $p = 0.039$ )、「園児情報の基本的理解」との偏相関係数は  $r = 0.20$  ( $p = 0.012$ )、総合得点との偏相関係数は  $r = 0.21$  ( $p = 0.009$ ) であった。

表 2-11 年齢、経験年数、職位との関連

N = 6										
	園児情報の 発展的理解		園児情報の 基本的理解		総合得点		経験年数		職位	
	r	p	r	p	r	p	r	p	r	p
年齢	0.23	<0.003	0.27	<0.001	0.27	<0.001	0.85	<0.001	0.40	<0.001
経験年数	0.27	<0.001	0.33	<0.001	0.32	<0.001	-	-	0.47	<0.001
職位	0.17	<0.029	0.08	<0.291	0.14	<0.077	-	-	-	-

表 2-12 経験年数との偏相関（年齢調整）

N = 6						
	園児情報の 発展的理解		園児情報の 基本的理解		総合得点	
	r	p	r	p	r	p
経験年数	0.16	0.039	0.20	0.012	0.21	0.009

#### 4)-5 保育環境評価票との関連

保育環境評価票の各下位尺度得点と、園児情報活用尺度各下位尺度の得点について Spearman の順位相関係数を算出した（表 2-13）。

子どもの全体像を捉える領域と園児情報の発展的理解との相関は  $r=0.21$  ( $p=0.006$ )、園児情報の基本的理解との相関は  $r=0.23$  ( $p=0.003$ )、総合得点との相関は  $r=0.26$  ( $p=0.001$ ) であった。

家族の全体像を捉える領域と園児情報の発展的理解との相関は  $r=0.09$  ( $p=0.261$ )、園児情報の基本的理解との相関は  $r=0.20$  ( $p=0.009$ )、総合得点との相関は  $r=0.16$  ( $p=0.033$ ) であった。

関係機関との連携領域と園児情報の発展的理解との相関は  $r=0.09$  ( $p=0.232$ )、園児情報の基本的理解との相関は  $r=0.08$  ( $p=0.334$ )、総合得点との相関は  $r=0.11$  ( $p=0.151$ ) であった。

表 2-13 保育環境評価票との関連

	園児情報の 発展的理解		園児情報の 基本的理解		総合得点	
	r	p	r	p	r	p
子どもの全体像を捉える (n=168)	<b>0.21</b>	<b>0.006</b>	<b>0.23</b>	<b>0.003</b>	<b>0.26</b>	<b>0.001</b>
家族の全体像を捉える (n=168)	0.09	0.261	<b>0.20</b>	<b>0.009</b>	<b>0.16</b>	<b>0.033</b>
関係機関との連携 (n=167)	0.09	0.232	0.08	0.334	0.11	0.151
総合 (n=167)	0.07	0.366	0.11	0.173	0.11	0.149

#### 4)-6 Communicative and Critical health literacy 尺度との関連

Communicative and Critical health literacy 尺度の各下位尺度得点と、園児情報活用尺度各下位尺度の得点について Spearman の順位相関係数を算出した（表 2-14）。

Communicative 領域得点と、園児情報の発展的活用との相関は  $r=0.36$  ( $p<0.001$ )、園児情報の基本的活用との相関は  $r=0.36$  ( $p<0.001$ )、総合得点との相関は  $r=0.41$  ( $p<0.001$ ) であった。Critical 領域得点と、園児情報の発展的活用との相関は  $r=0.51$  ( $p<0.001$ )、園児情報の基本的活用との相関は  $r=0.41$  ( $p<0.001$ )、総合得点との相関は  $r=0.52$  ( $p<0.001$ ) であった。Communicative and Critical health literacy 尺度総合得点と、園児情報の発展的活用は  $r=0.46$  ( $p<0.001$ )、園児情報の基本的活用との相関は  $r=0.42$  ( $p<0.001$ )、総合得点との相関は  $r=0.49$  ( $p<0.001$ ) であった。

表 2-14 Communicative and Critical health literacy 尺度との関連

N = 6						
	園児情報の 発展的理解		園児情報の 基本的理解		総合得点	
	r	p	r	p	r	p
Communicative	<b>0.36</b>	<b>&lt;0.001</b>	<b>0.36</b>	<b>&lt;0.001</b>	<b>0.41</b>	<b>&lt;0.001</b>
Critical	<b>0.51</b>	<b>&lt;0.001</b>	<b>0.41</b>	<b>&lt;0.001</b>	<b>0.52</b>	<b>&lt;0.001</b>
Total	<b>0.46</b>	<b>&lt;0.001</b>	<b>0.42</b>	<b>&lt;0.001</b>	<b>0.49</b>	<b>&lt;0.001</b>

4)-7 園児情報活用尺度得点の基本統計量

開発された園児情報活用尺度の基本統計量を算出した（表 2-15）。

園児情報の発展的理解因子の得点は、平均値 3.59 (SD±0.55)、中央値 3.58 (3.25-4.00)、最小値 2.00、最大値 5.00 であった。園児情報の基本的理解因子の得点は、平均値 3.88 (SD±0.42)、中央値 3.86 (3.57-4.14)、最小値 2.86、最大値 5.00 であった。尺度総合得点は、平均値 3.74 (SD±0.43)、中央値 3.73 (3.46-4.03)、最小値 2.50、最大値 5.00 であった。

表 2-15 園児情報活用尺度得点の基本統計量

N = 6			
	園児情報の 発展的活用	園児情報の 基本的活用	総合
平均値	3.59	3.88	3.74
標準偏差	0.55	0.42	0.43
中央値	3.58	3.86	3.73
25 <sup>th</sup> パーセンタイル値	3.25	3.57	3.46
75 <sup>th</sup> パーセンタイル値	4.00	4.14	4.03
最小値	2.00	2.86	2.50
最大値	5.00	5.00	5.00
p	<0.001	<0.001値	

※ pは、2つの下位尺度の1標本のt検定の有意確率である

## 5) 考察

### 5)-1 本尺度の因子構造について

園児情報活用を適切に測定できる尺度構成をめざし、【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】に相当する因子構造が、保育専門職から取得したデータにおいて得られるかどうかに着目しながら、尺度の構成を試みた。

因子分析の結果、想定した2因子構造が得られ、単純構造に近い因子パターンを有している結果から因子的妥当性が確認された。尺度および因子間の内的整合性を検討するために算出したCronbachの $\alpha$ 係数は高い値を示し(第1因子 $\alpha=0.93$ 、第2因子 $\alpha=0.90$ 、総合 $\alpha=0.94$ )、内的一貫性の側面から信頼性が確認された。

各因子を構成する質問項目の特徴から、第1因子は、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに適用されるスキル【園児情報の発展的活用(12項目)】、第2因子は、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキル【園児情報の基本的活用(14項目)】であると解釈された。

### 5)-2 本尺度の妥当性について

#### ① 基準関連妥当性の確認

経験年数との相関分析では、年齢を調整しても、有意な正の相関が示された。質の高い保育を提供する保育専門職の専門性は、「経験的な根拠」と「科学的な根拠」に裏付けられた豊かな知識と技術であると言われている(安梅, 2008)。経験的な根拠は、職業経験を積むことにより創出される。よって、経験年数は保育専門職の専門性向上につながる一つであると考えられる。

一方、職位との相関は、園児情報の発展的理解は $r=0.17$  ( $p=0.029$ )、園児情報の基本的理解は $r=0.08$  ( $p=0.291$ )、総合は $r=0.14$  ( $p=0.077$ )であり、有意な相関は見られなかった。保育実践における職位は、年齢や経験年数が長く、よりよい保育支援を展開できる保育専門職が高い職位(管理者)についているとは限らない。また、本研究において、「質の高い保育」は、「子どもの健康維持や増進に必要な園児情報をPDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育」と定義しているが、高い職位にある者は、個々の園児や保護者と直接的に関わる保育業務は少なく、保育所経営に関することが日常業務の大半を占めることが考えられる。よって関連が見られないことは妥当な結果であると考えられる。

保育環境評価票との相関分析では、子どもの全体像を捉える領域、家族の全体像を捉え

る領域との有意な正の相関が示された。関係期間との連携領域では有意な相関は見られなかった。保育環境評価票は、多様な保育ニーズに対応できる「専門技術の向上」を目指して開発され、子どもの健やかな成長に望ましい効果をもたらすことが実証されているものであるが、関係機関との連携領域の項目内容をみると、「(保育所が)子育て支援の拠点を心がけている」や「小学校との連携」「地域との連携」など、園児情報活用よりもさらに踏み込んだ内容の質問項目である。本研究における「園児情報の活用」は、「子どもや保護者とのかかわりの中で得ている「子どもの健康維持や増進に必要な園児情報」をPDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うための情報理解」であることから、必ずしも相関は見られないと考えられる。

本研究では、保育の質向上につながるとされる「経験年数」「保育環境評価票(子どもの全体像を捉える領域)(家族の全体像を捉える領域)」との有意な正の相関が得られたことより、基準関連妥当性(併存的妥当性)が確認された。

## ② 構成概念妥当性の確認

Communicative and Critical health literacy 尺度との相関分析では、下位尺度、総合スコアともに、有意な正の相関が示された。Communicative and Critical health literacy 尺度の Communicative 因子は、本尺度の園児情報の基本的活用因子との相関がより高く、Communicative and Critical health literacy 尺度の Critical 因子は、本尺度の園児情報の発展的活用との相関がより高く示された。

Communicative and Critical health literacy 尺度は、WHO によるヘルスリテラシーの定義を参考に開発されたものである。個人の相互作用的ヘルスリテラシーを測定する3項目と批判的ヘルスリテラシーを測定する2項目の合計5項目で構成されている(Ishikawa・et. al、2008)。WHO によるヘルスリテラシーの定義は、「認識面でのスキルや社会生活上のスキルを意味し、これにより健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力(WHO、1998)」とされている。本研究における「園児情報活用」とは、「子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を、PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うスキルである。健康維持や増進に必要な情報を理解し、活用するという点で、概念に共通性がみられる。Communicative and Critical health literacy 尺度との各下位尺度ごとの相関、総合スコアとの相関が得られたことより、構成概念妥当性が確認された。

経験年数、保育環境評価票との相関分析により基準関連妥当性が確認され、Communicative and Critical health literacy 尺度得点との相関分析により構成概念妥当



性が確認された。質問項目作成プロセスから内容的妥当性が確認されている。本尺度により、子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用」を適切に測定できる可能性が示唆された。

### (9) 本システムの継続的データ集積可能性の評価

本システムの導入実績から、本システムのデータ集積可能性と本システムの改善点を検討した。

本システムを導入した保育所、幼稚園は91園であった。本システムに登録された園児数は、44,323名であった。本システムにおける各ツールのデータ回収数は、①一般発達評価票41,893名、②社会的スキル尺度40,779名、③気になる子どもチェックリスト27,621名（気になる行動がある場合のみ）、④育児環境評価票24,874名、⑤保育環境評価票9園であった（表2-16）。

表2-16 WEBを活用した「園児情報記録システム」利用状況

	保育所数 使用園数	一般発達 評価票 回収数	社会的 スキル尺度 回収数	気になる子ども チェックリスト 回収数	育児環境 評価票 回収数	保育環境 評価票 回収数
本システム	91	44323	40779	27621	25874	9

電子健康記録は、情報管理の安全性やケアの質向上が示されても、なかなか普及しない現状があり（Ashish K, et.al., 2009）、電子健康記録普及のためにはシステムデザインをより使いやすいものにすることが求められる（Archer N. et.al., 2011）、活用マニュアルが必要である（渡辺・他, 2007b）などの報告がされているが、保育専門職を交えて検討を重ねたデザインと簡単な活用マニュアルにより、単純な導入実績からは、今後の展開可能性が期待できる数が得られたと考えられる。システム導入実績からは、今後の展開可能性が期待できる数が得られた。今後、同程度のサンプルが得られれば、子どもの発達軌跡を明らかにしていくなど、より強固なエビデンスが得られると考えられる。

保育環境評価票について、本システムにおける回収数は、91保育所中9であった。保育環境評価票は、評価項目の数が多く、すべての項目のチェックには時間を要するこ

とが考えられる。本システム上では9保育所からの回収が確認できたが、今後、項目をしぼった簡易版の作成などを検討することが求められる。

#### (10) 子どもと保護者のための支援ループ展開の確認

本システム完成と同時に本システムの導入を行った3園の保育士に、本システム活用状況についてまとめていただいた。

##### 1) A園の例




A園では、「保育専門職だからできる評価、支援」「評価、支援は日常の保育の中に」をキーワードに、「子どもの育ちを知り、日常保育に活用する」をモットーに、本システムを日常的に保育の中で活用し、子どものすこやかな育ちを支えていた。「支援設計を書くことで、自分たちの保育を整理し、思いを共有できる。」という声が得られた。

「保育専門職および他職種間の迅速な情報共有」「発達状態の特徴を視覚的かつ客観的に確認する」「特段の配慮を要する子どもが明示され、保育専門職同士が課題を共有したり、該当園児に対する保育のあり方を見直すなど、早期支援とよりよい保育への一助となる」などが可能となった事例である。

## 2) B園の例

**保護者との面談時に活用**

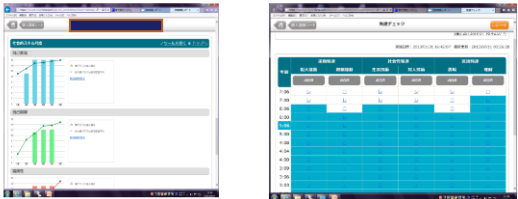
前向きな言葉で説明



i padやパソコン等で保護者と子どもの発

WEB園児支援システムの活用の実際

**発達チェック等で1人1人の発達を確認**



経験的根拠を立証できる。  
保育に反映。  
職員間で共有。

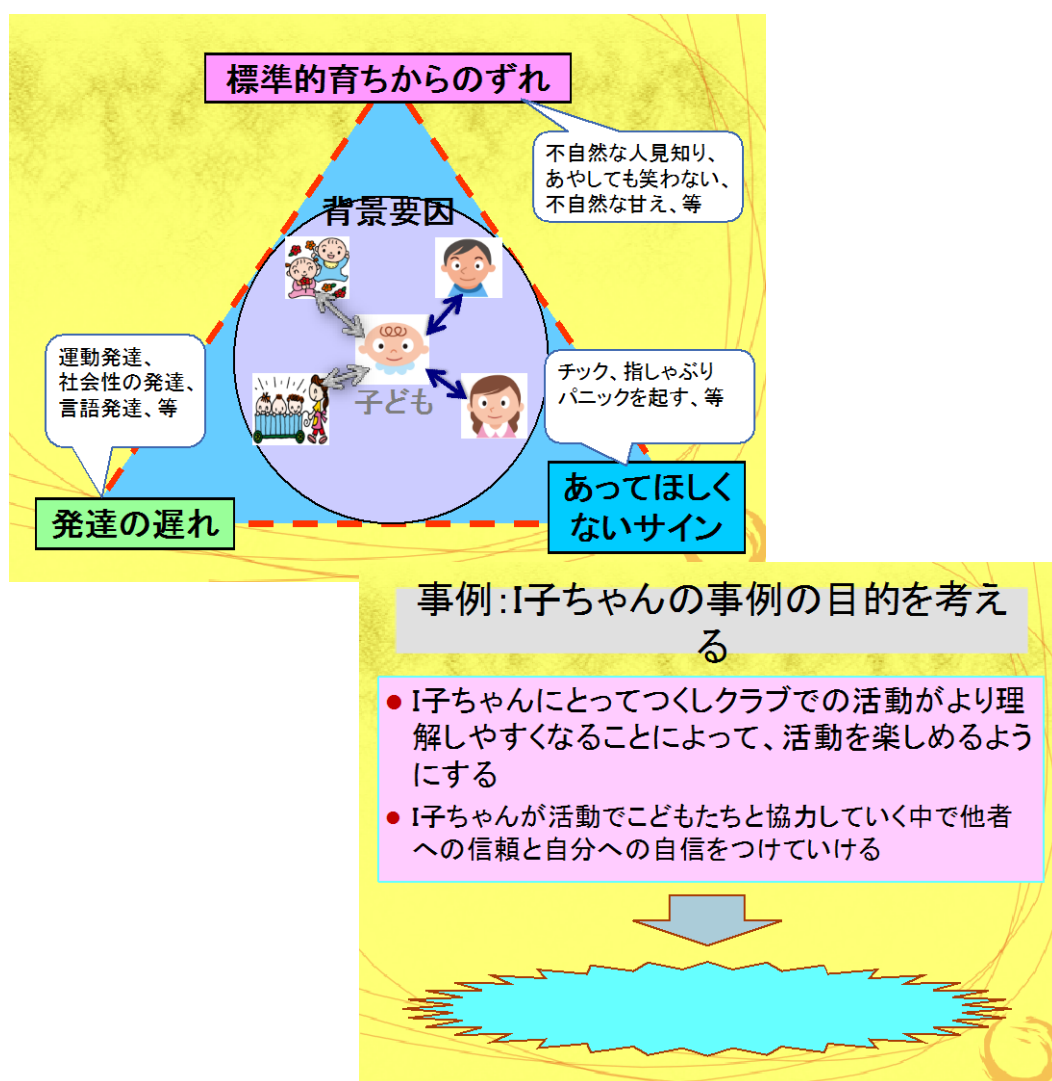
B園では、特に、本システムのレポート機能（発達の状況などを視覚的に表示）を活用し、経験的根拠の立証、保育への反映、職員間での共有のほか、保護者と子どもの発達の状況を共有することに活用していた。

B園の保育士からは、「保護者は子どもをととても可愛がっており、小さいころから、その子が悪いことをしても注意ができず、担任からも、メリハリをつけることが大切ですと言われ続けていた。しかし、大きくなるにつれて、保護者もちょっと困ったなと感じ始めていた。このシステムを使って子どもの状況を説明した際には「やっぱりね・・・」との言葉が返ってきた。現在は、担任と常に話し合い、少しずつメリハリできるようになってきている。」との声を得られた。

「発達状態の特徴を視覚的かつ客観的に確認する」「保護者に対して子どもの特徴をわかりやすく示し、保育の共有および子育て支援に資する」「特段の配慮を要する子どもが明示され、保育専門職同士が課題を共有したり、該当園児に対する保育のあり方を見直すなど、早期支援とよりよい保育への一助となる。」などが可能となった事例である。

### 3) C園の例

C園では、障がい児（気になる子）を含めたインクルーシブ保育の中で、「子どもを理解すること」に本システムが活用されていた。



C園の保育士からは、「まず、問題を整理することが必要になってくる。具体的には、①気になる子どもの何が問題なのかを具体的に整理する。問題解決で必ず必要なこと

は、まず何が問題なのかを具体的に整理することである。花で言えば、本来、夏には花を咲かせるはずなのに花が咲かない、秋には実をつけ始めるのに実がつかないなど、おこっている問題を整理することである。この作業をおろそかにし、支援方法を考えても的外れな支援になる。②その問題に関係する要因は何かを整理する。花を育てるには、その花の種類にあった土や気温、水のやり方、肥料、光などを考えないとけません。そのためには、その花の性質や特徴を知らなければ育ちません。花を咲かせないのであれば、それらをひとつひとつチェックしていきます。土はその花に適した土を使っているか？温度は低くないか？水は多くやりすぎていないか？光はどの程度必要なのか？などの要因を整理します。③支援方法を考える。水が多すぎるのであれば、水遣りの回数を減らすなど、問題がわかれば具体的な支援方法を考えていける。

このように問題を整理するための道具として、WEB園児支援システムを活用している。」との声を得られた。

## 発達評価を行ったことで

発達チェックを行った結果、社会性の高さに対し、運動、言語発達がゆっくり目ということが分かり、その特性に基づいた支援計画を作成することが出来た。

I子ちゃんがつくしクラブの活動が楽しめ、周りの子どもたちもI子ちゃんのいいところやがんばりに気付けた。



また、「発達チェックを行った結果、社会性の高さに対し、運動、言語発達がゆっくり目ということが分かり、その特性に基づいた支援計画を作成することが出来た。」という具体的な成果も得られた。

「発達状態の特徴を視覚的かつ客観的に確認する」「特段の配慮を要する子どもが明示され、保育専門職同士が課題を共有したり、該当園児に対する保育のあり方を見直すなど、早期支援とよりよい保育への一助となる」などが可能となった事例である。

### Ⅲ 実装支援活動の成果

#### (1) 目標達成及び実装状況

##### 【 支援期間終了後の目標（到達点）】

1. 保育専門職が、科学的根拠に基づき作成したWEB園児総合支援システムの活用により、『子どもと保護者の真のニーズの見極めと気づき』による「的確な実践」「実践の評価」「よりよい実践へのフィードバック」という支援ループを活用し、『根拠に基づく実践』を継続的に展開し、子どもと保護者の健やかな育ちを支え促すことができるようになる。
2. 園児総合支援システムの活用により、特段の配慮を要する子どもを早期に把握し、他機関と連携した質の高い支援を継続的に実施し、評価することができる。
3. 上記実践と体系化された情報の集積、管理により、さらに強固な根拠を生み出し、継続的かつ着実な保育の質向上のサイクルが展開する。

##### 【 実装状況 】

1. 本システムを活用している保育所は、「子どもの育ちを知り、日常保育に活用する」をモットーに、本システムを日常的に保育の中で活用し、子どものすこやかな育ちを支えていた。
2. 本システムを活用している保育所には、「保育専門職および他職種間の迅速な情報共有」「発達状態の特徴を視覚的かつ客観的に確認する」「特段の配慮を要する子どもが明示され、保育専門職同士が課題を共有したり、該当園児に対する保育のあり方を見直すなど、早期支援とよりよい保育への一助となる」「保護者に対して子どもの特徴をわかりやすく示し、保育の共有および子育て支援に資する」などがみられた。
3. 本システムを導入した保育所、幼稚園は91園であった。本システムに登録された園児数は、44,323名であった。本システムにおける各ツールのデータ回収数は、①一般発達評価票41,893名、②社会的スキル尺度40,779名、③気になる子どもチェックリスト27,621名（気になる行動がある場合のみ）、④育児環境評価票24,874名、⑤保育環境評価票9園であった。システム導入実績からは、今後の展開可能性が期待できる数を得られた。

## (2) 実装された成果の今後の自立的継続性

本システムは、Salesforce.com社のプラットフォーム（クラウドコンピューティング環境下）に設置している。安全性、信頼性のみでなく、「柔軟性」に優れていることから選んだサーバーである。Salesforce.com社は、複数のサーバーを一つのサーバーに見立てる高度な仮想化技術を持っており、システム同士の連携や、カスタマイズを柔軟に行う。かつ、複数サーバーで構築された一つの仮想化されたアプリケーション空間（本システムのこと）を複数のユーザーで共有することから、ユーザー（本研究では保育所、幼稚園、総合園）が増えた場合に、費用がかさむ心配が生じない。本システムの保守にかかる料金は、1ユーザー（①保育所）あたり、600円/月程度である。600円/月程度のサーバー使用料をユーザーに負担していただき、運用を継続することが困難なくできる金額であると考ええる。

また、本実装期間中に、実践の場の保育専門職をメンバーとする「保育パワーアップ研究会」を育成してきた。なおかつWEBを通してユーザーをサポートする仕組みを完成させている。実装期間終了後も「保育パワーアップ研究会」とeラーニングシステムがユーザーをサポートしていくことが可能であると考ええる。

## (3) 実装活動の他地域への普及可能性

### ① 保育所単位から自治体単位での活用への可能性

実装支援期間中、多くの保育所、幼稚園から本システムへの問い合わせをいただいたが、さらに現在では、自治体単位での活用に関する問い合わせを受けている。今後、自治体単位での活用、さらには、妊娠期から思春期までの継続したシステムとして発展していく可能性が考えられる。

### ② 英語圏、中国語圏へ普及可能性

米国、中国、韓国、モンゴル、タイなどの子ども領域の研究者から、本システムに関する問い合わせがある。今後、英語版、中国語版、モンゴル語版等、各国版の作成が期待される。

## (4) 実装活動の社会的副次成果

実装活動の社会的副次成果として、科学的な根拠に基づく実用的な不適切な養育環境への早期支援プログラムとして、広く子育て支援機関で活用できる。なかでも子どもの発達の軌跡や影響要因、および評価指標に関する知見は、実践における定期的な評価の標準化情報として、また専門職の養成研修などに活用できる点で意義深い。さらに昨今高まる一方の子育て支援ニーズに対し、限られた人的経済的資源を効果的に活用し、「根拠に基づく子育て施策策定」への一助として保護者と子どもが安心して利用できる支援の質向上に資するものである。

## (5) 人材育成

実装支援期間中に実施した保育研修会には、「インターネットを通して情報を得た」という若手保育士が多数参加していた。

平成23年度には、全国35の保育所を訪問し、312名の保育専門職に、WEB園児支援システムを活用した質の高い保育に関する説明を行った。312名のうち、半数は園長、主任などの管理職であったが、半数は、若手保育士であった。若手保育士は、一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリストからは、子どもの発達を、育児環境評価票からは、望ましい育児環境を学ぶことにつながった。保育環境評価票からは、子どもの健康に関すること、子どもの権利擁護に関すること、家族をとらえる視点など、子どもを取り巻く望ましい環境について学ぶことができたと考える。

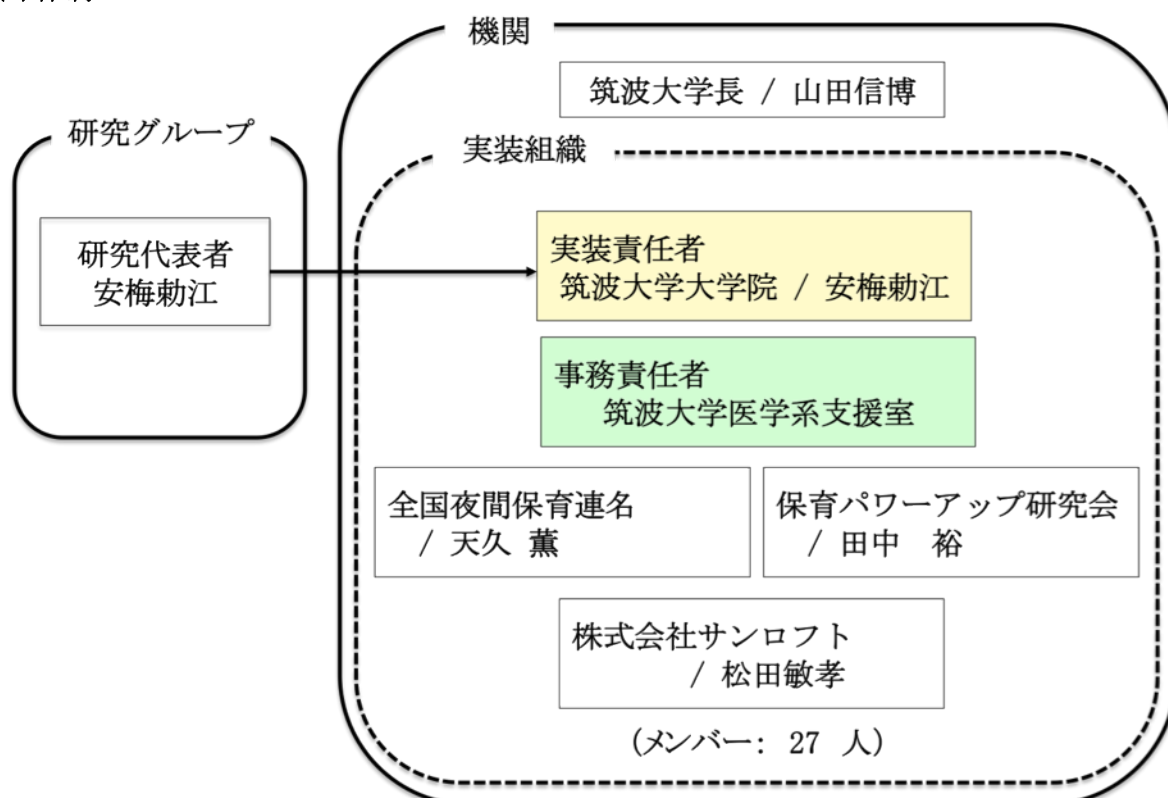
## (6) 実装活動で遭遇した問題とその解決策

保育専門職のニーズにもっとも近い、活用しやすい画面構成や動作、実際の活用に向けた検討には、繰り返しの確認が必要など、当初の予定より時間を要した。「パソコン操作に不慣れな人でも使える」「マニュアルをみなくても操作ができる」画面構成や動作を提案していくことが必要であった。

保育所、幼稚園の中には、パソコン操作に抵抗を示す保育専門職もみられた。対面し、操作方法を説明することで解決した。

## IV 実装活動の組織体制

### (1) 体制





## V 理解普及のための活動とその評価

### (1) 保育所等訪問による普及活動

#### <概要>

近年、情報通信技術を利用して、健康情報を保管し活用する動きが進んでいる。これは、「健康情報のもつ力を最大限に発揮させ、生涯にわたって個人の健康管理に役立てるため」である。しかし、目的達成に向かっているかどうか、その評価が十分であるとは言いがたい。そこで、12年間のコホート研究による科学的根拠に基づいて開発された子どもの発達支援ツール（発達評価、社会的スキル、養育環境など）をWEB上で活用するシステム「WEB 園児管理システム」を開発した。今回は、開発したシステムの展開に向け、特徴や使い方などの説明、システム活用に関するサポートを行うために保育所を訪問した。

年月日	名称	場所	社会的 インパクト
23.10.3	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	保育所聖愛園	7名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	夜間保育所あすなろ	7名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	ひらのドリーム園	3名
23.11.4	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	保育所聖愛園	8名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	夜間保育所あすなろ	8名
23.11.11	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	金沢市教育プラザ	60名
23.11.12	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	双葉第二保育園	3名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	野町保育園	4名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	野町夜間保育園	4名
23.11.28	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	春岡夜間保育園	5名
23.11.29	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	住吉第二保育園	9名
23.12.2	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	夜間保育園ドリーム	4名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	しいの実保育園	7名
23.12.19	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	四恩みろく保育園	3名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	四恩みろく2夜間保育園	3名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	四恩るり保育園	3名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	四恩乳児保育園	3名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	四恩るり2乳児保育園	3名

23.12.30	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	飛島保育園	6名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	飛島第一保育所	13名
23.12.26	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	どろんこ保育園	6名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	第2どろんこ夜間保育園	6名
23.12.26	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	小倉北ふれあい保育所 (夜間部)	6名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	小倉北ふれあい保育所 (乳児部)	6名
24.1.6	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	千代夜間保育園	12名
24.1.12	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	第2やくおうえん	4名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	エール保育園	8名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	青い鳥保育園	8名
24.1.24	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	高松保育園	11名
	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	高松第2保育園	11名
24.1.26	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	熊本夜間保育園	7名
24.1.27	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	島地シティ保育園	7名
24.1.27	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	佐世保ステーション	12名
24.2.23	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	グランマの家保育園	14名
24.3.16	WEB 園児管理システム展開にむけた保育所訪問	松山市保育課	31名

## (2) 研修会、講習会、観察会、懇談会、シンポジウム等

年月日	名称	場所	概要	社会的 インパクト
23. 1. 9	第1回保育パワー アップ研修会	RISTEX 麹町 オフィス 5F 第1会議室	目的： (1) WEBを活用した園児総合支援 システムのコンセプトの共有 (2) 開発中のWEBアプリケーション に関する意見交換 内容： (1) WEBを活用した園児総合支 援システムの概要についての 説明 (2) iPad活用の演習 (3) WEBアプリケーションによる データ管理の説明と演習	26名

23. 2. 7	第 2 回保育パワーアップ研修会	RISTEX 麹町 オフィス 5F 第 1 会議室	目的：開発中の WEB アプリケーションの紹介と意見交換 内容： (1) 保育所訪問報告 -- 園児情報管理の現状と今後の可能性 (2) 工場へのCIM導入 -- 本プロジェクトとの共通点 (3) WEBアプリケーションを用いた情報管理の演習と意見交換 -- 基本情報、一般発達検査、社会的スキル、気になる子どもチェック	18 名
23. 5. 12	WEB 園児管理システム打ち合わせ会議	保健福祉研究 (六本木)	過去データの投入、WEB 園児支援システムシミュレーション版作成に関する打ち合わせ	4 名
23. 6. 23	WEB 園児管理システム打ち合わせ会議	保健福祉研究 (六本木)	過去データ投入の課題検討、WEB 園児支援システムの論点整理	4 名
23. 6. 26	保育パワーアップ WEB 研究会	東洋大学白山 キャンパス	各ツールの仕様変更点の共有	18 名
23. 8. 5	WEB 園児管理システム打ち合わせ会議	筑波大学	ホームページを使用した活用支援、アラートメッセージ、過去データの投入に関する検討	4 名
23. 10. 2	保育パワーアップ WEB 研究会	保育所聖愛園	システムの内容について、システムの使いやすさにつちえ、システムの活用についてのディスカッション	5 名
23. 2. 12	保育パワーアップ WEB 研究会	サイエンスプラザ JST ホール	WEB 園児支援システム管制版と活用状況、連携システムに関する説明	25 名
23. 2. 12	保育研修会 「根拠に基づく室 の高い子育て支援」	サイエンスプラザ JST ホール	「経験的根拠」と「科学的根拠」に基づいた保育評価と保育実践のあり方を、わかりやすく説明いたします。保育を必要とするすべての子どもたちの健全やかな育ちの保障と、保育に携わる専門職の資質向上に資する。	65 名
H24. 6. 24	保育パワーアップ 研修会	筑波大学東京 キャンパス	WEB 園児支援システムの活用、保育 e ラーニングシステムの活用に関する研修を実施した。	21 名
H25. 1. 27	保育パワーアップ 研修会	筑波大学東京 キャンパス	<ul style="list-style-type: none"> <li>WEB園児支援システムを用いた支援設計レポート活用に関する研修を実施した。</li> <li>支援設計レポートを活用した事例検討を行った。</li> </ul>	20 名
H25. 8. 17	保育パワーアップ 研修会	筑波大学東京 キャンパス	<ul style="list-style-type: none"> <li>WEB園児支援システムの基本操作。</li> <li>WEB園児支援システムを活用した質の高い保育実践。</li> </ul>	53 名

(3)新聞報道、TV放映、ラジオ報道、雑誌掲載等

①新聞報道

- ・ パステル IT 新聞、第 023 号 2011 年 03 月号 2011 年 02 月 20 日
- ・ パステル IT 新聞 2011 年 7 月号掲載

「子どもの情報を継続的に収集・分析 科学的根拠に基づく保育」

2011年(平成23年)6月20日 月曜日

パステルIT新聞 2011年7月号 / passtell.jp

毎月20日発行 通巻第028号  
部数: 56,938部  
発行: 株式会社サンロフト  
編集: パステルライン事務局

幼稚園・保育園に「テクノロジーを  
楽しみやすく。」お届けするIT企業  
〒425-0092 静岡県浜松市緑区高島385  
TEL: 054-626-9888  
URL: http://passtell.jp/

楽しい保育のアイデアひらめく♪  
**パステルIT新聞**  
Copyright © 2011 SUNLOFT CORP.

**子どもの情報を継続的に収集・分析  
科学的根拠に基づく保育**

子どもの気になる行動や保護者のサインを、どのように受け止めて対処するか。保育士の質向上を掲げ、「科学的根拠に基づく実践」を推進する保育パワーアップ研究会では、子どもの情報を収集・分析する「WEB園児支援システム」を開発中です。

「プロの保育」を追究する保育パワーアップ研究会では、筑波大学大学院の安梅勲江教授の研究室と連携し、過去十二年間にわたる「ポート研究」特定の人々を長期調査し、その要因との関係を分析する。よって、子どもの健やかな成長に影響する要因と支援のあり方を科学的に分析してきました。全国三万六千人の調査を研究チームが専門的に分析して得た「科学的な根拠」は、保育士の運営から適切な判断に活かされています。具体的には、「発達評価」「育児環境評価」「保育環境評価」「気になる子ども支援」社会的スキル尺度」という五つのツールを用います。

加は社会問題のひとつで、孤立した環境で子育てに戸惑う保護者、発達障害や虐待など特段の配慮を要する子どもたちの増える時代になりました。

「保育士にはより専門的な判断や対処が求められる時代になりました。」

「プロの保育」を追究する保育パワーアップ研究会では、筑波大学大学院の安梅勲江教授の研究室と連携し、過去十二年間にわたる「ポート研究」特定の人々を長期調査し、その要因との関係を分析する。よって、子どもの健やかな成長に影響する要因と支援のあり方を科学的に分析してきました。全国三万六千人の調査を研究チームが専門的に分析して得た「科学的な根拠」は、保育士の運営から適切な判断に活かされています。具体的には、「発達評価」「育児環境評価」「保育環境評価」「気になる子ども支援」社会的スキル尺度」という五つのツールを用います。

今月の紙面

1. 子どもの情報を継続的に収集・分析 科学的根拠に基づく保育
2. iPadにカメラ
3. 楽しい保育のアイデアひらめく♪ オリジナル教材をへんげよう
4. 子どもと一緒に読みたい絵本 みんなで選ぼう

「いるか」作:みいるちゃん

iPadにも対応の「WEB園児支援システム」の画面。電源を押すとすぐに起動し、持ち運びもできるため、子どもたちの気になる行動を速やかにチェックできる。

- ・ パステル IT 新聞 2012 年 4 月号掲載  
筑波大学大学院 国際発達ケア研究室が主催「根拠に基づく保育を考える」

② 雑誌掲載

- ・ サイエンスポータル編集ニュース、2010 年 9 月 29 日
- ・ 助産雑誌 vol.66 no.8 / August 2012 (医学書院)

WEB を活用した園児支援システムの紹介

**WEB を活用した園児支援システム**

保育パワーアップ研究会 開発  
無料(2013年3月以降は、サーバー使用料として600円/月程度がかかる見込み)  
保育パワーアップ研究会

12年間の全国保育コホート(3000名パネルコホート)研究による科学的根拠に基づき開発した5つのツール(発達評価, 社会的スキル尺度, 気になる子ども支援ツール, 育児環境評価, 保育環境評価)をWEBアプリケーション化し、より活用しやすく、柔軟性および汎用性の高い形で提供するシステム。  
WEBブラウザを使っているため成果を視覚的にとらえやすく、インターネット接続があればパソコン、タブレットなど端末を問いません。  
言語: 日本語  
条件: インターネットに接続できる環境があること。http://childnet.me/web.html

(4)論文発表 (国内誌 1 件、国際誌 23 件)

1. Validity and Reliability of the Social Skill Scale (SSS) as an Index of Social Competence for Preschool Children, Anne T, Journal of Health Science, 査読有, 3(1), 5-10. 2013
2. Validity and Reliability of the Index of Active Listening (IAL), Anne T, Journal of Applied Medical Sciences, 査読有, 2(2), 21-29, 2013
3. Validity and Reliability of the Index of Child Care Environment (ICCE), Anne T, Public Health Frontier, 査読有, 2(6), 2013
4. Strengths and Difficulties of 30-month-olds and Features of the Caregiver-Child Interaction, Sugisawa Y, Tanaka E, Shinohara R, Tong L, Watanabe T, Yato Y, Yamakawa N, Anne T, Journal of Health Science, 査読有, 3(2), 5-10, 2013
5. Effects of Wood Education in a Nursery School with a Focus on Changes in Children and Caregivers' Drawings, Mochizuki Y, Gan-Yadam A, Anne T, Journal of Psychology and Behavioral Science, 査読有, 3(6), 2013
6. Factors related to Social Competence Development of thirty-month-old; Longitudinal Perspective, Tanaka E, Tomisaki E, Shinohara R, Sugisawa Y, Tong L, Watanabe T, Onda Y, Yauchi Y, Hirano M, Mochizuki Y, Morita K, Gan-Yadam A, Yato Y, Yamakawa N, Anne T, Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services, 査読有, 19(1), 21-30, 2013
7. Health of School-Aged Children in 11+ Hours of Center-Based Care, Anne T, Shinohara R, Sugisawa Y, Tong L, Tanaka E, Tomisaki E, Watanabe T, Tokutake K, Mochizuki Y, Matsumoto M, Sugita C, Segal U, Creative Education, 査読有, 3(2), 263-268, 2012
8. Does night care affect development? A five-year follow-up, Anne T, Tanaka E, Shinohara R, Sugisawa Y, Watanabe T, Tomisaki E, Segal U, Education, 査読有, 2(5), 143-147, 2012
9. Validity and Reliability of the Interaction Rating Scale between Children (IRSC) by Using Motion Capture Analysis of Head Movement, Anne T, Sugisawa Y, Shinohara R, Matsumoto M, Watanabe T, Tokutake K, Tomisaki E, Mochizuki H, Tanaka E, Okazaki S, Koeda T, Sadato N, Public Health Research, 査読有, 42(10), 2457-2478, 2012
10. Early Development of Empathy in Toddlers: Effects of Daily Parent-Child Interaction and Home-Rearing Environment, Tong L, Sugisawa Y, Shinohara

- R, Tanaka E, Anme T, *Journal of Applied Psychology*, 査読有, 42(3), 2457-2478, 2012
11. Influence of Maternal Praise on Developmental Trajectories of Early Childhood Social Competence, Shinohara R, Sugisawa Y, Tanaka E, Anme T, *Creative Education*, 査読有, 3(4), 533-539, 2012
  12. Parenting : Challenges, Practices and Cultural Influences From Japanese Cohort Study, Anme T, Nova Science Publishers, 査読有, 14, 225-232, 2012
  13. Factors related to Social Competence Development of thirty-month-old; Longitudinal Perspective, Tanaka E, Tomisaki E, Shinohara R, Sugisawa Y, Tong L, Watanabe T, Onda Y, Yauchi Y, Hirano M, Mochizuki Y, Morita K, Gan-Yadam A, Yato Y, Yamakawa N, Anme T, *Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services*, 査読有, 19(1), 21-30, 2012
  14. Gender differences of children' s social competence development from eighteen month to seven-year-old using interaction rating scale (IRS), Anme T, Shinohara R, Sugisawa Y, Watanabe T, Tong L, Tanaka E, Tomisaki E, Mochizuki H, Tokutake K, and Japan Children' s Study Group, *Psychology of Gender Differences*, Nova Science Publishers, 査読有, 59-66, 2012
  15. クラウドを活用した園児への総合支援システムの開発 -ヘルスリテラシーの視点から-, 渡辺多恵子, 田中笑子, 富崎悦子, 望月由紀子, 徳竹健太郎, 安梅勅江, 小児保健研究, 査読有, 71(5), 780-786, 2012
  16. A pilot study of social competence assessment using Interaction Rating Scale Advanced (IRSA), Anme T, Watanabe T, Tokutake K, Tomisaki E, Mochizuki H, Tanaka E, Wu B, Nanba M, Shinohara R, Sugisawa Y, *ISRN Pediatrics*, 査読有, 2011, doi:10.5402/2011/ 272913, 2011
  17. Does a Mother' s Praise Foster Her Child' s Social Competence, Shinohara R, Sugisawa Y, Tong L, Tanaka E, Watanabe T, Onda Y, Kawashima Y, Yato Y, Yamakawa N, Anme T and Japan Children' s Study Group, *Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services*, 査読有, 18(1), 125-134, 2011
  18. Predictors of working mother' s parenting practices in infancy on the competences of vocabulary and communication of two-year- old children, Tong L, Shinohara R, Sugisawa Y, Tanaka E, Watanabe T, Hirano M, Tomisaki E, Gan-Yadam A, Morita K, Onda Y, Kawashima Y, Nanba M, Tokutake K, Wu B, Anme T, *Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services*, 査読有, 18(1), 94-101, 2011
  19. Factors related with child developmental outcomes in center-based

- care-focusing on maternal stress-, Maruyama A, Anme T, Suzuki E, *Medicine and Biology*, 査読有, 155(8), 495-501, 2011
20. Relationship between early mother-child interaction and children's social competence development at 42 months old: A longitudinal perspective, Tanaka E, Tomisaki E, Shinohara R, Sugisawa Y, Tong L, Watanabe T, Hirano M, Onda Y, Mochizuki Y, Kawashima Y, Morita K, Gan-Yadam A, Tokutake K, Nanba M, Yato Y, Yamakawa N, Anme T and Japan Children's Study Group, *Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services*, 査読有, 18(1), 69-76, 2011
21. The trajectory of children's social skill from 2 to 4 year-olds and the child's waking up patterns, Tomisaki E, Tanaka E, Shinohara R, Sugisawa Y, Hirano M, Watanabe T, Tong L, Onda Y, Mochizuki Y, Morita K, Kawashima Y, Gan-Yadam A, Wu B, Tokutake K, Nannba M, Anme T, *Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services*, 査読有, 18(1), 77-83, 2011
22. Maternal stress, parenting factors, experiences in day care, and developmental outcomes in 5-year-old children in day care in Japan, Ishii Y, Maruyama A, Anme T, McCall M, *Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services*, 査読有, 18(1), 148-159, 2011
23. Child development and childcare in Japan, Anme T, Segal U, *Journal of Early Childhood Research*, 査読有, 8(2), 193-210, 2010
24. Effectiveness of Japan's extended/night child care: A five-year follow up, Anme T, Tanaka H, Shinohara R, Sugisawa Y, Tanaka E, Tong L, Watanabe T, Onda Y, Kawashima Y, Tomisaki E, Mochizuki, *Procedia Social and Behavioural Sciences*, 査読有, 2, 5573-5580, 2010

## (5) WEB サイトによる情報公開

- ①保育パワーアップ研究会 <http://childnet.me/>
- ②International Community Care and Lifespan Development  
<http://square.umin.ac.jp/anme/>
- ③子育て子育てエンパワメントに向けた発達コホート研究  
<http://plaza.umin.ac.jp/~empower/e.cd/>

## (6) 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

- ①招待講演 （国内会議 1 件、国際会議 1 件）
- ②口頭講演 （国内会議 2 件、国際会議          件）
  - 1. Tokie Anme, Plasticity, Culture, and Empowerment: Cohort studies on the plasticity and related precursors, Parent-infant bonding across mammalian species and human cultures. Riken Institute, 2013.2.6.
  - 2. 安梅勅江. 「子育て子育てエンパワメント WEB 活用の可能性」. 第9回 日本子ども学会議（学術集会）. JST 東京本部別館（東京）. 2012年10月20日～21日.
  - 3. 渡辺多恵子. 根拠に基づく保育専門性向上 - WEB園児総合支援システム活用法 . 第65回日本保育学会. 東京家政大学（東京）. 2012年5月4日～5日.
  - 4. 渡辺多恵子. 保育専門職の専門性に関する研究. 第66回日本保育学会. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部. 2013年5月11日～12日.
- ③ポスター発表 （国内会議 3 件、国際会議          件）
  - 1. 渡辺多恵子. インターネットを活用した園児総合支援システム -根拠に基づく支援ツールを活用した園児情報の集積と活用のシステム化-. 第64回 日本保育学会、玉川大学（東京）. 2011年5月21日～22日
  - 2. 渡辺多恵子. WEB を活用した園児総合支援システムの開発 - 園児情報の電子化と基本概念の整理 -. 第70回 日本公衆衛生学会、秋田アトリエ（秋田）. 2011年10月19日～21日
  - 3. 渡辺多恵子. 保育専門職用ヘルスリテラシー尺度の開発. 第71回日本公衆衛生学会. サンルート国際ホテル山口（山口）. 2012年10月24日～26日.



## VI 結び

### 1 WEBを活用した園児総合支援システムの開発

WEBを活用した園児情報記録システムを開発した。保育専門職は、こどもの発達状況の特徴を、視覚的に確認し、配慮を要する子どもや保護者を早期把握に把握し、根拠に基づく支援を行うことが可能となった。保護者に対しては、わかりやすく子どもの状態を示すことができ、保護者と保育専門職が、子どもに関する情報を、共有することができる。本システムは、連結可能、匿名化された園児情報を継続的に集積する。これにより研究者は、園児の発達に関する経時的な情報記録を活用し、園児の発達に関するさらなる根拠を生み出し、システムにフィードバックすることが可能となった。

### 2 本システムの内容的妥当性の評価

アセスメントに必要な園児情報の収集と理解にあたる【園児情報の基本的活用】、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックにあたる【園児情報の発展的活用】の2つを重要カテゴリーとして位置づけ、本システムの機能を整理した結果、本システムは、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解、アセスメント、目標の明確化、支援、評価、継続的な情報活用、関連・因果関係の検証というPDCAサイクル展開に寄与する機能を内包する可能性が示唆された。

### 3 「園児情報活用スキル尺度」の開発と信頼性・妥当性の検証

フォーカス・グループ・インタビュー法を用いた質的研究と、質問紙調査による量的研究のトライアングレーションにより、園児情報活用尺度の開発を行った。因子分析の結果、想定した2因子構造が得られ、単純構造に近い因子パターンを有している結果から因子的妥当性が確認された。第1因子は、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに適用されるスキル【園児情報の発展的活用（12項目）】、第2因子は、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキル【園児情報の基本的活用（14項目）】と解釈された。2因子26項目で構成される園児情報活用尺度が開発された。尺度および因子間の内的整合性を検討するために算出したCronbachの $\alpha$ 係数は高い値を示し（第1因子 $\alpha=0.93$ 、第2因子 $\alpha=0.90$ 、総合 $\alpha=0.94$ ）、内的一貫性の側面から信頼性が確認された。経験年数、保育環境評価票との相関分析により基準関連妥当性が確認され、Communicative and Critical health literacy尺度得点との相関分析により構成概念妥当性が確認された。質問項目作成プロセスから内容的妥当性が確認された。園児情報をPDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出すスキルである「園児情報活用」を適切に測定できる可能性が示唆された。

#### 4 本システムの継続的データ集積可能性の評価

本システムの導入実績から、本システムのデータ集積可能性と本システムの改善点を検討した。本システムを導入した保育所、幼稚園は91園であった。本システムに登録された園児数は、44,323名であった。本システムにおける各ツールのデータ回収数は、①一般発達評価票41,893名、②社会的スキル尺度40,779名、③気になる子どもチェックリスト27,621名（気になる行動がある場合のみ）、④育児環境評価票24,874名、⑤保育環境評価票9園であった。システム導入実績からは、今後の展開可能性が期待できるサンプルが得られた。園児の発達に関する経時的な情報記録を活用し、子どもの発達軌跡を明らかにするなど、より強固なエビデンスが得られることが期待される。

#### 5 子どもと保護者のための支援ループ展開の確認

本システム完成と同時に本システムの導入を行った3園の保育士に、本システム活用状況をたずねた。「保育専門職だからできる評価、支援」「評価、支援は日常の保育の中に」をキーワードに、「子どもの育ちを知り、日常保育に活用する」をモットーに、本システムを日常的に保育の中で活用し、子どものすこやかな育ちを支えていた。B園では、特に、本システムのレポート機能（発達の状況などを視覚的に表示）を活用し、経験的根拠の立証、保育への反映、職員間での共有のほか、保護者と子どもの発達の状況を共有することに活用していた。C園では、障がい児（気になる子）を含めたインクルーシブ保育の中で、「子どもを理解すること」に本システムが活用されていた。本システムの活用による保育の質向上への効果が期待される。

#### 6 今後の自立的継続

本システムは、Salesforce.com社のプラットフォーム（クラウドコンピューティング環境下）に設置している。安全性、信頼性のみでなく、「柔軟性」に優れていることから選んだサーバーである。Salesforce.com社は、複数のサーバーを一つのサーバーに見立てる高度な仮想化技術を持っており、システム同士の連携や、カスタマイズを柔軟に行う。かつ、複数サーバーで構築された一つの仮想化されたアプリケーション空間（本システムのこと）を複数のユーザーで共有することから、ユーザー（本研究では保育所、幼稚園、総合園）が増えた場合に、費用がかさむ心配が生じない。本システムの保守にかかる料金は、1ユーザー（①保育所）あたり、600円/月程度である。600円/月程度のサーバー使用料をユーザーに負担していただき、運用を継続することが困難なくできる金額であると考えられる。

また、本実装期間中に、実践の場の保育専門職をメンバーとする「保育パワーアップ研究会」を育成してきた。なおかつ、WEBを通してユーザーをサポートする仕組みを完成させている。実装期間終了後も、「保育パワーアップ研究会」とeラーニングシステムが、ユー

ザーをサポートしていくことが可能であると考える。

また、実装支援期間中、多くの保育所、幼稚園から本システムへの問い合わせをいただいた。さらに現在は、自治体単位での活用に関する問い合わせを多く受けている。今後、自治体単位での活用、さらには、妊娠期から思春期までの継続したシステムとして発展していく可能性が考えられる。

